平成22(2010)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

善田傍示ヶ崎遺跡
松原田中遺跡
松原古墳群
良田山廻所在遺跡
良田稲場所在遺跡
良田中道所在遺跡
良田山廻古墳群
良田所在古墳群
大桷遺跡
天神山遺跡
秋里遺跡
橋本所在遺跡
卯垣所在遺跡
用瀬安蔵所在遺跡
鳥取城下町関連遺跡
太閤ヶ平
鳥取城跡第24次調査
（鳥取城堀端）
別府所在遺跡
岩倉所在遺跡

2011

鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成21年度及び平成22年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査の記録です。

鳥取市は平成16年11月に周辺８町村と合併し、人口約20万人を擁する山陰地方最大の都市になりました。鳥取市内の平野部をはじめ、丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

なお、この報告書は不十分なところも多くありますが、私たちの郷土の理解に役立てていただくと共に、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成23年３月

鳥取市教育委員会
教育長　中　川　俊　隆

例　　言

1．本書は平成21年度及び平成22年度に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。

2．平成21年度に実施した調査は天神山遺跡、善田傍示ヶ崎遺跡、松原田中遺跡、用瀬安蔵所在遺跡、太閤ヶ平、鳥取城下町関連遺跡、鳥取城跡第24次調査（鳥取城堀端）である。

3．平成22年度に実施した調査は良田山廻所在遺跡、良田山廻古墳群、良田所在古墳群、良田中道所在遺跡、良田稲場所在遺跡、卯垣所在遺跡、秋里遺跡、橋本所在遺跡、松原古墳群、大桷遺跡、鳥取城下町関連遺跡、別府所在遺跡、岩倉所在遺跡である。

4．第３章自然科学分析はパリノ・サーヴェイ㈱、㈱古環境研究所に委託した。土壌サンプルの採取は委託者が行ったが、放射性炭素年代測定のサンプルは受託者が行った。良田中道所在遺跡は第４トレンチ、良田山廻所在遺跡は第２トレンチで分析を実施した。なお、㈱古環境研究所に委託した良田平田遺跡は良田山廻所在遺跡のことである。

5．善田傍示ヶ崎遺跡のトレンチ番号は平成19年度から通し番号を使用している。松原古墳群、大桷遺跡、天神山遺跡のトレンチ番号は平成20年度から通し番号を使用している。良田山廻古墳群、鳥取城下町関連遺跡のトレンチ番号は平成21年度から通し番号を使用している。

6．本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海抜標高である。

7．本書における略号はSD：溝状遺構　SK：土坑　P：ピット　である。

8．発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。

9．発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　鳥取市教育委員会

事 務 局　鳥取市教育委員会事務局文化財課

調査担当　谷岡陽一　坂田邦彦　細田隆博　前田　均　山田真宏　谷口恭子　神谷伊鈴

10．発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々からご指導・ご助言並びにご協力をいただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

高田健一　錦織　勤　中森　祥　八峠　興　鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県教育委員会事務局文化財課　㈶鳥取県教育文化財団

本　文　目　次

序
例言

第１章　発掘調査の経緯と経過 …… 1

第２章　調査の結果 …… 3
　第１節　善田傍示ヶ崎遺跡 …… 3
　第２節　松原田中遺跡 …… 7
　第３節　松原古墳群 …… 14
　第４節　良田山廻所在遺跡 …… 16
　第５節　良田稲場所在遺跡 …… 19
　第６節　良田中道所在遺跡 …… 23
　第７節　良田山廻古墳群 …… 27
　第８節　良田所在古墳群 …… 29
　第９節　大桷遺跡 …… 32
　第10節　天神山遺跡 …… 35
　第11節　秋里遺跡 …… 41
　第12節　橋本所在遺跡 …… 44
　第13節　卯垣所在遺跡 …… 48
　第14節　用瀬安蔵所在遺跡 …… 51
　第15節　鳥取城下町関連遺跡 …… 52
　第16節　太閤ヶ平 …… 56
　第17節　鳥取城跡第24次調査（鳥取城堀端） …… 57
　第18節　別府所在遺跡 …… 59
　第19節　岩倉所在遺跡 …… 60

第３章　自然科学分析 …… 63

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査遺跡位置図 …… 2
第２図　善田傍示ヶ崎遺跡 調査トレンチ位置図 …… 3
第３図　善田傍示ヶ崎遺跡 第７・第８トレンチ出土遺物実測図 …… 5
第４図　善田傍示ヶ崎遺跡 第６・第７トレンチ実測図 …… 6
第５図　善田傍示ヶ崎遺跡 第８トレンチ実測図 …… 7
第６図　松原田中遺跡 調査トレンチ位置図 …… 8
第７図　松原田中遺跡 第１トレンチ実測図 …… 10
第８図　松原田中遺跡 第２トレンチ実測図 …… 11
第９図　松原田中遺跡 第３トレンチ実測図 …… 11
第10図　松原田中遺跡 第１・第２トレンチ出土遺物実測図(1) …… 12
第11図　松原田中遺跡 第３トレンチ出土遺物実測図(2) …… 13
第12図　松原古墳群 調査トレンチ位置図 …… 14
第13図　松原古墳群 第21・第22トレンチ実測図 …… 15
第14図　良田山廻所在遺跡 調査トレンチ位置図 …… 16
第15図　良田山廻所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図 …… 18
第16図　良田稲場所在遺跡 調査トレンチ位置図 …… 19
第17図　良田稲場所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図 …… 21
第18図　良田稲場所在遺跡 第３・第４トレンチ実測図 …… 22
第19図　良田中道所在遺跡 調査トレンチ位置図 …… 23
第20図　良田中道所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図 …… 25
第21図　良田中道所在遺跡 第３・第４トレンチ実測図 …… 26
第22図　良田山廻古墳群 調査トレンチ位置図 …… 27
第23図　良田山廻古墳群 第５・第６・第７トレンチ実測図 …… 28
第24図　良田所在古墳群 調査トレンチ位置図 …… 30
第25図　良田所在古墳群 第１・第２・第３・第４・第５トレンチ実測図 …… 31
第26図　大桷遺跡 調査トレンチ位置図 …… 32
第27図　大桷遺跡 第15トレンチ実測図 …… 33
第28図　大桷遺跡 第16トレンチ実測図 …… 34
第29図　大桷遺跡 第16トレンチ出土遺物実測図 …… 35
第30図　天神山遺跡 調査トレンチ位置図 …… 36
第31図　天神山遺跡 第５トレンチ実測図 …… 37
第32図　天神山遺跡 第６・第７トレンチ実測図 …… 38
第33図　天神山遺跡 第５・第７トレンチ出土遺物実測図 …… 40
第34図　秋里遺跡 調査トレンチ位置図 …… 41
第35図　秋里遺跡 第１・第２トレンチ実測図 …… 42
第36図　秋里遺跡 第３トレンチ実測図 …… 43
第37図　秋里遺跡 第３トレンチ出土遺物実測図 …… 44
第38図　橋本所在遺跡 調査トレンチ位置図 …… 44
第39図　橋本所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図 …… 46
第40図　橋本所在遺跡 第３・第４・第５トレンチ実測図 …… 47
第41図　卯垣所在遺跡 調査トレンチ位置図 …… 48
第42図　卯垣所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図 …… 50

第43図　卯垣所在遺跡 第１・第２トレンチ出土遺物実測図 …… 50
第44図　用瀬安蔵所在遺跡 調査トレンチ位置図 …… 51
第45図　用瀬安蔵所在遺跡 第１トレンチ実測図 …… 51
第46図　鳥取城下町関連遺跡 調査トレンチ位置図 …… 52
第47図　鳥取城下町関連遺跡 第１トレンチ実測図 …… 53
第48図　鳥取城下町関連遺跡 第２・第３トレンチ実測図 …… 54
第49図　鳥取城下町関連遺跡 第４トレンチ実測図 …… 55
第50図　太閤ヶ平 調査トレンチ位置図 …… 56
第51図　太閤ヶ平 第１トレンチ実測図 …… 56
第52図　鳥取城跡第24次調査 調査トレンチ位置図 …… 57
第53図　鳥取城跡第24次調査 第１トレンチ実測図 …… 58
第54図　鳥取城跡第24次調査 第２トレンチ実測図 …… 58
第55図　別府所在遺跡 調査トレンチ位置図 …… 59
第56図　別府所在遺跡 第１トレンチ実測図 …… 60
第57図　岩倉所在遺跡 調査トレンチ位置図 …… 60
第58図　岩倉所在遺跡 第１トレンチ実測図 …… 61
第59図　岩倉所在遺跡 第２トレンチ実測図 …… 61
第60図　岩倉所在遺跡 第２トレンチ出土遺物実測図 …… 62
第61図　調査地点の層序・資料採取位置図 …… 63
第62図　植物珪酸体含量の層位的変化 …… 66
第63図　暦年較正結果 …… 71
第64図　プラント・オパール分析結果 …… 74

表　目　次

表１　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 65
表２　植物珪酸体含量 …… 67
表３　測定試料及び処理 …… 70
表４　測定結果 …… 71
表５　プラント・オパール分析結果 …… 74

図　版　目　次

図版１
善田傍示ヶ崎遺跡 調査地遠景(北東から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第６トレンチ掘下げ状況(北から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第６トレンチ掘下げ状況(西から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第６トレンチ南壁断面(北から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第６トレンチ東壁断面(西から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第７トレンチ掘下げ状況(東から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第７トレンチ掘下げ状況(北から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第７トレンチ西壁断面(東から)
図版２
善田傍示ヶ崎遺跡 第７トレンチ南壁断面(北から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第８トレンチ調査地(東から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第８トレンチ掘下げ状況(西から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第８トレンチ東壁断面(西から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第８トレンチ南壁断面(北東から)
善田傍示ヶ崎遺跡 第８トレンチ遺物出土状況(南東から)
松原田中遺跡 調査地遠景(北西から)
松原田中遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(南西から)
図版３
松原田中遺跡 第１トレンチ南東壁断面(西から)
松原田中遺跡 第１トレンチ北東壁断面(南西から)
松原田中遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(南東から)
松原田中遺跡 第２トレンチ北東壁断面(南から)
松原田中遺跡 第２トレンチ北東壁断面(南西から)
松原田中遺跡 第２トレンチ南東壁断面(北西から)
松原田中遺跡 第２トレンチ遺物出土状況(南東から)
松原田中遺跡 第２トレンチ遺物出土状況(北東から)
図版４
松原田中遺跡 第２トレンチ遺物出土状況(南東から)
松原田中遺跡 第２トレンチSK-02遺物出土状況(南西から)
松原田中遺跡 第２トレンチＰ-01柱根出土状況(西から)
松原田中遺跡 第３トレンチ第４層遺構検出状況
(南東から)
松原田中遺跡 第３トレンチ第４層ピット検出状況
(北西から)
松原田中遺跡 第３トレンチ掘下げ状況(南東から)
松原田中遺跡 第３トレンチ北東壁断面(南から)
松原田中遺跡 第３トレンチ南西壁断面(東から)
図版５
松原田中遺跡 第３トレンチ南東壁断面(北西から)
松原田中遺跡 第３トレンチ北西壁断面(南東から)
松原田中遺跡 第３トレンチSK-02断面(北東から)
松原田中遺跡 第３トレンチSK-02遺物出土状況(北東から)
松原田中遺跡 第３トレンチSK-02遺物出土状況(南西から)
松原古墳群 調査地遠景(北から)
松原古墳群 第21トレンチ掘下げ状況(北東から)
松原古墳群 第22トレンチ掘下げ状況(南西から)
図版６
良田山廻所在遺跡 調査地遠景(北から)
良田山廻所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(西から)
良田山廻所在遺跡 第１トレンチ南壁断面(北西から)
良田山廻所在遺跡 第１トレンチ東壁断面(西から)
良田山廻所在遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(東から)
良田山廻所在遺跡 第２トレンチ南壁断面(北東から)
良田山廻所在遺跡 第２トレンチ西壁断面(東から)
良田稲場所在遺跡 調査地遠景(北東から)
図版７
良田稲場所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(西から)
良田稲場所在遺跡 第１トレンチ南壁断面(北西から)
良田稲場所在遺跡 第１トレンチ東壁断面(西から)
良田稲場所在遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(東から)
良田稲場所在遺跡 第２トレンチ南壁断面(北東から)
良田稲場所在遺跡 第２トレンチ西壁断面(南東から)
良田稲場所在遺跡 第３トレンチ掘下げ状況(東から)
良田稲場所在遺跡 第３トレンチ南壁断面(北西から)
図版８
良田稲場所在遺跡 第３トレンチ西壁断面(東から)
良田稲場所在遺跡 第４トレンチ掘下げ状況(西から)
良田稲場所在遺跡 第４トレンチ東壁断面(西から)
良田稲場所在遺跡 第４トレンチＰ-01断面(西から)
良田中道所在遺跡 調査地遠景(北東から)
良田中道所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(南東から)
良田中道所在遺跡 第１トレンチ北東壁断面(西から)
良田中道所在遺跡 第１トレンチ北西壁断面(南東から)
図版９
良田中道所在遺跡 第１トレンチSK-01検出状況(南東から)
良田中道所在遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(南東から)
良田中道所在遺跡 第２トレンチ北東壁断面(西から)
良田中道所在遺跡 第２トレンチ南東壁断面(北西から)
良田中道所在遺跡 第３トレンチ掘下げ状況(南東から)
良田中道所在遺跡 第３トレンチ北東壁断面(西から)
良田中道所在遺跡 第３トレンチ北西壁断面(南東から)
良田中道所在遺跡 第３トレンチSD-01検出状況(南西から)

図版10
良田中道所在遺跡 第３トレンチSD-02検出状況(南西から)
良田中道所在遺跡 第４トレンチ掘下げ状況(南東から)
良田中道所在遺跡 第４トレンチ北西壁断面(南東から)
良田山廻古墳群 調査地遠景(北西から)
良田山廻古墳群 第５トレンチ掘下げ状況(北西から)
良田山廻古墳群 第６トレンチ掘下げ状況(西から)
良田山廻古墳群 第６トレンチSK-01断面(南から)
良田山廻古墳群 第６トレンチSK-01検出状況(南から)
図版11
良田山廻古墳群 第７トレンチ掘下げ状況(北から)
良田所在古墳群 第１トレンチ掘下げ状況(南西から)
良田所在古墳群 第２トレンチ掘下げ状況(南から)
良田所在古墳群 第３トレンチ掘下げ状況(北東から)
良田所在古墳群 第４トレンチ掘下げ状況(南から)
良田所在古墳群 第５トレンチ掘下げ状況(南東から)
大桷遺跡 第15トレンチ調査地(北東から)
大桷遺跡 第15トレンチ掘下げ状況(北東から)
図版12
大桷遺跡 第15トレンチ南東壁断面(北西から)
大桷遺跡 第15トレンチ南東壁断面(北西から)
大桷遺跡 第16トレンチ調査地(南西から)
大桷遺跡 第16トレンチ掘下げ状況(南西から)
大桷遺跡 第16トレンチ南東壁断面(西から)
大桷遺跡 第16トレンチ北東壁断面(南西から)
大桷遺跡 第16トレンチ遺構検出状況(南西から)
大桷遺跡 第16トレンチSK01検出状況(南東から)
図版13
大桷遺跡 第16トレンチSK-01遺物出土状況(北西から)
大桷遺跡 第16トレンチSK-02検出状況(東から)
天神山遺跡 調査地遠景(北西から)
天神山遺跡 第５トレンチ掘下げ状況(東から)
天神山遺跡 第５トレンチ東壁断面(西から)
天神山遺跡 第５トレンチ西壁断面(東から)
天神山遺跡 第６トレンチ掘下げ状況(東から)
天神山遺跡 第６トレンチ掘下げ状況(南から)
図版14
天神山遺跡 第６トレンチ東壁断面(西から)
天神山遺跡 第６トレンチ西壁断面(東から)
天神山遺跡 第７トレンチ掘下げ状況(東から)
天神山遺跡 第７トレンチ掘下げ状況(南から)
天神山遺跡 第７トレンチ西壁断面(東から)
天神山遺跡 第７トレンチ東壁断面(西から)
天神山遺跡 第７トレンチ溝状遺構検出状況(東から)
天神山遺跡 第７トレンチ溝状遺構検出状況(南から)
図版15
秋里遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(西から)
秋里遺跡 第１トレンチ東壁断面(西から)
秋里遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(北から)
秋里遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(東から)
秋里遺跡 第２トレンチ東壁断面(西から)
秋里遺跡 第２トレンチSD-01断面(南から)
秋里遺跡 第２トレンチSD-01検出状況(北から)
秋里遺跡 第３トレンチ掘下げ状況(東から)
図版16
秋里遺跡 第３トレンチ西壁断面(東から)
橋本所在遺跡 調査地遠景(西から)
橋本所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(東から)
橋本所在遺跡 第１トレンチ北壁断面(南西から)
橋本所在遺跡 第１トレンチ東壁断面(西から)
橋本所在遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(東から)
橋本所在遺跡 第２トレンチ北壁断面(南から)
橋本所在遺跡 第２トレンチ東壁断面(西から)
図版17
橋本所在遺跡 第３トレンチ掘下げ状況(東から)
橋本所在遺跡 第３トレンチ北壁断面(南東から)
橋本所在遺跡 第３トレンチ東壁断面(西から)
橋本所在遺跡 第４トレンチ掘下げ状況(西から)
橋本所在遺跡 第４トレンチ南壁断面(北から)
橋本所在遺跡 第５トレンチ掘下げ状況(東から)
橋本所在遺跡 第５トレンチ南壁断面(北から)
卯垣所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(北西から)
図版18
卯垣所在遺跡 第１トレンチ南壁断面(北から)
卯垣所在遺跡 第１トレンチピット検出状況(北西から)
卯垣所在遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(北東から)
卯垣所在遺跡 第２トレンチ北東壁断面(南西から)
卯垣所在遺跡 第２トレンチ北西壁断面(東から)
用瀬安蔵所在遺跡 調査地遠景(北西から)
用瀬安蔵所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(西から)
用瀬安蔵所在遺跡 第１トレンチ南壁断面(北から)
図版19
鳥取城下町関連遺跡 第１トレンチ(東から)
鳥取城下町関連遺跡 第２トレンチ(南から)

鳥取城下町関連遺跡 第３トレンチ(西から)
鳥取城下町関連遺跡 第２・３トレンチ(南から)
鳥取城下町関連遺跡 第４トレンチ(西から)
太閤ヶ平 調査トレンチ(南西から)
鳥取城跡第24次調査 第１トレンチ(南西から)
鳥取城跡第24次調査 第１トレンチ天井石除去後(北西から)
図版20
鳥取城跡第24次調査 第１トレンチ溝(北東から)
鳥取城跡第24次調査 第２トレンチ(北東から)
鳥取城跡第24次調査 第２トレンチ溝(北東から)
別府所在遺跡 調査トレンチ(東から)
岩倉所在遺跡 調査地遠景
岩倉所在遺跡 第１トレンチ
岩倉所在遺跡 第２トレンチ
図版21
善田傍示ヶ崎遺跡出土遺物
松原田中遺跡出土遺物
図版22
松原田中遺跡出土遺物
大桷遺跡出土遺物
天神山遺跡出土遺物
図版23
天神山遺跡出土遺物
秋里遺跡出土遺物
卯垣所在遺跡出土遺物
岩倉所在遺跡出土遺物

第１章　発掘調査の経緯と経過

鳥取市は、周辺８町村との合併により、面積765.66㎢、人口20万人余りを擁する都市となった。

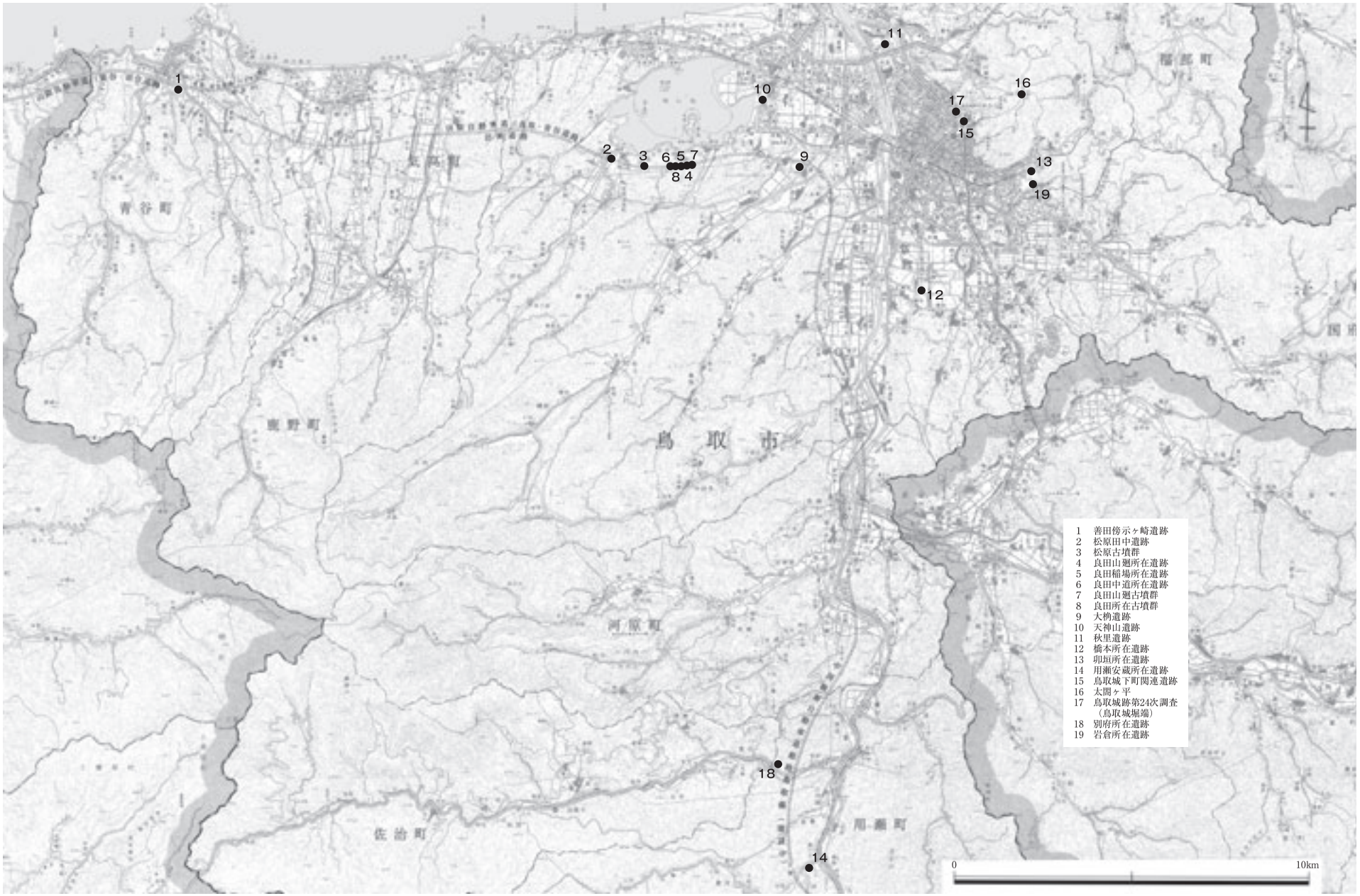
鳥取市域の遺跡数も、市域の拡大や青谷町、国府町など多くの遺跡を有する町との合併によってその数を増し、古墳、集落跡、遺物散布地など4,600箇所以上となった。このような中、現在進められている鳥取西道路の建設は、市域でも有数の遺跡密集地である湖山池南岸に計画されており、計画路線内における試掘調査の増加とともに、新たな遺跡の存在も明らかとなり遺跡数の増加へとつながっている。

今回の調査遺跡は、鳥取西道路整備に伴って実施した松原田中遺跡、松原古墳群、良田山廻所在遺跡、良田稲場所在遺跡、良田中道所在遺跡、良田山廻古墳群、良田所在古墳群、河川改修に伴う善田傍示ヶ崎遺跡、電話基地局整備に伴う用瀬安蔵所在遺跡、道路整備に伴う大桷遺跡、橋本所在遺跡、卯垣所在遺跡、別府所在遺跡、岩倉所在遺跡、下水道整備に伴う天神山遺跡、無線基地局整備に伴う太閤ヶ平、駐車場整備に伴う鳥取城下町関連遺跡、区画整理事業に伴う秋里遺跡、バス停整備事業に伴う（第24次）鳥取城堀端の19遺跡である。

試掘調査はトレンチ掘削による遺構・遺物の包含状況の確認に主眼をおいて実施し、層ごとの遺構確認と包含遺物の把握を行いながら掘り下げを行った。トレンチ掘り下げは基本的に人力で行ったが、善田傍示ヶ崎遺跡第８トレンチ、良田中道所在遺跡、大桷遺跡の第16トレンチ、天神山遺跡、秋里遺跡第３トレンチ、太閤ヶ平の表土については重機を用いて除去し、その後人力による掘り下げ調査を行った。

整理作業は主に各遺跡の調査終了後に行い、本格的な報告書作成は平成22年12月から平成23年２月に実施した。本報告の調査総面積は759.6㎡である。各調査遺跡のトレンチ(Tr)数、調査面積、現地調査期間は次のとおりである。なお、善田傍示ヶ崎遺跡、松原田中遺跡、天神山遺跡、鳥取城下町関連遺跡、太閤ヶ平、鳥取城跡第24次調査（鳥取城堀端）は平成21年度に現地調査を行った遺跡である。

遺跡名	Tr数	調査面積	現地調査期間
1 善田傍示ヶ崎遺跡	3	85.2	20100303～0319
2 松原田中遺跡	3	63.0	20100305～0318
3 松原古墳群	2	22.2	20100811～0817
4 良田山廻所在遺跡	2	42.0	20100426～0507
5 良田稲場所在遺跡	4	69.5	20100506～0513
6 良田中道所在遺跡	4	103.2	20100518～0602
7 良田山廻古墳群	3	29.1	20100514・20101018～1019
8 良田所在古墳群	5	38.4	20100924～0927・20101118
9 大桷遺跡	2	50.0	20100902～0910
10 天神山遺跡	3	14.5	20100222～0301
11 秋里遺跡	3	42.4	20100514～0520・20101216～1221
12 橋本所在遺跡	5	88.0	20100712～0728・20101027～1111
13 卯垣所在遺跡	2	21.3	20100427～0507
14 用瀬安蔵所在遺跡	1	10.5	20100319
15 鳥取城下町関連遺跡	4	19.9	20091207～1214・20100909～0917
16 鳥取城第24次調査（鳥取城堀端）	2	9.7	20100125～0129
17 太閤ヶ平	1	12.1	20091214～1217
18 別府所在遺跡	1	8.6	20101001
19 岩倉所在遺跡	2	30.0	20101110～1118


1
2
3
6 5 7
8 4
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
青谷町
鹿野町
鳥取市
河原町
佐治町
0
10km
1 善田傍示ヶ崎遺跡
2 松原田中遺跡
3 松原古墳群
4 良田山廻所在遺跡
5 良田稲場所在遺跡
6 良田中道所在遺跡
7 良田山廻古墳群
8 良田所在古墳群
9 大桷遺跡
10 天神山遺跡
11 秋里遺跡
12 橋本所在遺跡
13 卯垣所在遺跡
14 用瀬安蔵所在遺跡
15 鳥取城下町関連遺跡
16 太閤ヶ平
17 鳥取城跡第24次調査（鳥取城堀端）
18 別府所在遺跡
19 岩倉所在遺跡

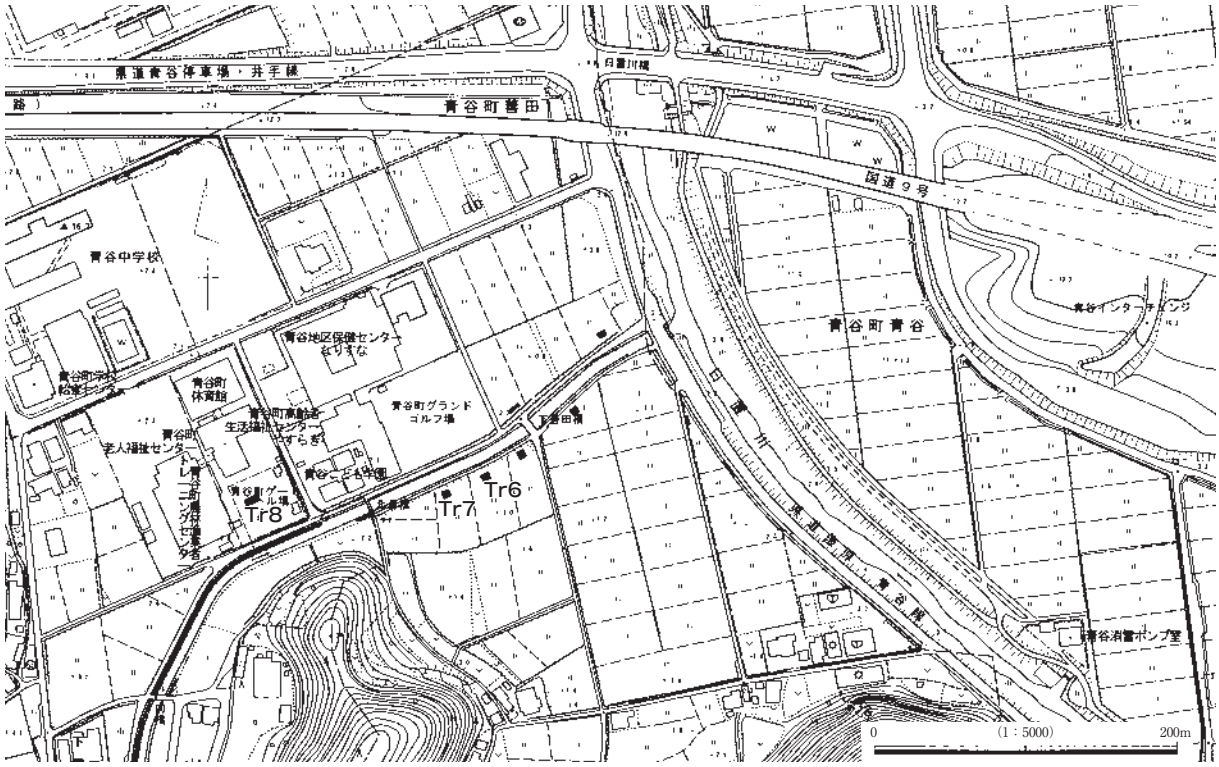
第１図　調査遺跡位置図

第２章　調査の結果

第１節　善田傍示ヶ崎遺跡

善田傍示ヶ崎遺跡は、JR青谷駅より南東約１㎞の下善田集落の北側に所在し、日置川と露谷川に囲まれた標高１ｍ前後の水田域に展開する。北西側には青谷上寺地遺跡が広がり、奈良期の木製祭祀具の出土が確認されている。遺跡の南東1.6㎞には同様に木製祭祀具が多量に出土した大坪イカウ松遺跡が所在する。この他周辺丘陵には、善田古墳群、露谷古墳群、奥崎古墳群などが分布する。遺跡ではこれまでに平成15、16、19、20年度に計13箇所の試掘調査が行われており、平成15、16年度調査の第１、５トレンチでは木器溜りから、人形・馬形・斎串などの多くの木製祭祀具が出土している。

今回の調査は、平成19、20年度調査の第１～５トレンチに続き、日置川支流の改修工事に伴い対象地の露谷川右岸の水田に第６、７トレンチを、福祉関連施設建設に伴い対象地の露谷川左岸の青谷町勤労者トレーニングセンター東駐車場に第８トレンチをそれぞれ設定した。



第２図　善田傍示ヶ崎遺跡 調査トレンチ位置図

第６トレンチ(Tr-６)〔第４図　図版１〕

露谷川の右岸の水田に設定した５×５ｍのトレンチである。地表面の標高は1.04mを測る。地表下2.5ｍの標高-1.50mまで掘り下げを行った。第２層下から暗渠が掘り込まれ、暗渠埋土から陶磁器片が１袋分出土している。第４～６層が黄灰色粘質土および粘土である。泥炭層上層にあたる第７層中に陶器・土器細片が僅かに含まれる。標高0.18m付近の第８層から第９層までの約40㎝程度が植物遺体を含む所謂泥炭層で、第９層は第８層より分解が進み粘質である。第８層上面から染付細片、土器細片、箸状・角材状木製品数点が、第９層中から斎串状木製品多数が出土している。以下第10層ヨシ・アシ類を含む灰黄色粘土、第11層紫灰色粘土ブロック及びヨシ・アシ類を含む灰色粘土、標高-0.85mを測る第12層以下はカキ・巻貝を含む灰色および黄灰色粘土である。遺構は検出されなかった。

第７トレンチ(Tr-７)〔第３・４図　図版１・２・21〕

露谷川の右岸の水田に設定した５×５ｍのトレンチである。地表面の標高は1.10mを測る。地表下1.74mの標高-0.64mまで掘り下げを行った。第４層および第７層上面から暗渠が掘り込まれる。第４層

で陶器片が出土している。第８層が厚さ10㎝弱を測る泥炭層で、標高0.66～0.38ｍと南から北側へ向けて地盤を下げる。第８層で斎串状・薄板状木製品が出土するが下位ほど多く、トレンチ北端では土師器皿（第３図１）が出土している。泥炭層下第10層ヨシ・アシ類を含む灰黄色粘土で薄板状木製品を含む。紫灰色粘土ブロックを多く含む第12層灰色粘土をはさみ、第13層黄灰色粘土では、上位の標高-0.06ｍ付近から（第３図２・３）を始めとする斎串状木製品が出土している。標高-0.21ｍを測る第14層以下は巻貝を含む黄灰色粘土および灰色砂である。

土師器皿（第３図１）は底径4.9㎝。底部は円盤状に厚く外面糸切りである。斎串（第３図２）は全長29.6㎝、頭部馬形状で側面に弧状および対面にＶ字状の切り欠きを施す。先端は片刃状に尖らせ全体では刀形となる。斎串（第３図３）は頭部欠損し遺存長30.75㎝。両側から尖る下端から頭部へ向けて幅が僅かに広がる様相を示す。

第８トレンチ(Tr-８)〔第３・５図　図版２・21〕

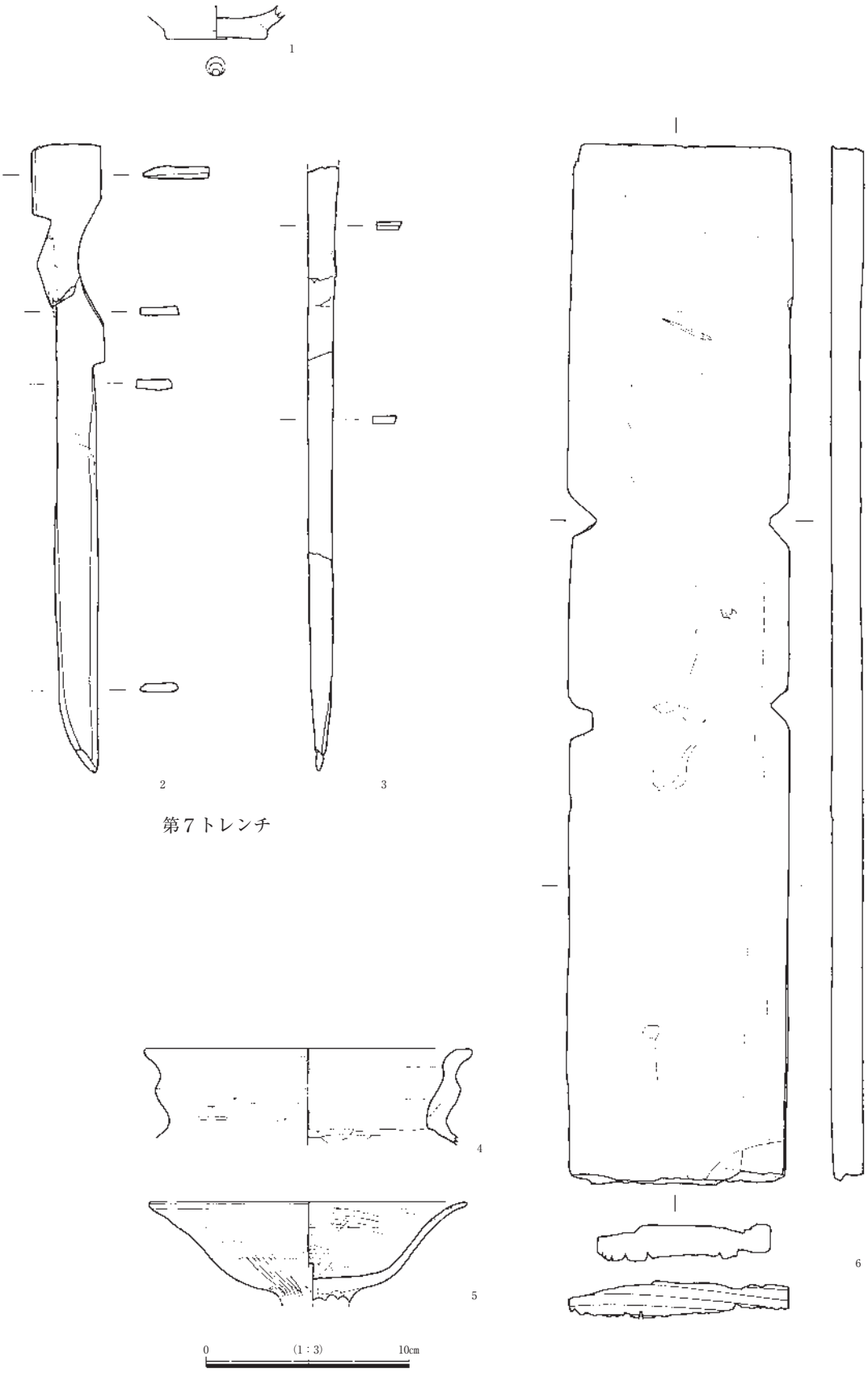
露谷川の左岸、青谷町勤労者トレーニングセンター東の駐車場に設定した4.2×8.4ｍのトレンチである。地表面の標高は2.35ｍを測る。地表下3.0ｍの標高-0.70ｍまで掘り下げを行った。現状では１ｍ程度の客土がなされ、標高約0.5ｍを測る第４層が旧水田面、第５層が床土である。以下、第６層褐灰色粘土、第７層黒褐色粘土と無遺物層で、第８層黒褐色粘土中に中世陶器片を含む。その下層、第９・10層暗褐色泥炭質粘土が泥炭層である。標高約１ｍ、10㎝弱の厚さである。泥炭層下層の第11・12層黒褐色粘土中に土師器細片、板状木製品が僅かに出土している。第14～17層は溝状遺構の可能性があり、標高0.3ｍ付近で杭列とそれに固定される横板などの木器群を検出した。水路状遺構の可能性がある。埋土の第14層から粗砂に混じって磨滅した土師器・須恵器片が、第16・17層から土師器片が、木器溜りから田下駄（第３図６）が出土している。以下、標高０ｍ付近の第18～21層中に古墳時代中期高杯（第３図５）をはじめとする土器、角・板状木製品が出土している。以下、無遺物層である第22層灰黄褐色粘土。第23層暗褐色細砂混じり粘土を確認した。

甕口縁部（第３図４）は短くＭ字形の立ち上がりをもつ複合口縁で上端面をもつ。全体的に厚手である。高杯（第３図５）は内湾しながら立ち上がり口縁部で外方へ開く高杯杯部で、底部外面に脚部との剥離痕が観察される。外面は縦ハケ目後上位横ナデ、内面ハケ目後縦ヘラ磨き調整である。田下駄（第３図６）は長さ50.7㎝、幅10.8㎝、厚さ1.75㎝を測り、両端は切断面で板目取り、中央側面に10㎝隔てて２対のＶ字状切り欠きを施す。

小結

善田傍示ヶ崎遺跡は、平成15、16年度試掘第１、５トレンチで大量の奈良期の木製祭祀具が出土しており、露谷川流域の第５トレンチ周辺丘陵裾部で祭祀が行われ、下流の第１トレンチ付近に祭祀具が漂着したと考えられている。

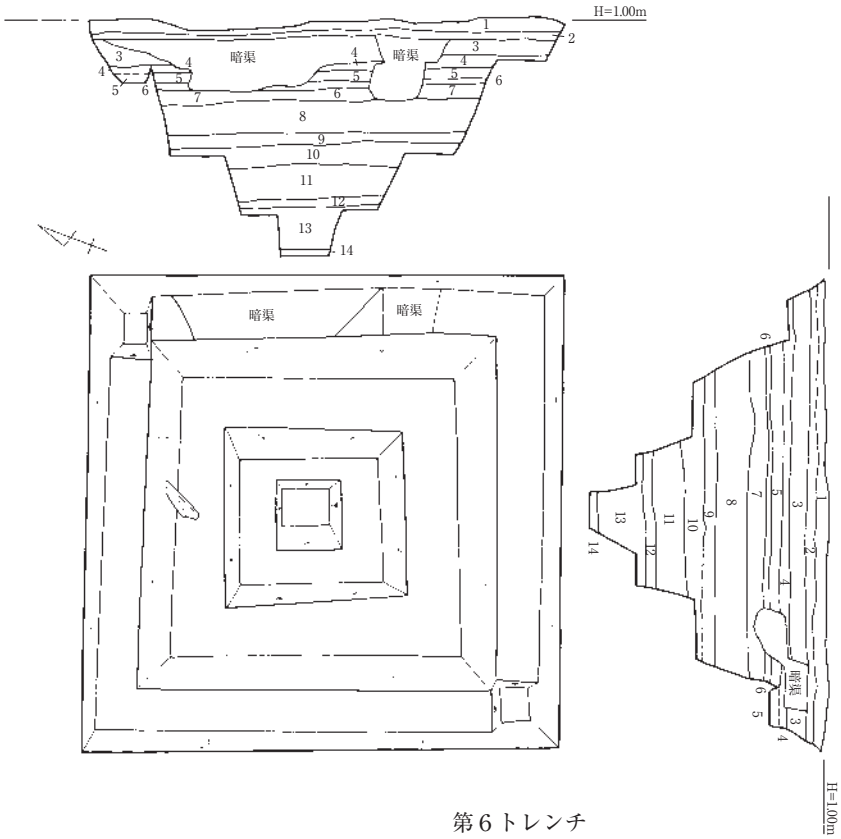
今回の調査は平成19、20年度に続き河川改修および福祉関連施設建設に伴い実施したものである。露谷川沿いに東側の下流から第６、第７、第８トレンチの位置となり、泥炭層、海成層ともに西側の上流側ほど標高を上げる。泥炭層は第６トレンチで標高0.18ｍ、第７トレンチで0.33～0.66ｍ、第８トレンチで１ｍ、海成層は第６トレンチで標高-0.85ｍ、第７トレンチで-0.21ｍの検出、第８トレンチでは対応層は確認できなかった。いずれのトレンチも泥炭層の上層でわずかな陶磁器細片を含むが遺構は検出されなかった。今回第６、７トレンチでは、泥炭層中に斎串とみられる木製品が出土しており、泥炭層下位ほど出土量が多い。第８トレンチでは泥炭層の下層に古墳時代中・後期の遺物と木器溜りを検出した。第６、７トレンチは、下善田西側丘陵先端裾部の水田に位置する平成15年度第５トレンチ～第１トレンチに広がる大量に祭祀具を含む本流の縁辺にあたり、第７トレンチは本流により近い。第８トレンチではやや様相を異とし、明確に斎串状木製品と認識できる遺物は確認されなかった。ここでは遺跡の北西側に広がる青谷上寺地遺跡との関連を踏まえ捉えていく必要があろう。



第７トレンチ

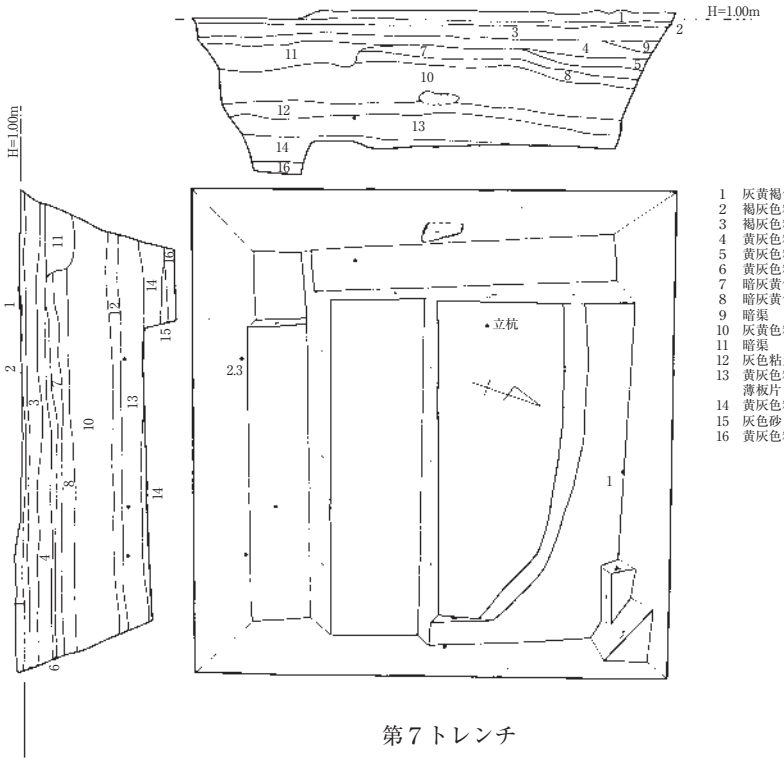
第８トレンチ

第３図　善田傍示ヶ崎遺跡 第７・第８トレンチ出土遺物実測図



1　灰黄褐色粘質土（耕作土）
2　褐灰色粘質土（炭片を若干含む）
3　褐灰色粘質土（２より灰色かかる。
　　黄褐色の沈着あり）
4　黄灰色粘質土（僅かに黄褐色の沈着あり）
5　黄灰色粘土（１㎜大の砂粒を含む）
6　黄灰色粘土（５より暗で粘質強。
　　浅い黄色シルトブロックを含む）
7　暗灰黄色粘土（暗灰黄色泥炭ブロックを含む）
8　暗灰黄色泥炭（植物未分解層）
9　オリーブ褐色泥炭（８より分解進み粘質）
10　灰黄色粘土（ヨシ、アシ類を含む）
11　灰色粘土（ややオリーブかかる。砂粒の含み無し。
　　紫灰色粘土ブロック、ヨシ、アシ類を含む）
12　灰色粘土（紫灰色粘土ブロックを多く含む。
　　二枚貝、巻貝を含む）
13　黄灰色粘土（巻貝を多く含む）
14　黄灰色粘土（13より若干明。
　　紫灰色粘土ブロックを若干含む。貝の含み少）

第６トレンチ

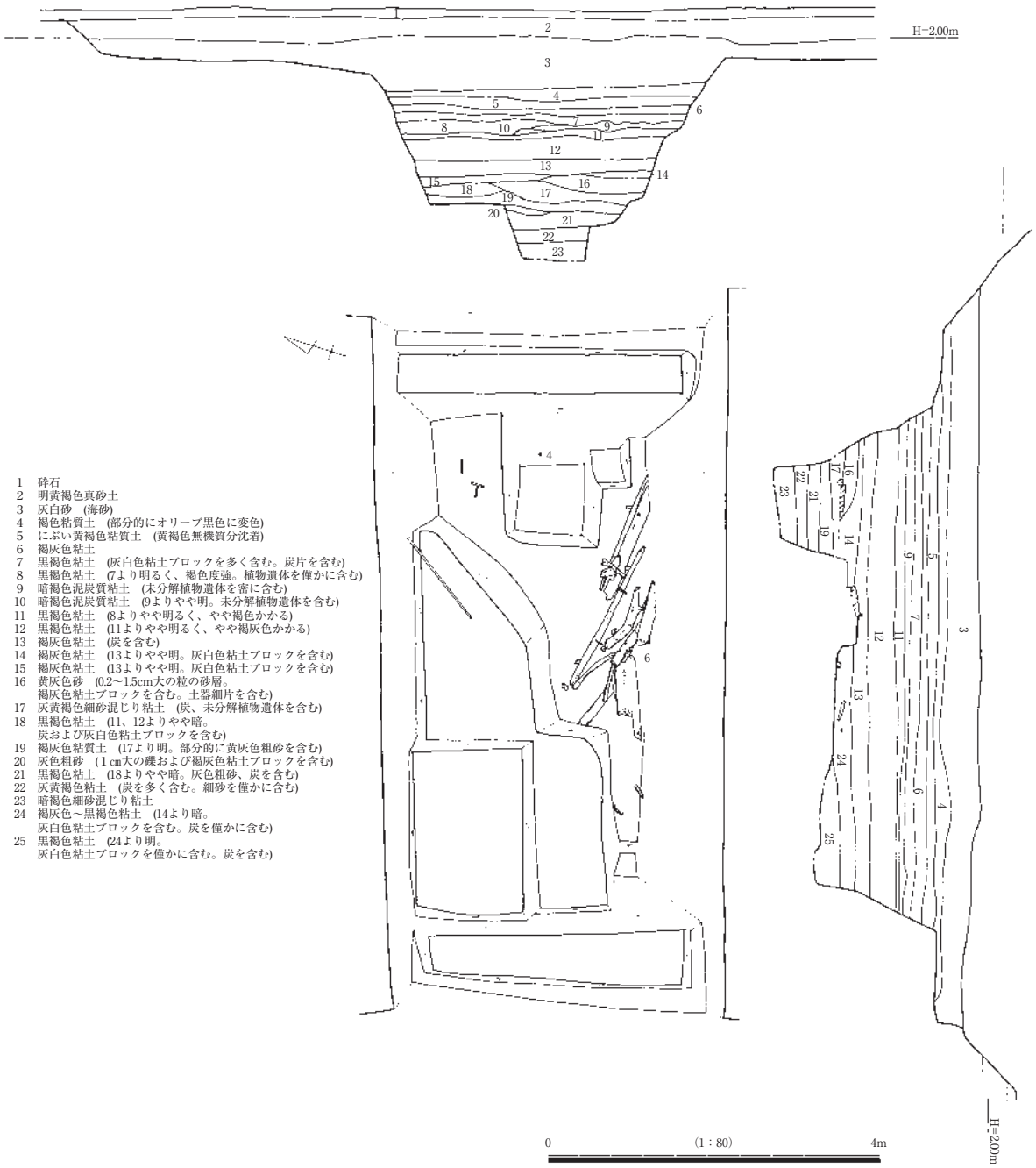


1　灰黄褐色粘質土（耕作土）
2　褐灰色粘質土（炭片を若干含む）
3　褐灰色粘質土（２より灰色かかる。黄褐色の沈着あり）
4　黄灰色粘質土（僅かに黄褐色の沈着あり）
5　黄灰色粘土（１㎜大の砂粒を含む）
6　黄灰色粘土（５より暗で粘質強。浅い黄色シルトブロックを含む）
7　暗灰黄色粘土（暗灰黄色泥炭ブロックを含む）
8　暗灰黄色泥炭（植物未分解層）
9　暗渠
10　灰黄色粘土（ヨシ、アシ類を含む）
11　暗渠
12　灰色粘土（紫灰色粘土ブロックを多く含む）
13　黄灰色粘土（紫灰色粘土ブロックを僅かに含む。
　　薄板片を含む。砂粒の含みなし）
14　黄灰色粘土（僅かに自然木を含む。巻貝を多く含む）
15　灰色砂（0.5～３㎜大の粗砂、巻貝を多く含む）
16　黄灰色粘土（14より暗。巻貝を含む）

第７トレンチ

0　(1：80)　4m

第４図　善田傍示ヶ崎遺跡 第６・第７トレンチ実測図

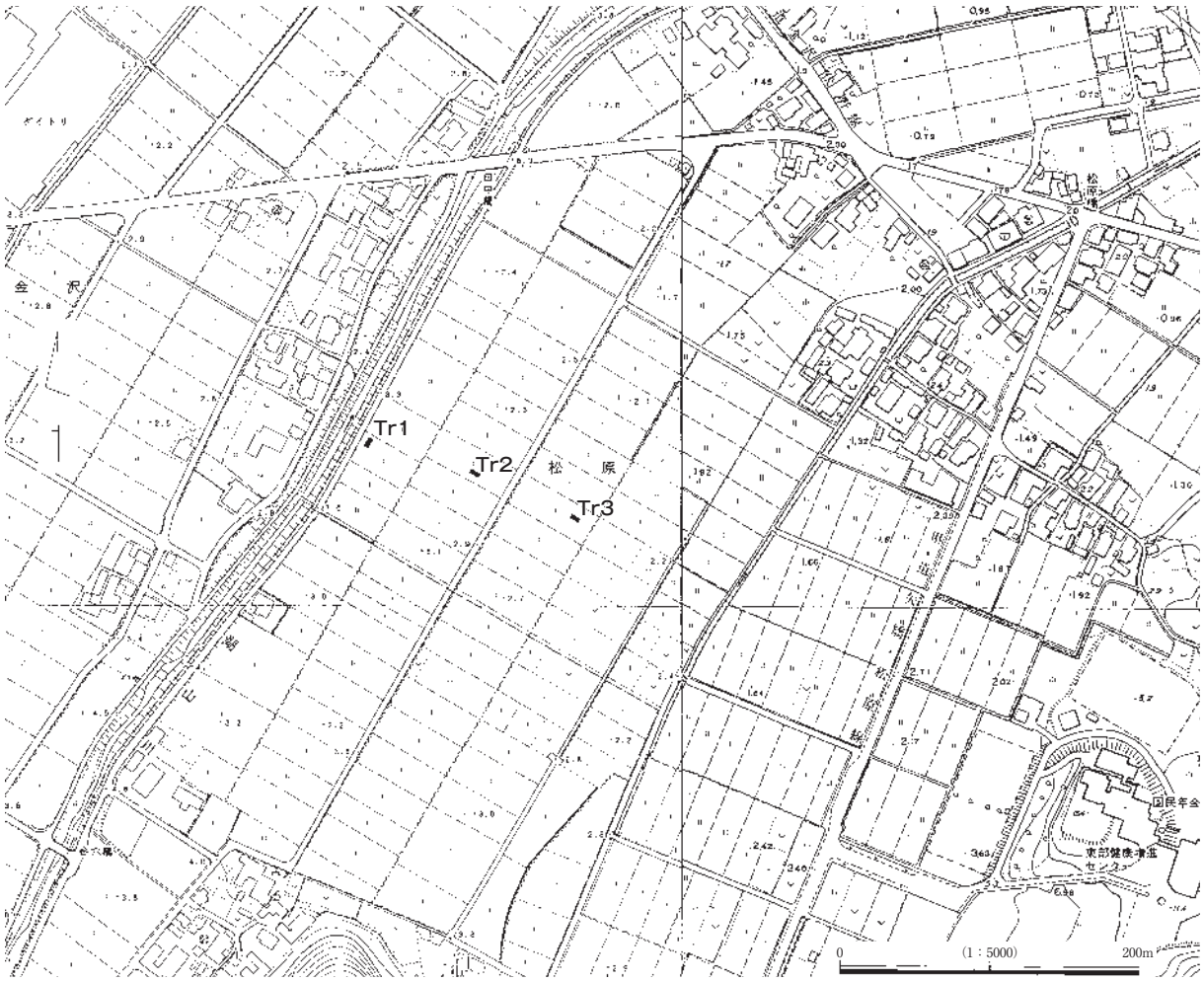


第５図　善田傍示ヶ崎遺跡 第８トレンチ実測図

第２節　松原田中遺跡

松原田中遺跡は、湖山池南西岸の湖畔から約600m内陸の、松原集落南西の三方を山に囲まれた標高2.4mの平野部に所在する。南西には標高44mの丸山がそびえ、吉岡将監の父、春斎が築城したとされる丸山城跡が山頂を占地する。東の丘陵裾部には弥生後期～中世の集落跡である松原谷田遺跡、丘陵上には前期～後期の松原古墳群が、西の丘陵には大畑、大谷、岩本古墳群が分布し、丘陵先端部には防巳尾城跡、山裾平坦部には弥生中期～後期の集落跡である岩本第2遺跡が展開する。

今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、計画路線内に計３箇所の試掘トレンチを設定した。



第６図　松原田中遺跡 調査トレンチ位置図

第１トレンチ(Tr－１)〔第７・10図　図版２・３〕

湖山川右岸沿いの水田に設定した３×７ｍのトレンチである。地表面の標高は2.40ｍを測る。地表下2.4ｍの標高０ｍまで掘り下げを行った。第１層耕作土下で土坑状の掘り込み（第20層）が検出される。第４層は水田の床土とみられ、その下層である第５層から弥生後期前葉の甕口縁部（第10図１）、瀬戸・美濃皿（第10図２）が出土している。第７層～第11・13層までは黒褐色系の粘質土および砂で、途中第９層が鉄分沈着粘土として厚さ20㎝程度堆積する。第７・８層で土器細片と土師器皿片が出土している。第12層下は暗褐色～にぶい黄橙色砂・粗砂の堆積で、第19層から灰色系の褐灰色砂となる。

甕（第10図１）は1/12の遺存で推定口径14.6㎝を測り、外傾する端面に２条の凹線を施す。瀬戸・美濃皿底部（第10図２）は底径6.0㎝、オリーブ黄色の施釉、底部外面に砂目２箇所が観察される。大窯Ⅱあるいは Ⅲ期、16世紀後半の時期とみられる。

第２トレンチ(Tr－２)〔第８・10図　図版３・４・21〕

湖山川右岸東90ｍの水田に設定した３×７ｍのトレンチである。地表面の標高は2.30ｍを測る。地表下2.25ｍの標高0.05ｍまで掘り下げを行った。第１層耕作土下は黄褐色系の第２層にぶい黄褐色粘質土、第３層黄褐色粘質土（床土状）で、灰色系の第４層黄灰色砂質土が10㎝程度堆積、その下層の第５層黒褐色砂質土上面、標高1.90ｍ前後が遺構面となる。第５層上面からは、土坑SK-01、02、ピットP-03、04、05を検出するとともに、第５層中の標高1.8ｍ弱で古墳時代前期をはじめ弥生時代後期・中期・前期の土器を中心とする遺物が出土している。SK-01は遺存長126㎝、深さ46㎝、SK-02は遺存長78㎝、深さ39㎝、P-03は深さ55㎝、P-04は深さ40㎝、P-05は深さ41㎝を測る。P-04埋土（第10・11層）から壺（第

10図６）、石鏃の基部（第10図12）などが出土している。また、第５層下の第７層にぶい黄橙色砂の上面で浅い土坑状の遺構と柱根を有するP-01、02（埋土第14層）を検出した。P-01、02は中心間1.9mの距離をとり、軸をN-65°-Eに振る現在の湖山川にほぼ沿った方向である。共にピット径46～50cm、柱根径15cm程度、掘り下げは行っていないものの、P-01柱根の長さ32.7cmを確認している。

遺物はコンテナ４箱相当量が出土している。主に第５層中からの出土で、縄文時代晩期、弥生時代中期、後期、古墳時代前期の遺物である。縄文土器甕（第10図３）は外面条痕のち口縁部に工具による刻目を施す突帯文を貼り付ける。内面工具ナデ、ナデ。弥生土器壺（第10図４）はハ字状で口縁部でさらに開き上端部をつまみやや内傾する無文の端面をもつ。頸屈曲部に指おさえによる刻目貼付突帯を施す。壺（第10図５、６）は体部からすぼまって直立気味に立ち上がり端部で短く外傾する(5)とそのまま丸く終えるもの(6)とがあり、(5)は端面に格子目文を施す。頸部外面はそれぞれ櫛状工具による直線文・波状文を施す。広口壺（第10図７）は下垂する端面に４条の凹線上に刻目のち円形浮文貼り付け、上面にも２条単位の綾杉文のち円形浮文を施す。甕（第10図８）は複合口縁外面に櫛描平行沈線が重複、内面は横ナデで条痕が残り、屈曲部に指おさえ痕が連続する。肩部外面に押引沈線を施す。甕（第10図９）は口径18.6cm、口縁部内外面横ナデの複合口縁で頸部内面にヘラ磨き、全体にハケ目状の条痕が観察される。土器転用紡錘車（第10図10）は径3.6cm、中央に４mmの円孔を主に内面側より穿孔する。土錘（第10図11）は径2.7cm、手捏ね成形で一方に穿孔時の粘土のよれが未成形である。石鏃とみられる基部（第10図12）は刃部欠損するが、打ち欠きして両側面にくびれを作る。両面磨製で片側面は擦面となる。（第10図13）は緑色凝灰岩製の剥片で、母岩肌が残る。割面に擦切り溝２条が観察される。

第３トレンチ（Tr-３）〔第９・11図　図版４・５・22〕

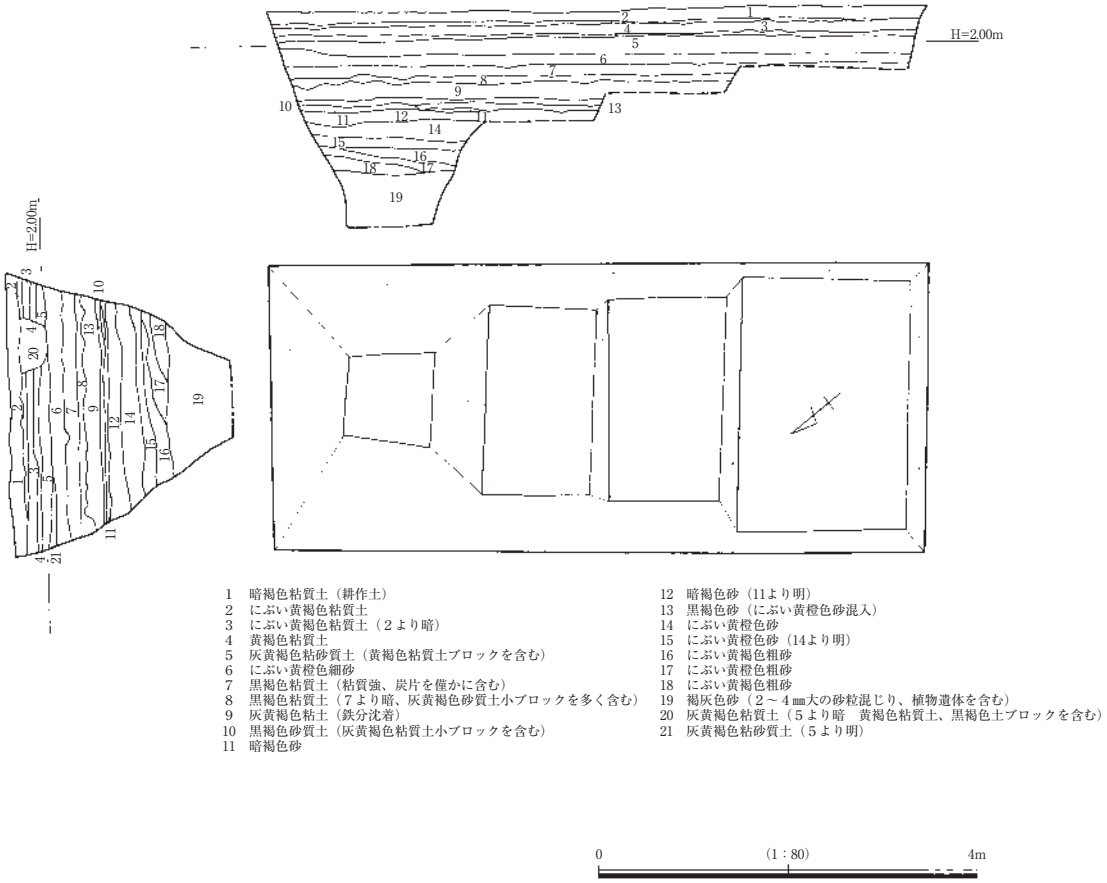
湖山川右岸東160mの水田に設定した３×７mのトレンチである。地表面の標高は2.10mを測る。地表下1.60mの標高0.50mまで掘り下げを行った。第１層耕作土下は第２、３層と灰色系の粘質土で、第３層は明黄褐色の沈着が若干認められ黄灰色粘質土である。第３層中より越前擂鉢など陶磁器片、須恵器片、土器片が出土している。標高1.75m前後の第４層黒褐色砂質土上面およびその下層標高1.6m弱の第５層黒褐色砂質土（４より明、褐色を帯びる）上面が遺構面である。ピット12基と土坑SK-01、02、溝状遺構SD-01を検出した。SK-01は遺存長72cm、深さ52cm、SK-02は遺存長66cm、深さ44cmを測る。SD-01は幅52cm、遺存長120cm、深さ38cmを測り、トレンチ北端をかすめ軸をN-65°-Eに振る。ピットは径20～36cm、深さ17～30cmの規模を測り、SK-02を切るP-07は深さ38cmと深く断面に柱痕跡が観察される。SK-02とP-07上面周辺では多くの土器片が出土している。以下、第６層にぶい黄橙色砂を標高0.5mまで確認した。

遺物は第４層および第５層中から古墳時代前期、弥生時代前期末～中期初頭の遺物が出土している。総量にしてコンテナ４箱相当である。このうち、SK-01埋土から高杯（第11図19）、P-05から鼓形器台（第11図21）、SK-02で甕（第11図15）および壺体部片（第11図18）、SD-01から（第11図14、17）と、P-07上面で甕（第11図16）、第４層および第５層から高杯（第11図20）を図化した。壺（第11図14）は口縁は大きく開き端部に刻目を施す。甕（第11図15）は口縁部屈曲して短く外傾し端面に刻目を施す。甕（第11図16）は短く外反する口縁部に刻目を施し、頸部から僅かに膨らむ肩部外面に多条の櫛描文を施し、緩やかに平底へとすぼまる形態である。甕（第11図17）は頸部から屈曲外傾する口縁端部に刻目を施す。肩部外面に４条のヘラ描沈線を巡らす。体部片（第11図18）は外面に断面三角形の突帯と同様の２重弧状の棒状浮文が遺存、観察する。高杯（第11図19）は底部円盤充填で細い脚部をもち、口縁部は緩やかに屈曲外反する。内外面とも磨きが顕著である。高杯（第11図20）は内外ヘラ磨き調整で、浅い皿状の杯部に口縁部は下垂し有段となって外面をもつ。鼓形器台（第11図21）は1/4残存で復元口径17.2cmを測る。器壁やや厚く接合部は短い。

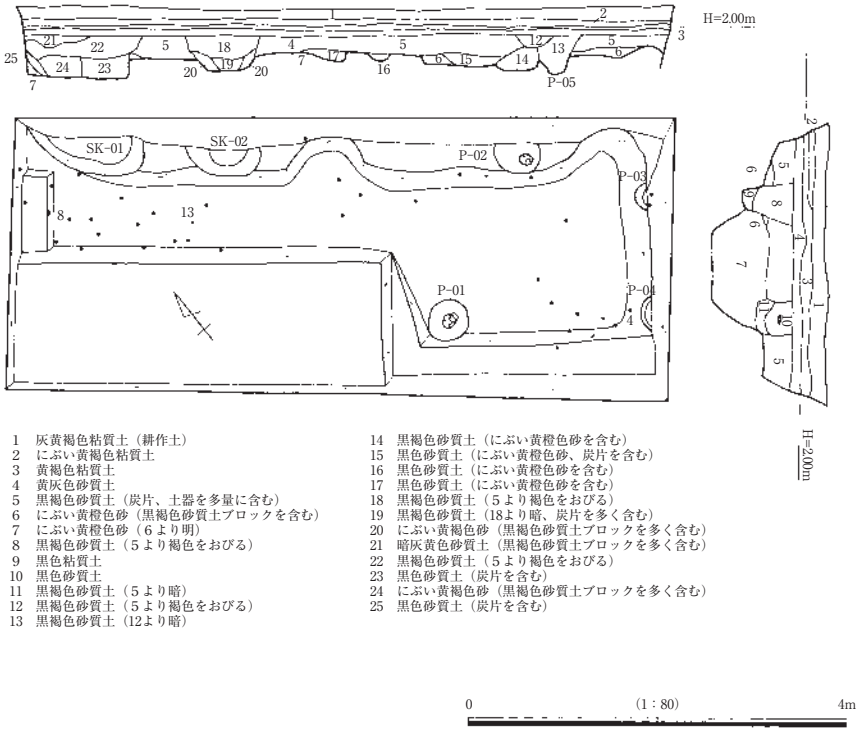
小結

松原田中遺跡は、湖山川と県道矢矯松原線の平野部を中央で分ける丸山（標高44m）の北東側微高地、標高2.1～2.4mの水田に展開する集落遺跡である。今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、平野を東西方向に横断する計画路線内３箇所での調査である。調査前の踏査では、田畔上に散乱する土師器や弥生土器片が印象的で、遺跡の大きさや広がりを推察させた。現耕作土下の灰色系粘質土に若干の陶磁器類の出土が認められるものの、遺構は標高1.75～1.9m付近の黒褐色砂質土上を中心として展開する。遺物は、古墳時代前期、弥生時代後期、中期、前期、縄文時代晩期の時期が認められ、その中でも古墳時代前期と弥生時代前期末～中期前半の比率が多い。遺物の総量も第２、３トレンチでコンテナ８箱分に相当するなど調査面積に対し多い。特に第３トレンチでは古墳時代前期と弥生時代前期末～中期初頭期の遺構が同一面で検出されている。

これまで松原・金沢地域では松原谷田遺跡など丘陵裾部の集落遺跡が注目されてきたが、平野部に展開する松原田中遺跡の北限をはじめとした遺跡範囲の把握と、湖山川左岸地域においても十分に注意を払っていく必要があろう。



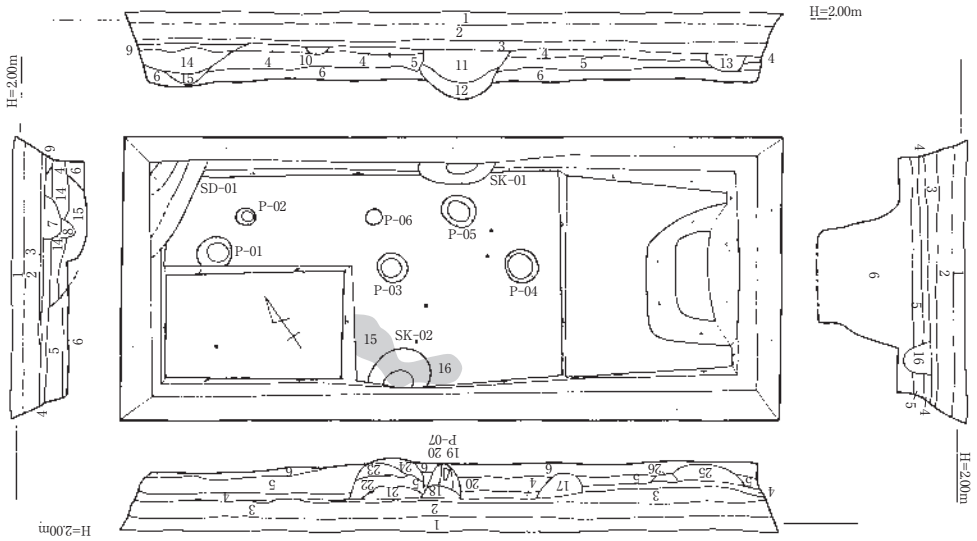
第７図　松原田中遺跡 第１トレンチ実測図



1　灰黄褐色粘質土（耕作土）
2　にぶい黄褐色粘質土
3　黄褐色粘質土
4　黄灰色砂質土
5　黒褐色砂質土（炭片、土器を多量に含む）
6　にぶい黄橙色砂（黒褐色砂質土ブロックを含む）
7　にぶい黄橙色砂（６より明）
8　黒褐色砂質土（５より褐色をおびる）
9　黒色粘質土
10　黒色砂質土
11　黒褐色砂質土（５より暗）
12　黒褐色砂質土（５より褐色をおびる）
13　黒褐色砂質土（12より暗）
14　黒褐色砂質土（にぶい黄橙色砂を含む）
15　黒色砂質土（にぶい黄橙色砂、炭片を含む）
16　黒色砂質土（にぶい黄橙色砂を含む）
17　黒色砂質土（にぶい黄橙色砂を含む）
18　黒褐色砂質土（５より褐色をおびる）
19　黒褐色砂質土（18より暗、炭片を多く含む）
20　にぶい黄褐色砂（黒褐色砂質土ブロックを多く含む）
21　暗灰黄色砂質土（黒褐色砂質土ブロックを多く含む）
22　黒褐色砂質土（５より褐色をおびる）
23　黒色砂質土（炭片を含む）
24　にぶい黄褐色砂（黒褐色砂質土ブロックを多く含む）
25　黒色砂質土（炭片を含む）

0　(1：80)　4m

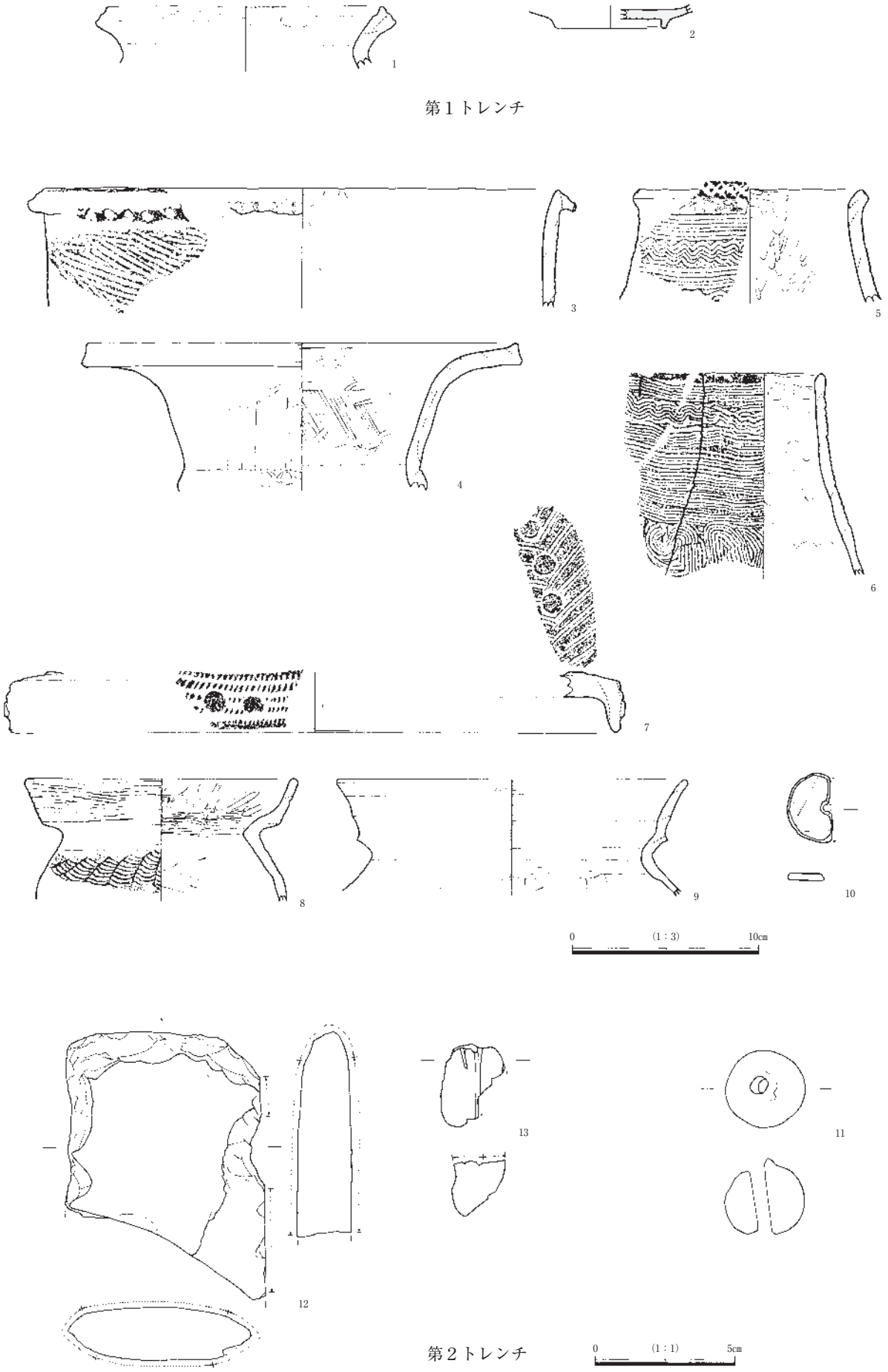
第８図　松原田中遺跡 第２トレンチ実測図



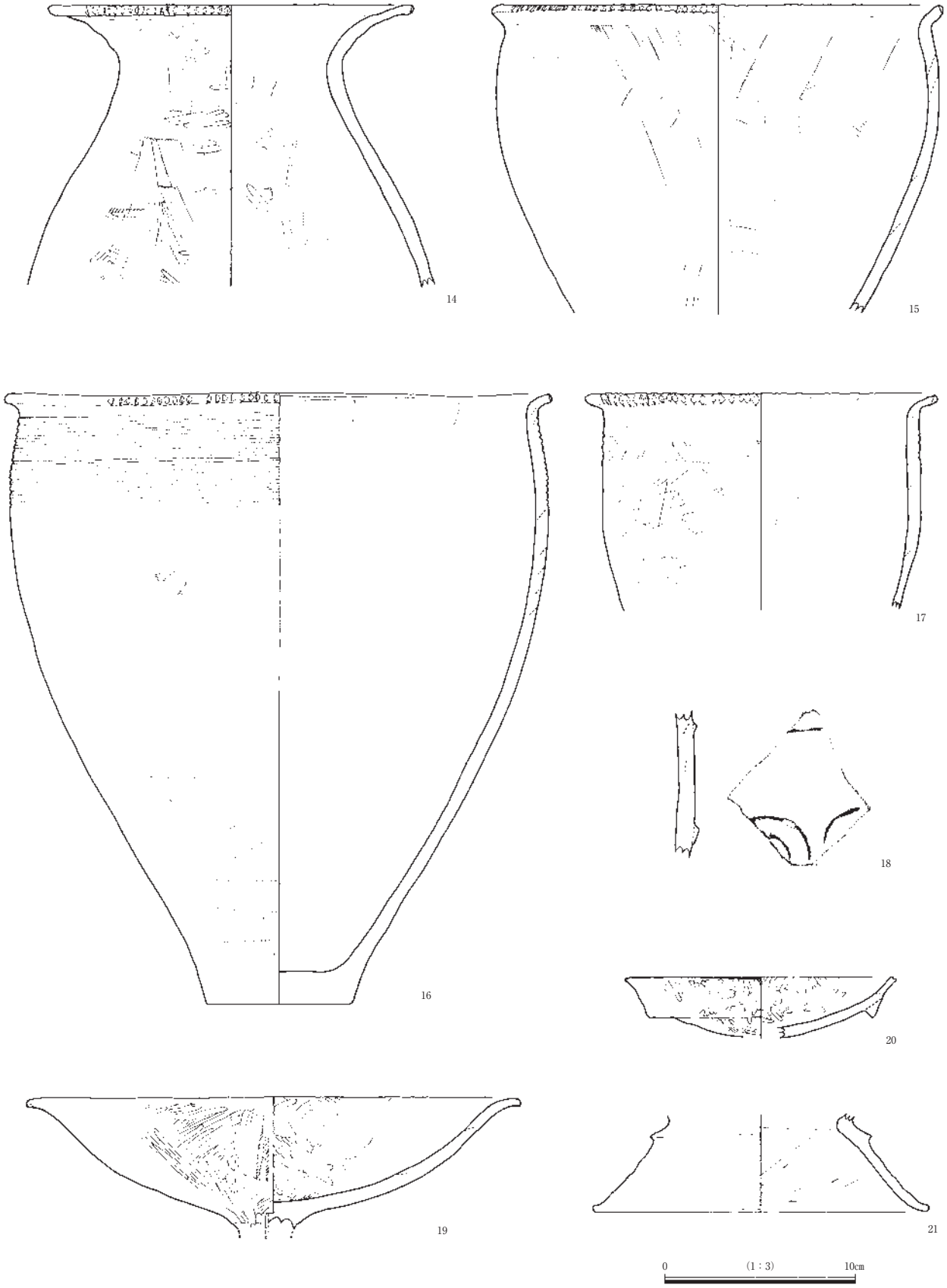
1　灰黄褐色粘質土（耕作土）
2　褐灰色粘質土（炭片を含む）
3　黄灰色粘質土（明黄褐色の沈着あり）
4　黒褐色砂質土（明黄褐色の沈着あり、締まる。炭片、土器を多く含む）
5　黒褐色砂質土（４より明、褐色をおびる。炭片、土器を多く含む）
6　にぶい黄橙色砂（雲母を含む１㎜前後の砂）
7　黒褐色砂（明黄褐色の沈着あり、炭片を含む）
8　褐灰色砂（炭片を含む）
9　黒褐色砂（炭片を含む）
10　黒褐色砂（炭片を含む）
11　黒褐色砂（炭片を多く含む）
12　黒褐色砂（11より明で粘質）
13　黒褐色砂（炭片を含む）
14　黒褐色砂（明黄褐色の沈着あり、炭片、土器を含む）
15　黒褐色砂（14より暗で粘質）
16　黒褐色砂（炭片を含む）
17　黒褐色砂（炭片を含む）
18　黒褐色砂（明黄褐色の沈着あり、炭片を含む）
19　黒色砂質土（よく締まる）
20　黒褐色砂
21　黒褐色砂（明黄褐色の沈着あり、炭片を含む）
22　黒色砂質土（黒褐色粘質土、炭片を含む）
23　黒色砂質土（22より粘質）
24　黒褐色砂（23より明で粘質）
25　黒褐色砂（炭片を含む）
26　黒褐色砂（黒褐色粘質土を含む）

0　(1：80)　4m

第９図　松原田中遺跡 第３トレンチ実測図



第10図　松原田中遺跡 第１・第２トレンチ出土遺物実測図(1)



第３トレンチ

第11図　松原田中遺跡 第３トレンチ出土遺物実測図(2)

第３節　松原古墳群

松原集落の南東丘陵に位置し、湖山池を望む低丘陵上に立地している。湖山池の南岸丘陵には松原古墳群のほか桂見、倉見、高住、良田などの古墳群が展開し、数多くの古墳が築かれている地域となっている。松原古墳群は現在37基あまりが確認され、群中には前方後円墳や横穴式石室を持つ古墳、横穴墓などが築かれ、古墳時代前期～後期の古墳が所在することが明らかになってきている。また、古墳群中の松原１号墳は22年度に実施した本調査によって弥生墳丘墓であることが判明した。

今回の調査は鳥取西道路整備に伴い実施した。関連の試掘調査は、平成20年度・21年度（Tr-１～20）にも実施されている。本年度調査は、本調査によって新たに検出された１号横穴墓の南斜面を対象として行い、横穴墓の所在確認を目的として２箇所のトレンチ（Tr-21、22）を設定した。

第21トレンチ(Tr-21)〔第13図　図版５〕

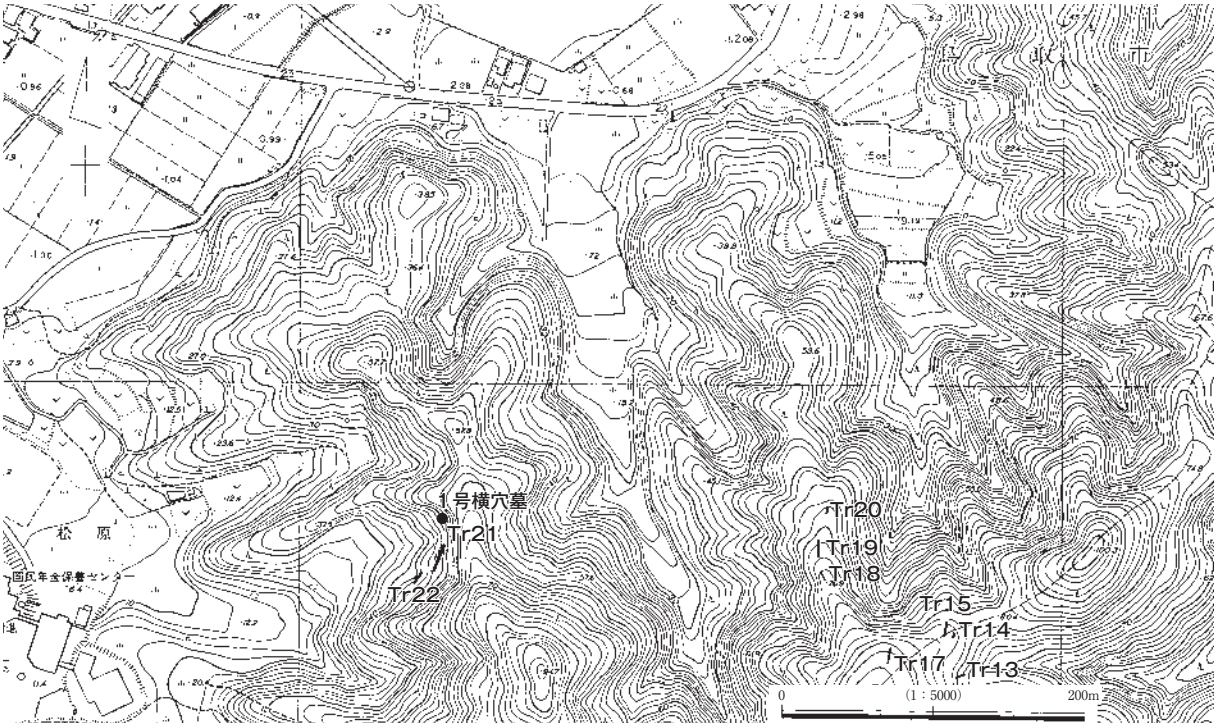
１号横穴墓の南20mに位置する。調査対象とした斜面は急傾斜で谷に下り、岩の露頭や流出した礫の堆積が随所に観察される。トレンチは斜面傾斜が僅かに変化する地点を選択し、斜面を横断する状態で設定した。トレンチ規模は0.5×23.2mである。第２層の明黄褐色粘質土が地山である。第２層の上位に堆積する黒褐色粘質土（第５層）や５㎝大の礫を含む暗褐色砂質土（第12、13層）は流土の堆積層と思われる。地山加工の痕跡もなく遺構の存在は認められなかった。遺物は検出されなかった。

第22トレンチ(Tr-22)〔第13図　図版５〕

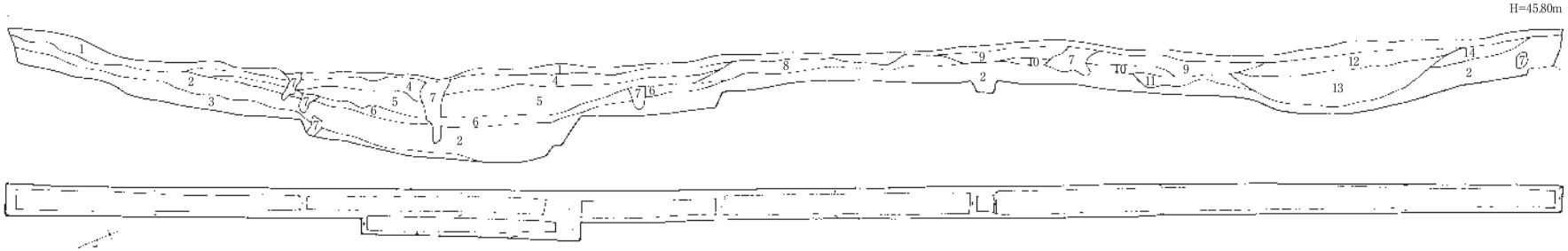
第21トレンチ下位の南西10mに設定した0.9×11.8mのトレンチである。第４層の黄褐色粘質土が地山とみられるが、上層に堆積するにぶい黄褐色粘質土（第２層）と褐色粘質土（第３層）はともに硬く締まった堆積状況を示しており基盤になる堆積層と思われる。また、第３層の上位に堆積し、礫が混じる第６、７、９層は流土の堆積層とみられる。遺構、遺物は検出されなかった。

小結

１号横穴墓が立地する同一丘陵斜面に設定し、横穴墓の所在確認を目的として調査を行った。調査の結果、地山を削り出した前庭部や平坦部の造成などの痕跡は認められず、１号横穴墓が造られている南側隣接斜面に横穴墓は築造されていないものと思われる。

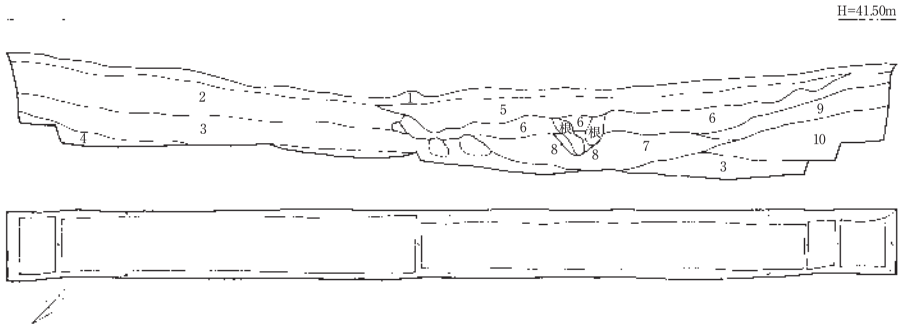


第12図　松原古墳群 調査トレンチ位置図



第21トレンチ

1　表土
2　明黄褐色粘質土
3　赤褐色粘質土
4　にぶい黄褐色粘質土
5　黒褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
6　にぶい黄褐色粘質土
7　根
8　黄褐色粘質土
9　にぶい黄褐色粘質土
10　にぶい黄褐色粘質土（９より暗）
11　にぶい黄褐色粘質土（９、10より暗。黄褐色土ブロックを含む）
12　暗褐色砂質土（３～５㎝大の礫点在）
13　暗褐色砂質土（３～７㎝大の礫との混合層）
14　にぶい黄褐色粘質土



第22トレンチ

1　表土
2　にぶい黄褐色粘質土（４～６㎝大の角礫点在）
3　褐色粘質土（３～７㎝大の角礫を多く含む）
4　黄褐色粘質土
5　暗褐色粘質土
6　にぶい黄褐色粘質土（３～６㎝大の礫点在）
7　褐色粘質土（５～20㎝大の礫点在）
8　にぶい黄褐色粘質土（根撹乱）
9　にぶい黄褐色粘質土（１～５㎝大の礫との混合層）
10　黄褐色粘質土（１㎝前後の礫混じり）

0　(1：100)　4m

第13図　松原古墳群 第21・第22トレンチ実測図

第４節　良田山廻所在遺跡

良田山廻所在遺跡は、湖山池から300m余り内陸の良田集落南に開けた小谷平野に展開する遺跡である。良田集落南の平野部にはこの他に、良田平田遺跡、良田中道所在遺跡、良田稲場所在遺跡、湖山池から100m内陸の良田集落畑地に奈良時代の遺構が検出された良田所在遺跡が所在する。また、良田谷への東入口谷部に弥生～古墳時代の祭祀遺跡として古くから知られる塞ノ谷遺跡が展開する。良田集落背後の丘陵上には、38基余りで構成される良田古墳群、良田集落南の小平野の縁辺に展開する良田所在古墳群、良田谷の東側丘陵の良田山廻古墳群と、小規模前方後円墳を含む各種古墳が数多く分布している。

今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、遺跡計画路線内に計２箇所の試掘トレンチを設定した。なお、平成21年度に今回の調査地から北25mの地点で良田平田所在遺跡第５トレンチの調査を行っており、標高4.6mで中世期の溝状遺構を確認している。さらに東に広がる小谷では７～９世紀の遺構や墨書土器などの遺物が検出されている。

第14図　良田山廻所在遺跡 調査トレンチ位置図

第１トレンチ(Tr－１)〔第15図　図版６〕

湖山池湖畔から400m南へ入った幅50mほどの小谷平野中央部の水田に、谷の傾斜に対し直交（東西）方向に設定した３×７mのトレンチである。圃場整備によって谷奥から段状に連なる水田が造営されており、第１トレンチはそのうち谷の入り口から80mほど入った水田、地表面の標高6.32mを測る。地表下1.87mの標高4.45mまで掘り下げを行った。耕作土下は20cm弱の客土がなされ、標高5.9m前後の客土混じりの第３層が旧耕作土とみられる。トレンチ北西で第１層下から掘り込まれた暗渠を検出している。第４層が瓦質鍋口縁部片を含む黄灰色シルト、第５層黄褐色礫を含む黒褐色粘質シルト、第６層暗灰黄色粘質シルト、第７、８層は灰白色系の砂および粘土である。第９層は分解が進み腐食した自然木片と砂を含む暗灰黄色粘土層、第10層粗砂である黄灰色砂、標高4.8mで所謂泥炭層である第11層黒褐色植物未分解層を確認した。以下、植物片を若干含む第12・13層黄灰色粘土である。遺構は検出されなかった。

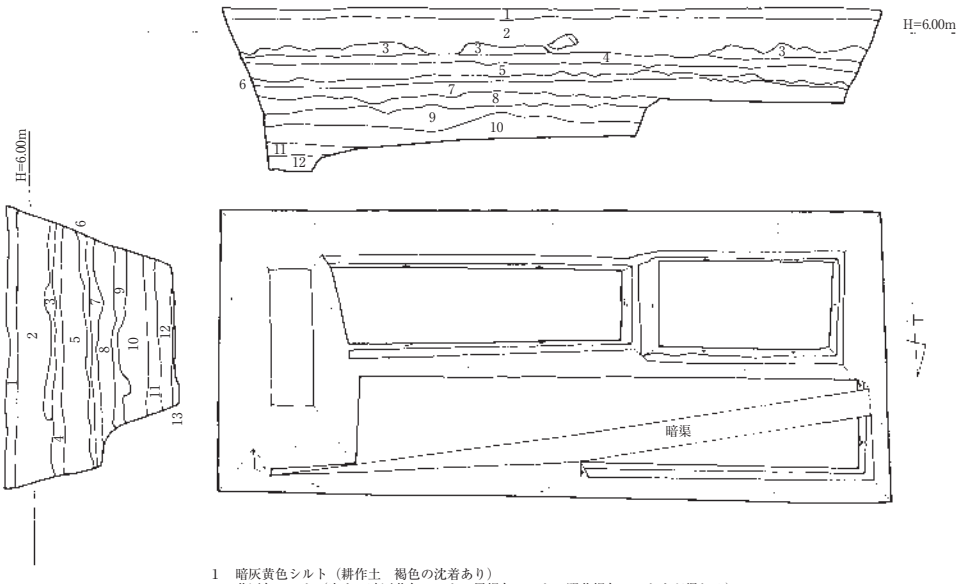
遺物は客土である第２層から陶磁器、須恵器、土師器細片20点弱、第４層で14世紀代の瓦質鍋口縁部片、第５層で土師器・須恵器細片10点弱、第６・７層で土師器細片数点が出土している。

第２トレンチ(Tr－２)〔第15図　図版６〕

湖山池湖畔から430m南へ入った幅50mほどの小谷平野中央西寄り水田に、谷の傾斜に対し直交(東西)方向に設定した３×７mのトレンチである。圃場整備によって谷奥から段状に連なる水田が造営されており、第２トレンチはそのうち谷の入り口から110mほど入った水田に位置し、北側の第１トレンチとは30m離れる。調査前の地表面の標高6.45mを測る。地表下2.17mの標高4.28mまで掘り下げを行った。耕作土下は同様の第２層暗灰黄色シルトで、第３層オリーブ褐色シルトを10～40cmと北側の標高が低い箇所ほど厚く客土を行い平坦面に整えている。以下、第５層黄灰色粘土をはさんで泥炭層（植物未分解層）と黄灰色・灰白色粘土および砂の互層である第６～11層が35cm程度堆積する。さらに20cm前後の第12層黄灰色砂、やや腐食が進む自然木を含む第13層暗灰黄色シルトをはさんで第14～16層は黄灰色・灰白色シルトおよび砂・粘土である。そして標高4.85mで第17層黒褐色泥炭を確認した。トレンチ北東隅で第１層下より掘り込んだ暗渠、第３層上面で自然木などを検出し、遺構は認められなかった。トレンチ全体では北東方向への地盤・地層の傾斜が観察された。なお、第３～５層で唯一須恵器体部片１点が出土している。

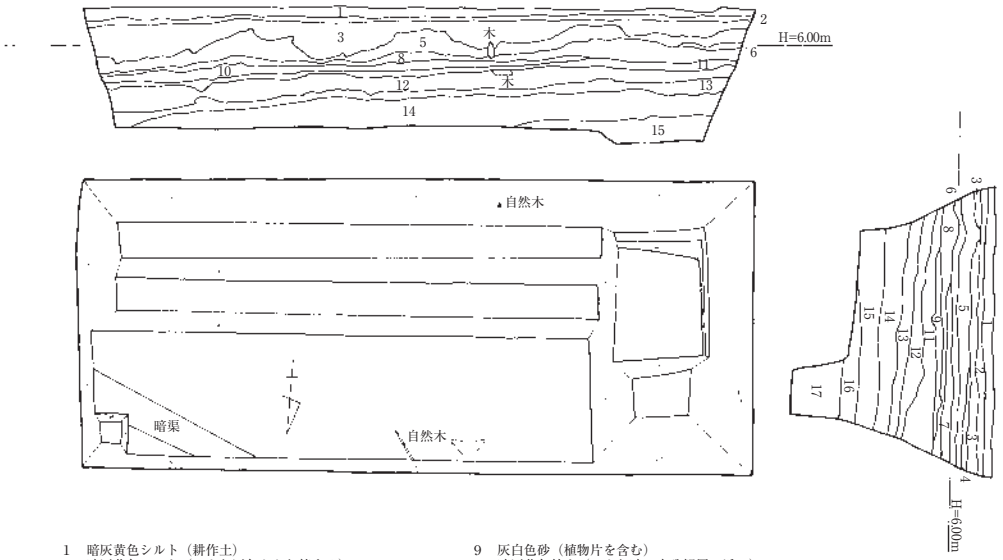
小結

良田山廻所在遺跡は、湖山池湖畔から400m程南へ入った小谷の水田部に立地する。谷のすぐ北側と東に開けた小谷には昨年度の試掘調査で墨書土器を始めとした７～９世紀の遺物が多く出土した良田平田所在遺跡が展開する。今回調査した谷下位の東寄りに位置する第１トレンチと30m上位の西寄りに位置する第２トレンチとではほぼ似通った土層が観察され、第１トレンチはより谷下位の安定した堆積を示す。具体的にはTr－１第４層がTr－２第５層、Tr－１第７層がTr－２第12層、Tr－１第９層がTr－２第13層、Tr－１第11層がTr－２第17層にそれぞれ対応するとみられる。第１トレンチ第11層上面は標高4.83m、第２トレンチ第17層上面は4.85mであり、それほどの高低差は認められない。第１トレンチ北25mに位置する良田平田所在遺跡第５トレンチでは、黒色粘土層（標高4.6m）で中世期の溝状遺構を検出しており、14世紀を中心とした遺物も出土している。現在は圃場整備され段状の水田が広がるが、元々谷の幅も一様ではなかったようで第５トレンチでは東側にせまる尾根の地形を反映した微高地状の土層が確認されている。今回第１トレンチでは僅かながら中世の遺物が出土しており、律令期は東側の小谷部を中心に展開するものの、中世についてはやや希薄ながらも南の小平野地域においても広がる様相を示す。



1　暗灰黄色シルト（耕作土　褐色の沈着あり）
2　黄灰色シルト（客土　暗灰黄色シルト、黒褐色シルト、明黄褐色シルト土が混じる）
3　灰色粘質シルト（オリーブ色かかる）
4　黄灰色シルト（オリーブ色かかる。よく締まる）
5　黒褐色粘質シルト（炭片を含む。黄褐色礫をブロック状に含む）
6　暗灰黄色粘質シルト（黄褐色礫をブロック状に含む）
7　黄灰色砂（２mm前後の粗砂。締まる）
8　灰白色粘土（粘質強）
9　暗灰黄色粘土（自然木片を多く含む。灰白色砂を含む）
10　黄灰色砂（３mm以下の川砂、自然木片を若干含む）
11　黒褐色植物未分解層（茶褐色かかる、分解ややすすむ。炭片・植物片を含む。微砂を僅かに含む）
12　黄灰色粘土（植物片を若干含む。微砂を僅かに含む。粘質強）
13　黄灰色粘土（12より明、植物片を若干含む）

第１トレンチ



1　暗灰黄色シルト（耕作土）
2　暗灰黄色シルト（１より灰色かかり締まる）
3　オリーブ褐色シルト（客土　黄褐色土を含む）
4　黄灰色シルト（黄褐色の沈着あり。締まる）
5　黄灰色粘土（黄褐色の沈着あり。下位に黄灰色砂を含む）
6　暗灰黄色泥炭（植物未分解層。植物片を多く含む）
7　黄灰色粘土（植物片を含む）
8　暗灰黄色粘土（植物片を含む。粘質強）
9　灰白色砂（植物片を含む）
10　暗灰黄色粘土（８より暗　未分解層に近い）
11　黒褐色泥炭（植物未分解層。17より未分解）
12　黄灰色砂（２mm以下の川砂、自然木片を若干含む。やや締まる）
13　暗灰黄色シルト（自然木片を多く含む。粘質）
14　黄灰色シルト（やや粘質。１mm前後の砂を含む）
15　灰白色粘土（粘質強。炭片を含む）
16　黄灰色砂（１mm前後の粗砂）
17　黒褐色泥炭（植物未分解層。分解やや進む。粘質）

第２トレンチ

0　(1：80)　4m

第15図　良田山廻所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図

第５節　良田稲場所在遺跡

良田稲場所在遺跡は、湖山池から350m余り内陸の良田集落南に広がる入り組んだ小谷平野の、正面にそびえる丘陵（標高80m）北裾小谷を中心に展開する遺跡である。良田集落南の平野部にはこの他に、良田平田所在遺跡、良田山廻所在遺跡、良田中道所在遺跡が所在する。また、湖山池から100m内陸の良田集落畑地では奈良時代の良田所在遺跡が平成17年度に確認されている。良田谷への東入口の谷部では弥生～古墳時代の祭祀遺跡として古くから知られる塞ノ谷遺跡が展開する。良田集落背後の丘陵上には、38基余りで構成される良田古墳群、良田集落南の小平野の縁辺に展開する良田所在古墳群、良田谷の東側丘陵の良田山廻古墳群と、周辺には小規模前方後円墳を含む各種古墳が数多く分布している。

今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、遺跡計画路線内に計４箇所の試掘トレンチを設定した。なお、平成21年度に今回の調査地から東150mの良田平田所在遺跡第１トレンチでは、墨書土器を含む７～９世紀の遺物を多く含む溝状遺構が検出されている。

第16図　良田稲場所在遺跡 調査トレンチ位置図

第１トレンチ（Tr－１）〔第17図　図版７〕

湖山池湖畔から350m南へ入った小谷平野中央部の丘陵北裾部、北方向に開口した狭小の谷部入口東寄りの水田に、谷の傾斜に対し直交（東西）方向に設定した３×７ｍのトレンチである。35m西に第２トレンチが所在する。前面には圃場整備による大きな区画の水田が広がり、すぐ南には丘陵外縁に整備されたＵ字溝が東へ流路をとる。地表面の標高2.68mを測る。地表下2.02mの標高0.66mまで掘り下げを行った。耕作土下は第２層、第３層と黄灰色シルトの客土がなされ、第２層上面より掘り込まれた暗渠がトレンチ東端で検出されている。第４層～10層および第16層は、途中第７層黄灰色砂を含むが植物遺体の分解の程度はあるもののいわゆる泥炭層であり、標高2.48m～1.62m、厚さ80㎝程度を測る。以下、

第11層灰白色砂、第12・13層黄灰色・灰白色砂混じり粘土、再び第14層にぶい黄褐色泥炭を10㎝程度挟んで第15層黄灰色砂であり、下層ほど北東方向への土層の傾斜が大きく認められる。遺構は検出されなかった。遺物は耕作土から陶磁器細片３点、第２層から擂り鉢片が出土している。

第２トレンチ(Tr-２)〔第17図　図版７〕

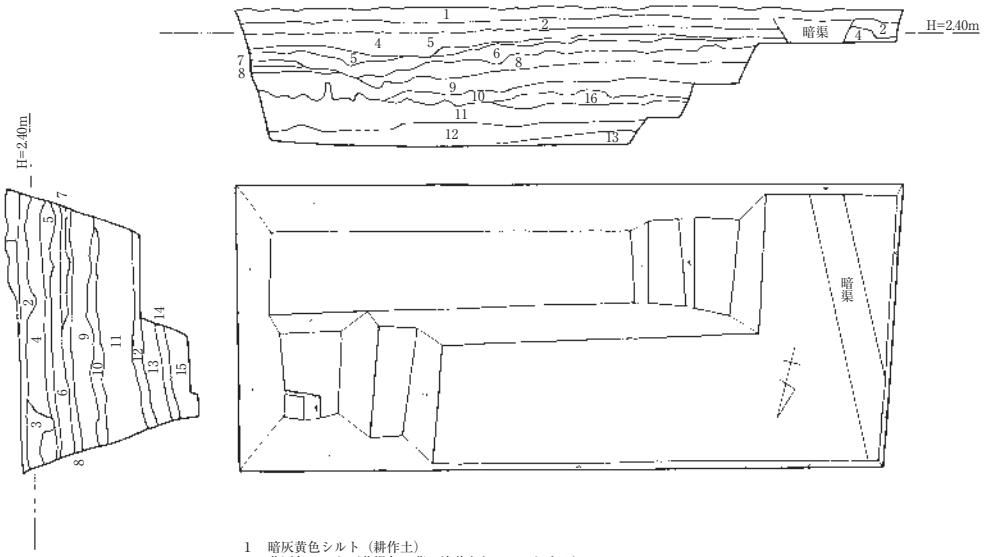
湖山池湖畔から370m南へ入った小谷平野中央部の丘陵北裾部､北方向に開口した狭小の谷部入口の水田に、谷の傾斜に対し直交（東西）方向に設定した３×７mのトレンチである。35m東に第１トレンチが所在する。前面には圃場整備による大きな区画の水田が広がり、すぐ南には丘陵外縁に整備されたU字溝が東へ流路をとる。地表面の標高3.16mを測る。地表下1.71mの標高1.45mまで掘り下げを行った。第１層、第２層の耕作土下は第８層、第13層と真砂土系の黄褐(橙)色砂質土が混じる客土により平坦に整地される。以下、腐植した植物片を含む第３・10層をはさんで砂と砂質土、再び腐植した植物片や植物遺体を含む第５・20層の堆積がみられるなど、トレンチ西側への緩やかな落ち込みが認められ、谷入口東縁辺にあたる地形を反映しているものとみられる。下層の第６・７層褐灰色砂・にぶい黄橙色砂は安定した堆積である。遺構は検出されなかった。遺物は第２層から、陶磁器細片３点と土錘１点が出土している。

第３トレンチ(Tr-３)〔第18図　図版７・８〕

湖山池湖畔から400m南へ入った小谷平野中央部の丘陵北裾、北方向に開口した狭小の谷部に、傾斜に対し直交（東西）方向に設定した２×５mのトレンチである。この小谷はかつて畑として利用されていたとみられる二段の平坦面が確認されるがそのうちの上段面にあたる。30m北東の谷入口部に第２トレンチが所在する。地表面の標高7.76mを測る。地表下1.08m標高6.68mまで掘り下げを行った。第１・２層は耕作土で、第３層は真砂土系の地山礫を多く含むにぶい黄褐色砂質土、唯一黒褐色系の第４層黒色粘質土をはさんで、第５・６層と５～７㎝あるいは10～40㎝と地山礫を含む黄橙色系の砂質土が20～70㎝の厚さに堆積する。以下、第７・８層灰黄褐色粘砂質土、さらに礫が密集し地山と考えられる第９層にぶい黄褐色粘質土を確認した。トレンチ西壁断面に第３層上面からの土坑状の落ち込み（第10層）が認められたが耕作に伴う可能性がある。遺物は出土しなかった。

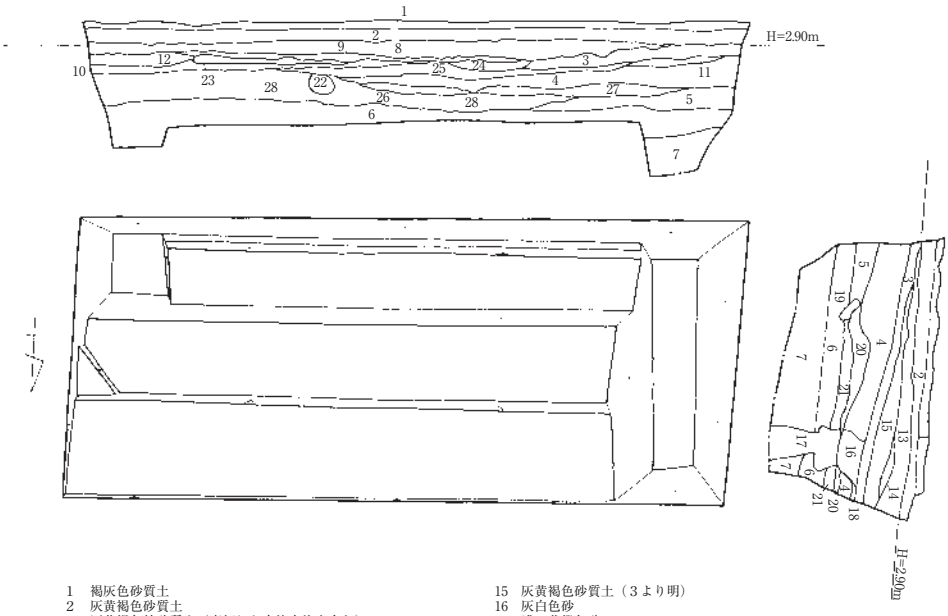
第４トレンチ(Tr-４)〔第18図　図版８〕

湖山池湖畔から360m南へ入った小谷平野中央部の丘陵北裾部､北方向に開口した狭小の谷部入口東寄りの一段高くなった平坦畑地に、谷の傾斜に対し直交（東西）方向に設定した2.5×７mのトレンチである。10m北に第１トレンチが所在する。前面には丘陵外縁に整備されたU字溝が東へ流路をとり、さらに北面には圃場整備による大きな区画の水田が広がる。地表面の標高4.24mを測る。地表下1.84mの標高2.40mまで掘り下げを行った。第１～３層は耕作土、第４層は灰色系の褐灰色シルト（炭片を含む）をはさんで第６・９層の真砂土系のにぶい黄橙色砂・灰白色砂が20㎝程度堆積する。その下層の第10・11層、第12層上面でピット２基（P-01、02）を検出した。P-01が径43～50㎝、深さ48㎝、P-02が径41～45㎝、深さ42㎝を測る。どちらも泥炭層を掘り込んでおり土層断面に柱痕跡は観察されなかった。この他トレンチ南壁面で締まりの弱い埋土の土坑状の落ち込み（第５・８・14・19層）が認められたが壁面崩落のため精査できなかった。以下、標高3.63mで厚さ70～80㎝程度の泥炭層を確認、以下第17・18層と灰白色砂層である。遺物は第２層から陶器細片３点、第15～16層から杭状木製品３点が出土している。



1　暗灰黄色シルト（耕作土）
2　黄灰色シルト（黄褐色の薄い沈着あり。ややしまる）
3　黄灰色シルト（客土　2より暗　真砂土を含む）
4　灰黄褐色泥炭（上位に灰黄色砂を含む。植物未分解層。分解がすすむ）
5　暗灰黄色泥炭（4より白色をおびる。粘質。植物未分解層）
6　灰黄褐色泥炭（植物未分解層。植物、木片を多く含む）
7　黄灰色砂（1～2㎜大の粗砂）
8　暗灰黄色泥炭（1㎜前後の砂を含む。植物未分解層。分解すすみ粘質）
9　にぶい黄褐色泥炭（植物未分解層。植物片、木片を多く含む）
10　にぶい黄色泥炭（植物未分解層。分解すすむ。オリーブ色かかる）
11　灰白色砂（1㎜前後の砂。部分的に明黄褐色の沈着あり。黄灰色かかる部分あり）
12　黄灰色砂混じり粘土（1㎜以下の灰白色砂を筋状に含む）
13　灰白色砂混じり粘土（1㎜以下の黄灰色砂をブロック状に含む）
14　にぶい黄褐色泥炭（植物未分解層。分解ややすすむ。植物片を含む）
15　黄灰色砂（1㎜前後の砂。しまり弱い。5㎜大の黄灰色粘土ブロックを含む）
16　にぶい黄褐色泥炭（植物未分解層。黄灰色砂を含む。10より分解すすむ）

第1トレンチ



1　褐灰色砂質土
2　灰黄褐色砂質土
3　灰黄褐色粘砂質土（腐朽した自然木片を含む）
4　灰黄褐色砂（灰白色砂、褐灰色砂をブロック状に含む）
5　灰黄褐色粘砂質土（植物遺体、灰黄褐色砂を含む）
6　褐灰色砂
7　にぶい黄橙色砂
8　黄褐色砂質土と褐灰色砂質土の混合層
9　褐灰色砂質土（黄褐色土、灰白色砂ブロックを含む）
10　暗褐色粘砂質土（黒褐色土、にぶい黄橙色砂ブロックを含む）
11　にぶい黄褐色砂
12　にぶい黄橙色砂
13　灰黄褐色砂質土、浅い黄橙色砂、黒褐色粘質土の混合層
14　灰白色砂
15　灰黄褐色砂質土（3より明）
16　灰白色砂
17　浅い黄橙色砂
18　暗褐色粘質土
19　黒色粘質土
20　黒褐色粘砂質土
21　灰黄褐色砂質土（灰黄褐色砂混じり。鉄分沈着）
22　浅い黄橙色粗砂
23　黒褐色粘質土（植物遺体を含む）
24　暗褐色粘質土
25　灰黄褐色砂質土（3より明。灰黄褐色粗砂混じり）
26　灰黄褐色砂（4より暗）
27　灰黄褐色砂質土（4より暗。5～10㎜大の灰白色土粒を含む）
28　灰黄褐色砂質土（5、27より明。5～10㎜大の灰白色土粒を含む）

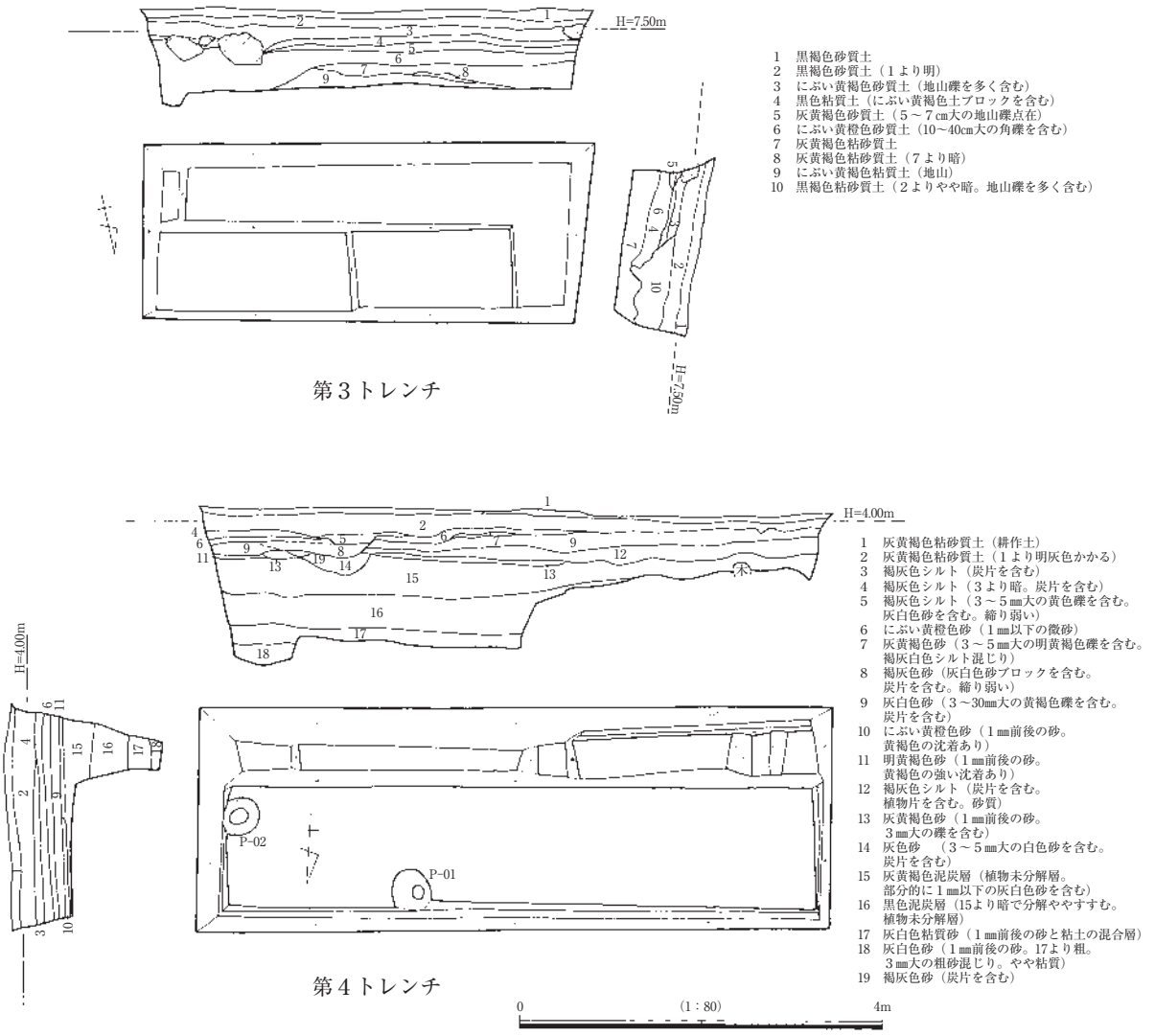
第2トレンチ

0　(1：80)　4m

第17図　良田稲場所在遺跡 第1・第2トレンチ実測図

小結

良田稲場所在遺跡は、湖山池から400m程度内陸の良田集落南に広がる入り組んだ小谷平野の、正面にそびえる丘陵（標高80m）北裾小谷を中心に展開する遺跡である。この小谷は、間に小さな尾根を隔てて第４トレンチを設定した東側の谷幅30m弱の小谷と、谷幅25m程度の第３トレンチを設定した西側の小谷とに分かれ、第１トレンチは東側小谷の開口部東に、第２トレンチは西側小谷の開口部東寄りの水田部にそれぞれ設定した。第３トレンチで畑の耕作に伴う可能性のある土坑、第４トレンチで時期不明のピットなどが検出されたが、遺物は第４トレンチで泥炭層から杭状木製品が出土した他は耕作土中で陶磁器細片などが数点出土するにとどまる。100m余り東に離れた丘陵東側の平野部および東に開けた小谷では昨年度の試掘調査で墨書土器を始めとした７～９世紀の遺物が多く出土した良田平田所在遺跡が展開するが、その時期の遺物は皆無である。また、第１トレンチでは標高2.48m、第４トレンチでは3.63mで泥炭層を検出しており、第１トレンチと同じ水田部に設定した第２トレンチでは地表面の標高3.16mで第１トレンチとは比高差48cmを測るが明確な泥炭層は確認されなかった。このことは湖山池水域の影響範囲が第１トレンチと第２トレンチ間でラインが設定できるとともに、遺跡の立地に関しある程度平野内で選択されていた可能性が考えられる。

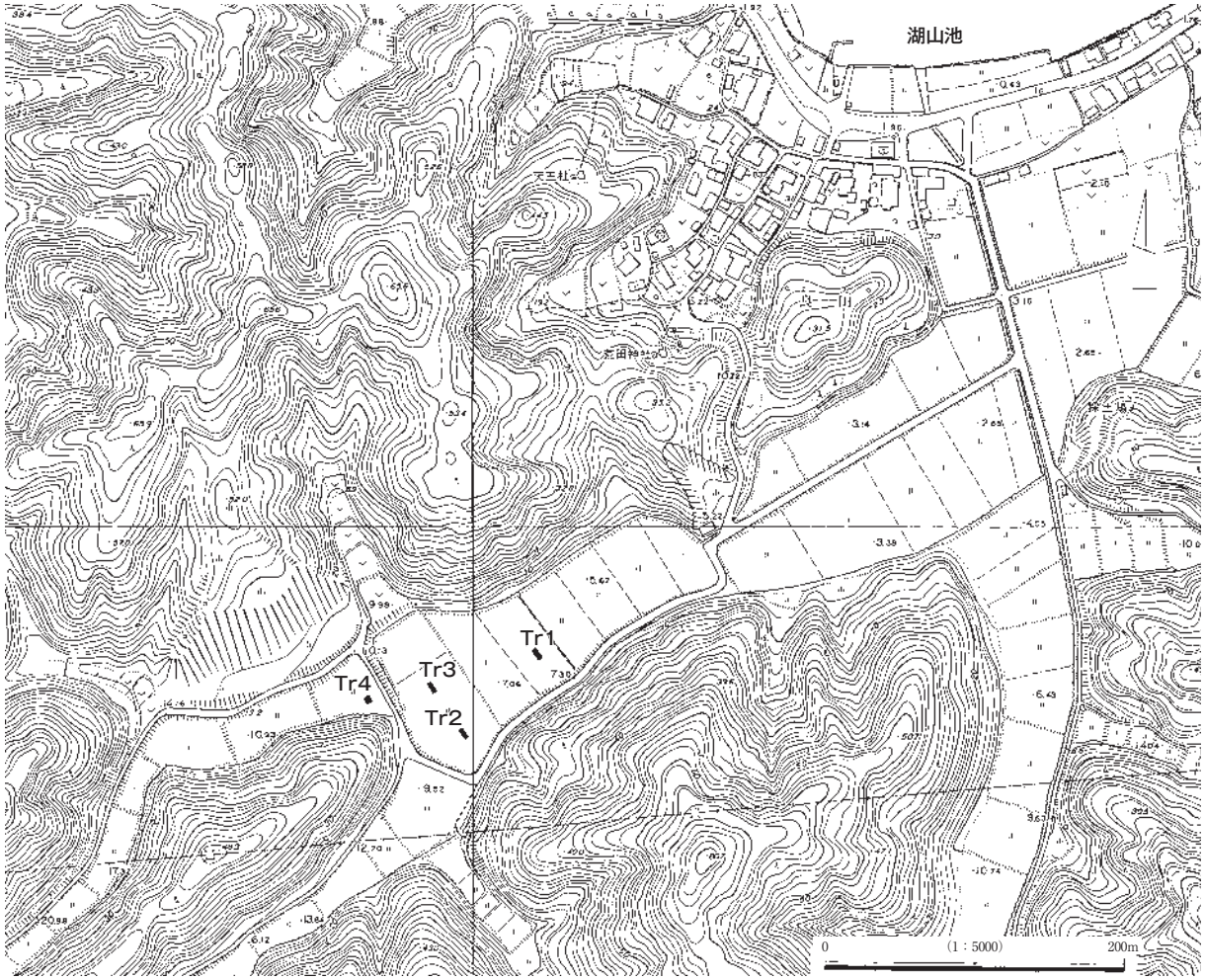


第18図　良田稲場所在遺跡 第３・第４トレンチ実測図

第６節　良田中道所在遺跡

良田中道所在遺跡は、湖山池から500m余り内陸の良田集落南に広がる入り組んだ小谷平野の西奥部、さらに谷が分岐する手前の若干膨らむ平野部に展開する遺跡である。良田集落南の小谷平野にはこの他に、平成21年度、墨書土器をはじめ７～９世紀の遺物が多く出土した良田平田所在遺跡、中世期の良田山廻所在遺跡、良田稲場所在遺跡が分布する。また、湖山池から100m内陸の良田集落畑地では奈良時代の良田所在遺跡が平成17年度に確認されている。良田谷への東入口の谷部では弥生～古墳時代の祭祀遺跡として古くから知られる塞ノ谷遺跡が所在する。良田集落背後の丘陵上には、38基余りで構成される良田古墳群、良田集落南の小平野の縁辺に展開する良田所在古墳群、良田谷の東側丘陵の良田山廻古墳群と、周辺には小規模前方後円墳を含む各種古墳が数多く分布している。

今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、遺跡計画路線内に計４箇所の試掘トレンチを設定した。



第19図　良田中道所在遺跡 調査トレンチ位置図

第１トレンチ（Tr－１）〔第20図　図版８・９〕

湖山池湖畔から530m南西へ入った小谷平野中央部の水田に、谷の傾斜に対し直交（南北）方向に設定した3.4×7.5mのトレンチである。谷奥の70m南西に第２、３トレンチが所在する。周囲には圃場整備による段状の大きな区画の水田が広がる。地表面の標高6.37mを測る。地表下2.09mの標高4.28mまで掘り下げを行った。第１・２層耕作土の下は真砂土が混じる第３層明黄褐色シルト（客土）で、凹凸のある地盤を平坦に整地している。特にトレンチ北壁では暗渠埋設の掘り込みなどもあり層位が

乱れる。第３層下は黒味かかる第７層褐灰色粘土および第９層黄灰色粘土が厚さ30㎝程度広がり、その下層に第16・20・22層のやや灰白色かかるシルトが堆積、さらに下層の第23～26層は間に黄褐色砂（第24層）をはさんで安定した黄灰色粘土層である。トレンチ南側では、第７・９層と第16・22層の間に第10～15、27・29層からなる複雑に分かれる層位があり、トレンチ南側で検出した土坑SK-01は第22もしくは16層での検出であるが、埋土は第９層に似ることからこれらの層位が遺構面とみられる。SK-01は検出面で長さ1.42m、幅0.94m、深さ8.6㎝を測る。埋土から須恵器細片１と刺さった木杭片が出土している。遺物はこの他、耕作土中から土師器・須恵器細片が各１点出土している。

第２トレンチ(Tr-２)〔第20図　図版９〕

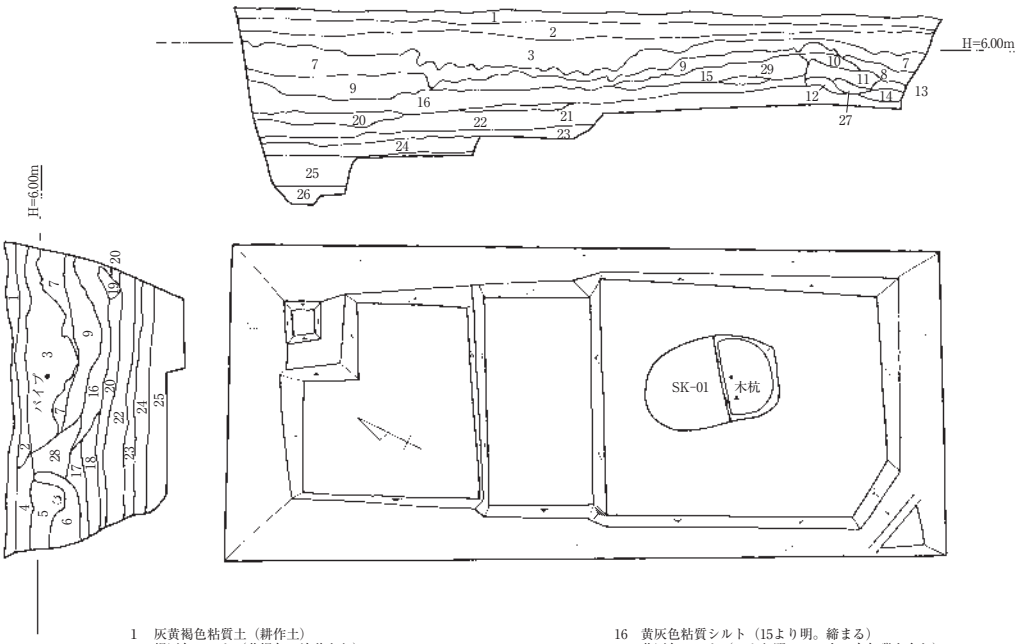
湖山池湖畔から600m余り南西へ入った小谷平野の谷奥部、さらに谷が分岐する手前の水田に南北方向に設定した３×10.3mのトレンチである。谷の下位70mに第１トレンチ、同一水田の30m北西に第３トレンチが所在する。谷の下位側には圃場整備による段状の大きな区画の水田が広がる。地表面の標高7.90mを測る。地表下1.53mの標高6.23mまで掘り下げを行った。第１層耕作土の下は第２層灰黄褐色砂質土で厚さ20㎝程度の安定した層である。第２層下は暗渠の掘り込み（第10・17・16層）や真砂土を含んだ客土（第３層）に覆われ、特にトレンチ南側を中心として層位の乱れが観察される。第４・14層黒褐色粘質土は第１トレンチ第９層に対応するとみられ、やや灰白色かかる30㎝程度の安定した第５層暗灰黄色粘質土の下、第23・30層が遺構面となる。第28・29層が溝状遺構で東壁断面より深さ25㎝を測る。以下、第24・25層と黄灰色の粘質土・砂質土であるが、トレンチ東側で谷下位方向への落ち込む層を観察することができる。遺物は出土しなかった。

第３トレンチ(Tr-３)〔第21図　図版９・10〕

湖山池湖畔から600m余り南西へ入った小谷平野の谷奥部、さらに谷が分岐する手前の水田中央部に南北方向に設定した３×10mのトレンチである。谷の下位75mに第１トレンチ、同一水田の30m南に第２トレンチが所在する。谷の下位側には圃場整備による段状の大きな区画の水田が広がる。地表面の標高7.89mを測る。地表下2.00mの標高5.89mまで掘り下げを行った。第１・２層耕作土下の第３層は、木片や黄褐色土と褐灰色粘土が混じり合う35㎝弱の比較的均一な厚さの客土であり、土管の暗渠を下層に埋設している。その下の黒味かかる第５層褐灰色粘土層は第１トレンチ第９層、第２トレンチ第14層に対応するとみられる。第６層をはさんで第９・16層上面でトレンチを横断する溝状遺構SD-01、２m程北側に離れた一面下層の第14・17層上面でSD-02を検出した。SD-01が幅1.13m、深さ0.80m、SD-02が幅0.99m、深さ0.62mを測る。これらは幅に対し深さのあるほぼ同様な断面形状で併存する可能性も完全には否定できない。埋土は共に粗砂とシルトの混合で基盤となる第９～20層はそれぞれ厚さ10㎝程度のシルト層である。以下、標高6.5m下は砂をはさむ粘土層である。また、北壁断面の第20層上面で深さ18㎝のピット状の落ち込みを確認している。遺物はトレンチ内埋土より土師器細片３点が出土している。

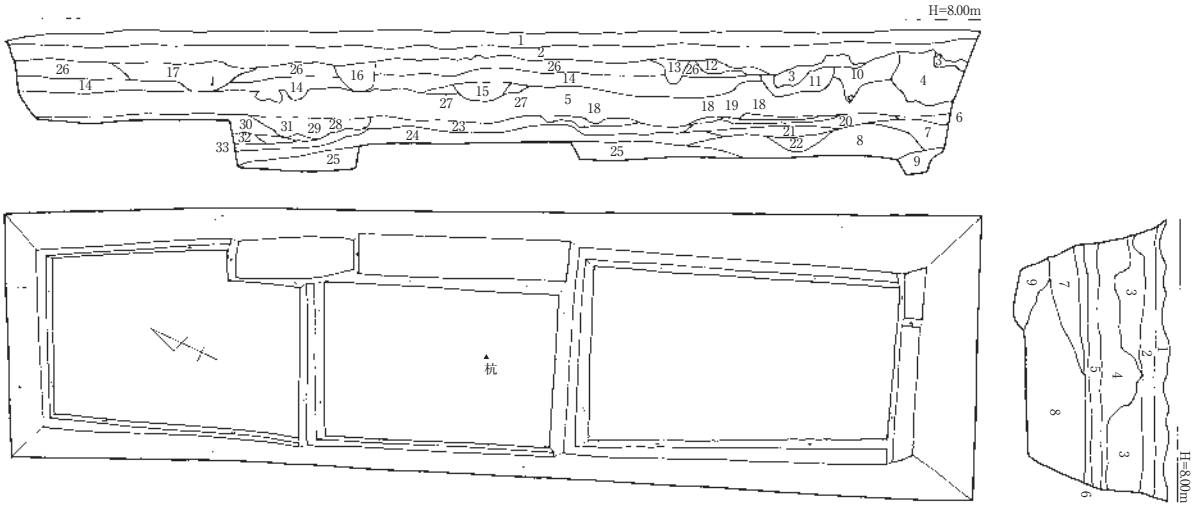
第４トレンチ(Tr-４)〔第21図　図版10〕

湖山池湖畔から650m程度南西へ入った小谷平野の谷奥部、さらに谷が分岐する北西側に展開する谷の入口の水田に設定した4.1×4.1mのトレンチである。谷の下位に段を大きくとって広がる水田に第１～３トレンチが所在する。谷の下位側には圃場整備による段状の大きな区画の水田が、谷上位の狭小な小谷には段状の水田が谷奥部へ続く。地表面の標高9.19mを測る。地表下2.25mの標高6.94mまで掘り下げを行った。第１・２層耕作土下の第３層は真砂土混じりの客土で、第４層褐灰色粘質シルト、黄褐色の強い沈着があり床土とみられる第５層褐灰色粘土である。以下、確認した第６～10層は非常に安定した粘土の堆積で、青色かかる第７層褐灰色粘土は第１トレンチ第９層に対応すると思われる。遺構は検出されなかった。遺物は第７層で土師器細片１点、横櫛片１点、第６層中に2.1×0.8×15㎝の角板が直立した状態で出土している。



1　灰黄褐色粘質土（耕作土）
2　褐灰色シルト（黄褐色の沈着あり）
3　明黄褐色シルト（褐灰色と真砂土の混合層。10cm大の礫あり。暗渠埋土）
4　褐灰色シルト（２より明。１～３cm大の黄褐色礫を含む）
5　明黄褐色シルト（１～５cm大の黄褐色礫を含む。暗渠埋土）
6　褐灰色粘土（シルト混）
7　褐灰色粘土（シルト混。炭片を僅かに含む。黄褐色の沈着あり）
8　褐灰色粘土（黄灰色粘土ブロックを含む）
9　黄灰色粘土（シルト混）
10　褐灰色シルト（１～10mm大の砂礫を含む）
11　褐灰色シルト（10より粘質。１mm大の均一砂礫を含む）
12　明黄褐色砂礫（真砂土と１cm大礫の混合層）
13　黄灰色シルト（ややオリーブ色かかる）
14　黄灰色シルト（13より暗。真砂土を含む）
15　黄灰色シルト
16　黄灰色粘質シルト（15より明。締まる）
17　黄灰色シルト（16より明。１mm大の白色礫を含む）
18　黄灰色シルト（16、17より明。１mm以下の黄褐色砂を含む）
19　灰白色砂（１mm以下の均一な砂）
20　灰黄色砂（１mm以下の均一な砂）
21　黄灰色シルト（22より明。１～10mm大の砂礫を含む）
22　黄灰色シルト（２mm大の黄褐色礫を均一に含む）
23　黄灰色粘土（22より明。黄灰色シルトをブロック状に含む）
24　黄灰色砂（１mm以下の均一な砂。黄灰色粘土を層状に含む）
25　黄灰色粘土（灰色かかる。１mm前後の砂を含む）
26　黄灰色粘土（粘質強。ややシルト混じり。25より砂礫の含み少）
27　褐灰色粘土
28　黄灰色粘土（９より暗　シルト混）
29　黄灰色粘土（15より明。シルト混）

第１トレンチ

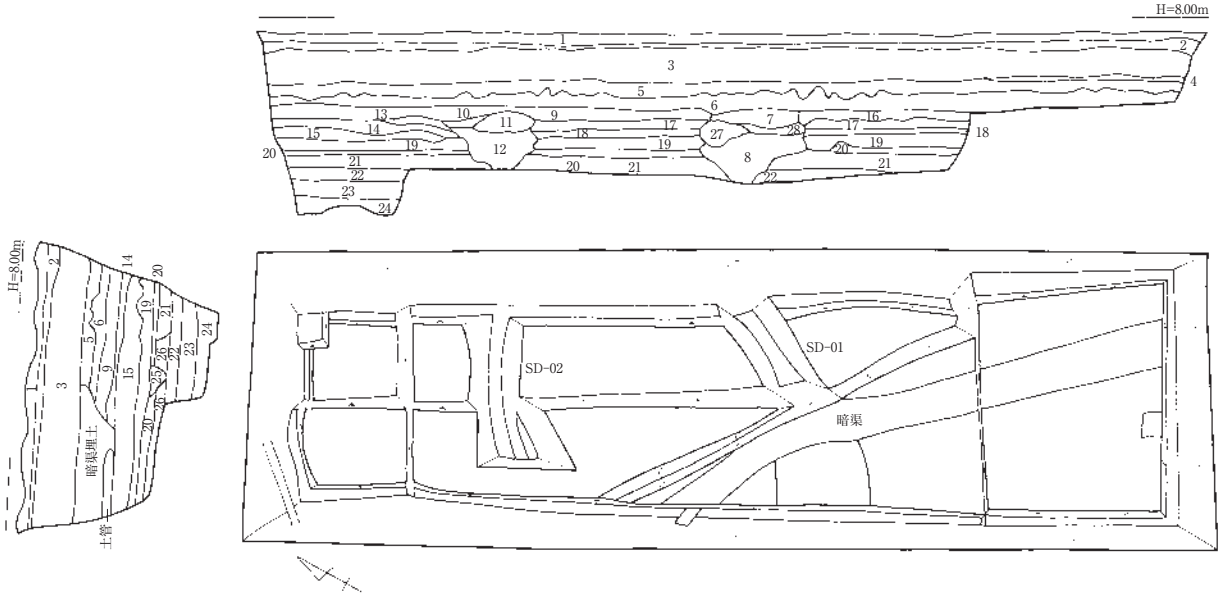


1　褐色粘砂質土（耕作土）
2　灰黄褐色砂質土（鉄分沈着）
3　黄褐色粘質土（黒褐色粘質土ブロックを含む）
4　黒褐色粘質土（黄褐色粘質土、暗灰黄色粘質土ブロックを含む）
5　暗灰黄色粘質土
6　黒褐色粘質土（褐灰色粗砂を僅かに含む）
7　暗灰黄色粗砂（５～10mm大の軟岩粒を含む）
8　明黄褐色砂（３～５cm大の軟岩点在）
9　黄灰色砂礫（２～３cm大の円礫混じり）
10　黒褐色粘質土（黄褐色粘質土、暗灰黄色粘質土ブロックを含む）
11　黒褐色粘質土（10より暗。暗灰黄色粘質土ブロックを含む）
12　黒褐色粘質土（11、26より暗。黄褐色粘質土ブロックを含む）
13　灰黄褐色粘質土（黒褐色粘質土ブロックを含む）
14　黒褐色粘質土（11より明。鉄分僅かに沈着）
15　明黄褐色砂（真砂土）
16　黒褐色粘質土（２～５cm大の角礫、明黄褐色土粒を含む）
17　黒褐色粘質土（暗渠埋土）
18　にぶい黄橙色細砂（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）
19　褐灰色砂質土（にぶい黄橙色細砂混じり）
20　黄灰色砂（植物遺体、にぶい黄橙色細砂を含む）
21　褐灰色粗砂（５mm大の礫を含む）
22　黄灰色粗砂
23　暗灰黄色粘質土（５より明。植物遺体を多く含む。にぶい黄橙色細砂をブロック状に含む）
24　黄灰色粘質土（植物遺体を僅かに含む）
25　黄灰色砂質土（24より暗）
26　黒褐色粘砂質土（14より明。鉄分沈着）
27　黒褐色粘質土（黒色粘土ブロックを含む）
28　暗灰黄色粘質土
29　灰黄色粗砂
30　褐灰色粗砂（黄褐色粗砂混じり）
31　にぶい黄橙色細砂
32　黄灰色砂質土（植物遺体を含む）
33　黒褐色粘質土

第２トレンチ

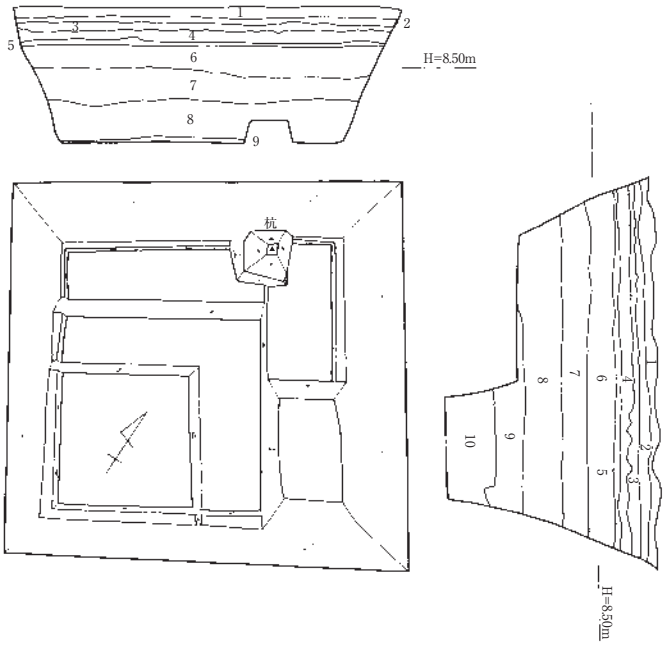
0　(1：80)　4m

第20図　良田中道所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図



1　灰黄褐色粘質土（耕作土）
2　褐灰色シルト（黄褐色の沈着あり。締まる）
3　褐灰色粘質シルト（黄灰色粘土ブロックを含む）
4　黄灰色シルト
5　褐灰色粘土（シルト混じり。黄灰色粘土ブロックを含む）
6　黄灰色粘質シルト（５㎜大の浅い黄色礫を含む）
7　灰白色砂（１㎜前後の砂。５㎜大の礫を層状に含む）
8　黄灰色砂（１㎜前後の砂と５～25㎜大の礫の混合層）
9　黄灰色粘質シルト（６より暗。僅かに浅い黄色礫を含む）
10　黄灰色シルト（１㎜大の砂を含む）
11　黄灰色砂（１㎜前後の砂。５㎜大の礫を層状に含む）
12　黄灰色砂（11より暗。３～20㎜大の粗砂。１㎜前後の砂を含む）
13　黄灰色砂（炭片を含む。１㎜前後の砂。５㎜大の礫を含む。シルト混）
14　黄灰色粘質シルト（５㎜大の白色礫を含む）
15　灰黄色砂礫（１～50㎜大の粗砂）
16　黄灰色シルト（炭片を含む。１㎜前後の砂を含む）
17　黄灰色シルト（16より暗。炭片を含む。16・18より粘質かかる）
18　黄灰色シルト（17より明。炭片を含む。17より砂質）
19　暗黄灰色粘質シルト（炭片を含む）
20　灰黄色シルト（炭片を含む。締まる）
21　暗黄灰色粘土（シルト混。１㎝大の黄灰色粘土ブロックを含む）
22　黄灰色粘土（僅かにシルト混）
23　黄灰色砂（やや青みかかる。１㎜前後の砂。シルト混）
24　黄灰色粘土（僅かにシルト混）
25　灰黄色粘質土
26　暗黄灰色粘土
27　黄灰色粗砂
28　灰黄色砂

第３トレンチ



1　にぶい黄褐色粘質土（耕作土）
2　明黄褐色シルト（真砂土と褐灰色土の混合層。
　褐灰色粘土ブロックを含む）
3　明黄褐色シルト（真砂土、褐灰色土ブロックを若干含む）
4　褐灰色粘質シルト（黄褐色の沈着あり。締まる）
5　褐灰色粘土（黄褐色の沈着強。シルトを含む）
6　灰色粘土（炭片を含む。黄褐色の沈着あり）
7　褐灰色粘土（炭片を含む。青色をおびる。
　僅かにシルト混。締まる）
8　褐灰色粘土（７より明。１㎜前後の礫を含む。
　３㎜前後の白色礫を含む）
9　黄灰色粘土（植物片を含む。１～３㎝大の礫を含む。
　砂混じり。８より明）
10　褐灰色粘土（粘質強）

第４トレンチ

0　(1：80)　4m

第21図　良田中道所在遺跡 第３・第４トレンチ実測図

小結

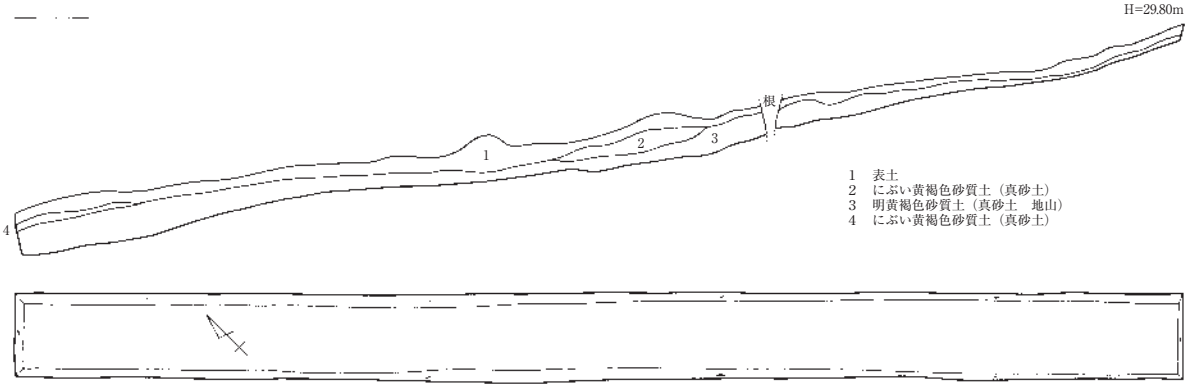
良田中道所在遺跡は、湖山池から500m余り内陸の良田集落南に広がる入り組んだ小谷平野の西奥部のさらに谷が分岐する手前の若干膨らむ平野部に展開する遺跡である。谷の下位から第１トレンチ、谷が分岐する手前に第２、３トレンチ、分岐した北側の谷口に第４トレンチをそれぞれ設定した。耕作土の下は真砂土混じりの客土がなされ、その下位の第１トレンチ第７層、第２トレンチ第26層、第３トレンチ第３層、第４トレンチ第６層が、さらに下層の第１トレンチ第９層（標高5.69m）、第２トレンチ第14層（7.48m）、第３トレンチ第５層（7.35m）、第４トレンチ第７層（8.52m）がそれぞれ対応する層とみられる。以下は粘土および砂など場所によって堆積状況が異なる。特に谷の合流部にあたる第２、３トレンチでは標高７m付近でやや複雑な層位となり、第２トレンチの標高6.98mで溝状遺構が、第３トレンチでは標高7.05mで溝状遺構、6.58mでピットが検出されている。出土遺物は多くはないものの、小谷の谷奥平野部において細々ながらも遺跡が展開した可能性が大きい。

第７節　良田山廻古墳群

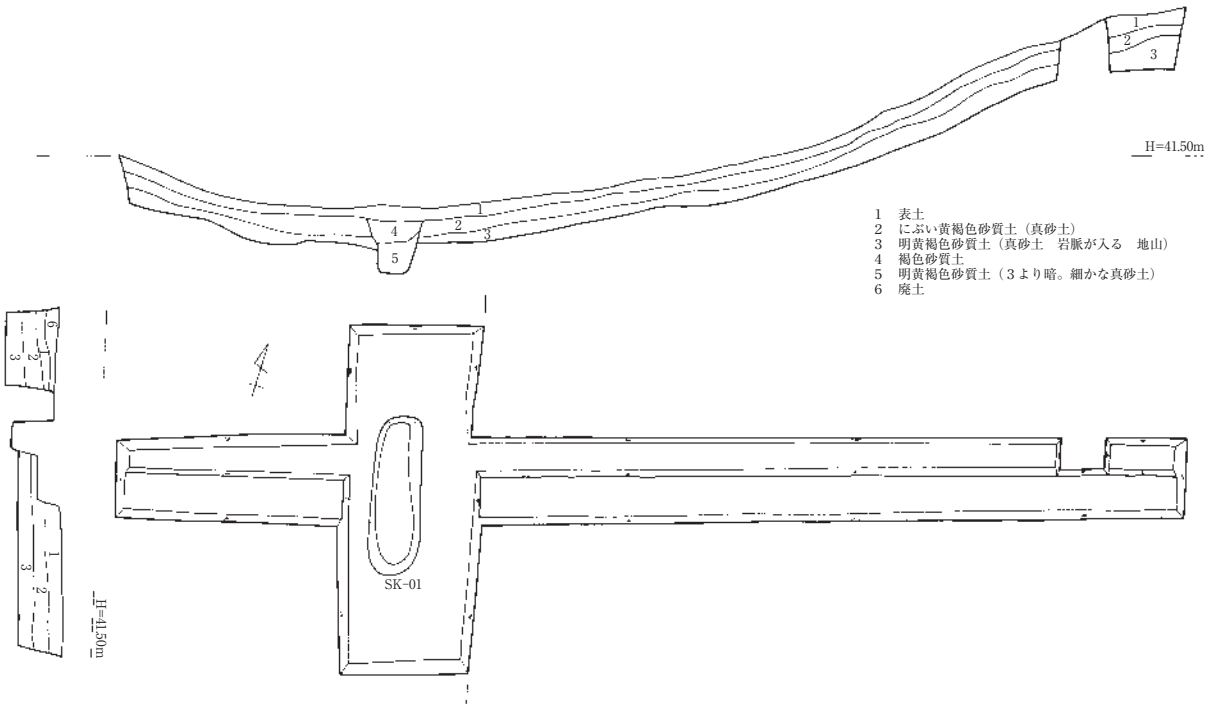
湖山池南岸に位置する良田集落の南東丘陵に立地する。同一丘陵上には18基あまりからなる高住古墳群、銅鐸出土地とされる高住遺跡が所在し、山麓には舟形、刀形などの木製品や分銅形土製品が出土し、祭祀遺跡として知られる塞ノ谷遺跡が位置している。また、集落の西側丘陵上には38基あまりで構成される良田古墳群が立地し、南側水田部や丘陵裾部には良田平田所在遺跡、良田中道所在遺跡などが所在している。

今回の調査は鳥取西道路整備計画に伴うもので、21年度に行ったTr－１～Tr－４の調査に引き続き、新たに３箇所のトレンチ（Tr－５～Tr－７）を設定し実施した。

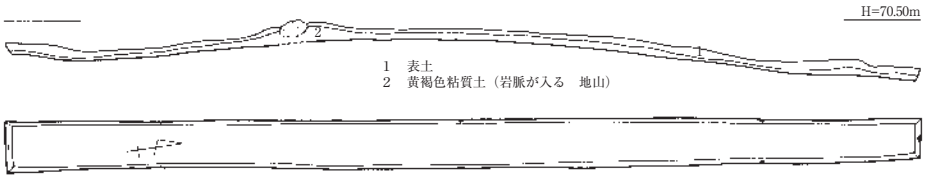
第22図　良田山廻古墳群 調査トレンチ位置図



第５トレンチ



第６トレンチ



第７トレンチ

0　(1：80)　4m

第23図　良田山廻古墳群 第５・第６・第７トレンチ実測図

第５トレンチ(Tr－５)〔第23図　図版10〕

南北に延びる主稜線から西に派生した尾根の先端頂部の傾斜変換地点に設定した0.9×12.4mのトレンチである。厚さ６～36cmあまりの表土下には流入土とみられるにぶい黄褐色砂質土（真砂土）の堆積が部分的に見られる。地山は第３層の明黄褐色砂質土である。地山を加工した痕跡や盛土など検出されず、遺構、遺物は確認されなかった。

第６トレンチ(Tr－６)〔第23図　図版10〕

第５トレンチから南東約50mの高位に位置し、尾根上で観察された隆起状地形から鞍部間および鞍部平坦部に設定した0.85×11.3mと1.4×2.5mのトレンチである。厚さ８～15cmあまりの表土下には均一のにぶい黄褐色砂質土（真砂土）が堆積し、その下層に岩脈が入る明黄褐色砂質土が見られる。第２層以下が基盤となる堆積層と思われる。古墳の存在を示す盛土や地山加工の痕跡は認められなかったが、鞍部の平坦部から地山を掘り込んだ土坑が検出された。土坑（SK-01）は第２層上面から掘り込まれており、長さ1.78m、幅50～55cm、深さ50cm前後を測る。底面は平坦で長さ1.58m、幅25～40cmの長楕円形に近い形状を呈する。埋土は上下２層で、上層に褐色の砂質土（第４層）、下層に明黄褐色の細かな真砂土（第５層）である。ともに土坑全体に見られ、埋め戻しされた様子がうかがわれる。出土遺物はなく時期や性格は不明である。

第７トレンチ(Tr－７)〔第23図　図版11〕

標高70m前後の南北に延びる主稜線上に位置し、平成21年度調査のTr－４から南約18mに設定した0.5×9.7mのトレンチである。厚さ８cm前後の表土下は岩脈が入る黄褐色粘質土の地山である。地山加工の痕跡や盛土もなく古墳は存在しないものと思われる。遺物は出土しなかった。

小結

調査の結果、第６トレンチから性格、時期不明の土坑が１基検出されたが、それぞれのトレンチからは古墳の存在を示す痕跡は確認されなかった。２年次にわたる試掘調査（Tr－１～７）で遺構、遺物は検出されなかったものの、同一丘陵には高住古墳群や銅鐸出土地などが知られており注意を要する地域といえる。

第８節　良田所在古墳群

湖山池南岸に所在する良田集落の南丘陵に位置する。周辺丘陵には高住古墳群や良田古墳群が展開し、丘陵間に開けた水田部を中心に良田平田所在遺跡、良田中道所在遺跡などが立地している。

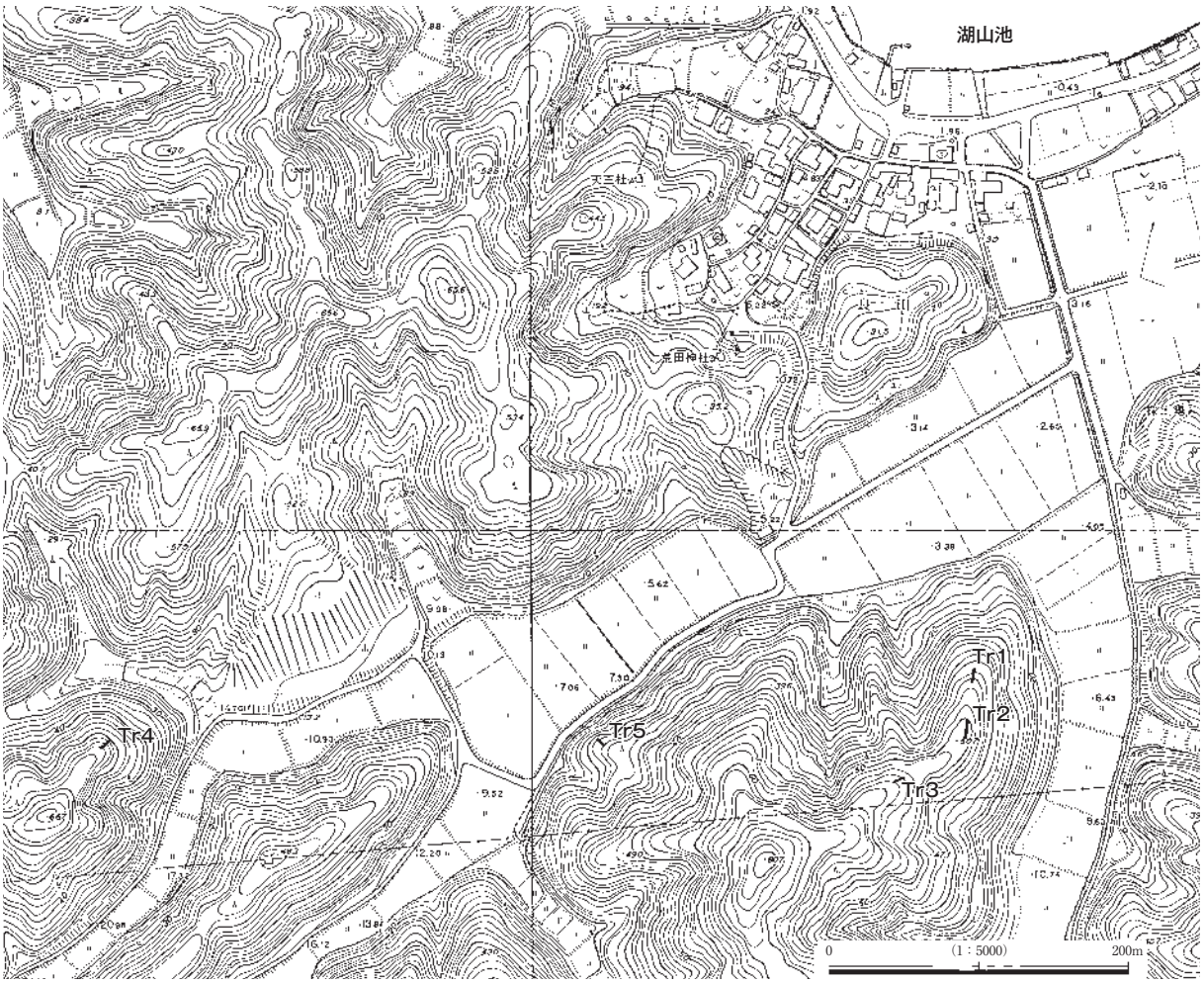
今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴うもので計画路線内の５箇所にトレンチ(Tr－１～Tr－５)を設定し調査を行った。

第１トレンチ(Tr－１)〔第25図　図版11〕

南西から北東へ延びる尾根の先端に位置し、標高44mあまりの頂部平坦部に設定した0.9×8.8mのトレンチである。厚さ８cm前後の表土下には基盤層とみられる真砂土の黄褐色砂質土（第２層）が堆積し、その下層は岩脈が入る明黄褐色粘質土である。地山を加工した痕跡もなく、遺構、遺物は検出されなかった。

第２トレンチ(Tr－２)〔第25図　図版11〕

第１トレンチの南25mに位置し、尾根上の平坦部から傾斜変換地点にかけて設定した0.9×14.5mのトレンチである。厚さ10cm前後の表土下には真砂土の黄褐色砂質土（第２層）が堆積し、その下層に明黄褐色の真砂土（第３層）が見られる。第２層と３層は土色に僅かな差異が認められるもののともに均一の真砂土であり基盤層になるものと思われる。傾斜変換地点の表土下に堆積する第４層は斜面からの流入土とみられる。遺構、遺物は検出されなかった。



第24図　良田所在古墳群 調査トレンチ位置図

第３トレンチ(Tr－３)〔第25図　図版11〕

第２トレンチの南西約50mの高位に位置し、標高56.3mの尾根上平坦部に設定した0.9×7.5mのトレンチである。厚さ６～16cmあまりの表土下には地山とみられる岩脈入りの明黄褐色砂質土（第３層）が堆積する。地山を加工した痕跡や盛土もなく遺構、遺物は検出されなかった。

第４トレンチ(Tr－４)〔第25図　図版11〕

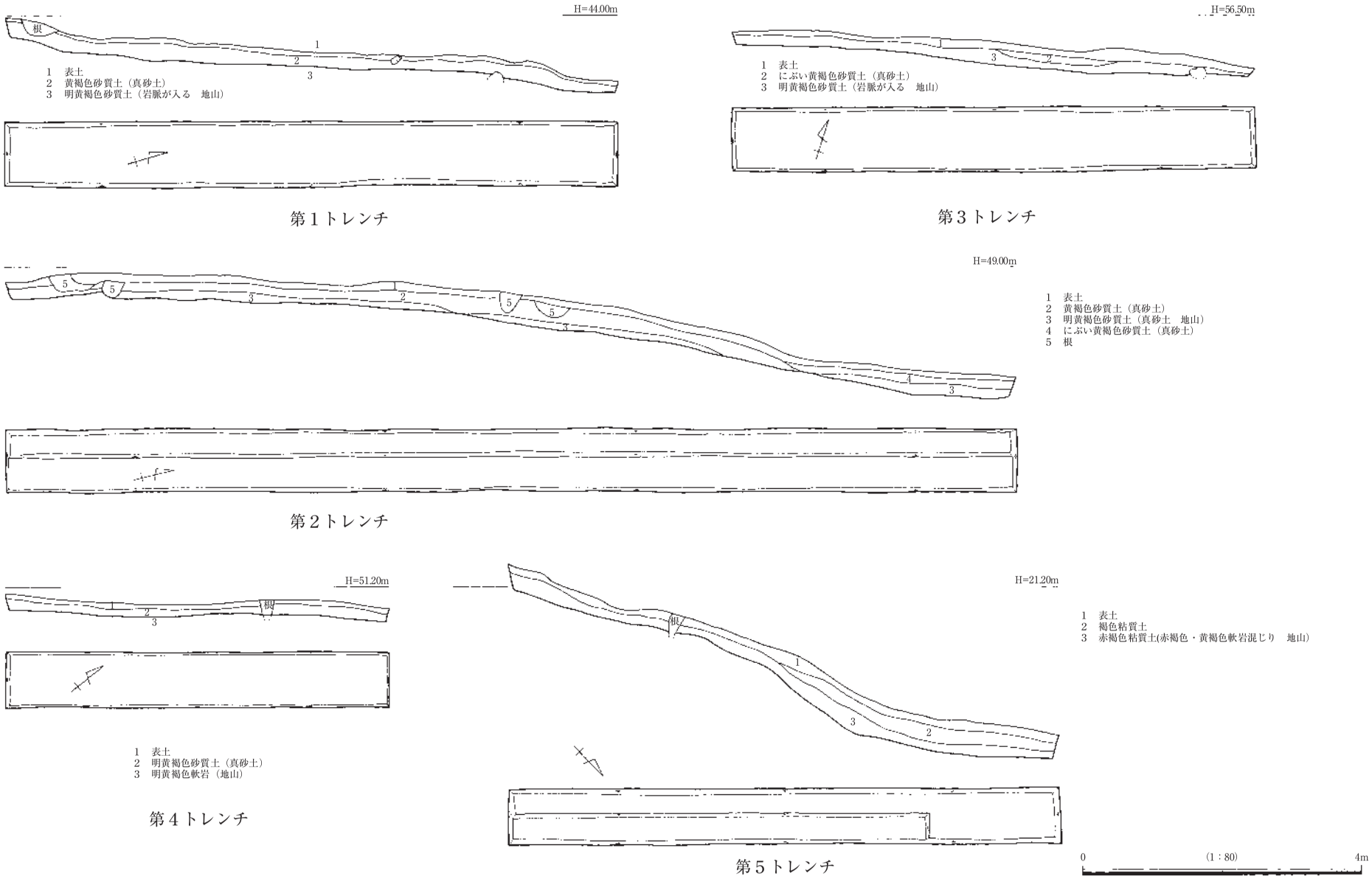
尾根の先端頂部に位置し、尾根上に観察された標高51m前後の平坦部に設定した0.8×5.5mのトレンチである。厚さ８cm前後の表土下に明黄褐色の真砂土（第２層）の堆積が見られ、その下位は明黄褐色の軟岩である。第２層以下が地山と思われる。遺構、遺物は検出されなかった。

第５トレンチ(Tr－５)〔第25図　図版11〕

第１～３トレンチを設定した丘陵から北西に張り出した尾根の先端部に位置し、丘陵斜面の傾斜変換地点に設定した0.8×7.9mのトレンチである。第３層の赤褐色粘質土が地山である。斜面の傾斜変換地点の表土下層に見られる第２層は流入堆積土と思われる。地山を加工した痕跡や古墳の存在を示す盛土などは認められなかった。遺物は検出されなかった。

小結

古墳や中世城郭の存在を確認するため尾根上の平坦部や丘陵斜面の傾斜変換点を中心に５箇所の試掘トレンチを設定し調査を行った。各トレンチから古墳の存在を示す地山加工痕や盛土は認められず、古墳の存在は認められなかった。また、中世城郭の痕跡も確認されず、他の遺構も検出されなかった。遺物はいずれのトレンチからも出土しなかった。

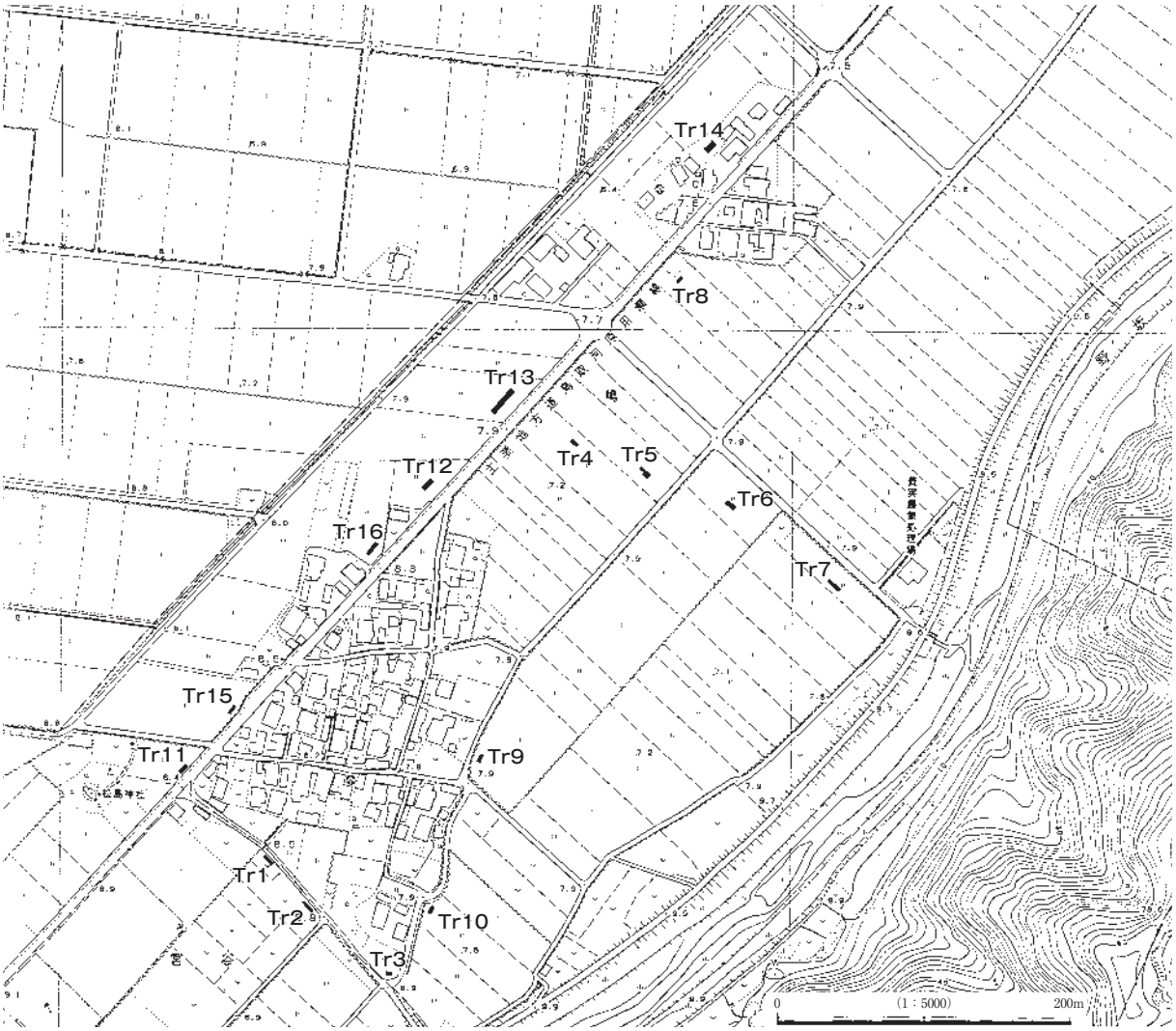


第25図　良田所在古墳群 第１・第２・第３・第４・第５トレンチ実測図

第９節　大桷遺跡

大桷遺跡は大桷集落の東側に位置し、野坂川によって形成された平野の左岸に立地している。現在知られている遺跡の範囲は東西約1.6㎞、南北0.8㎞と広域にわたり、鳥取平野の中でも広範囲に展開する遺跡として捉えられている。周辺丘陵上には桷間、里仁、宮谷、本高、古海、徳尾といった多くの古墳群が形成され、その中には桷間１号墳（全長92m）や里仁29号墳（全長81m）といった因幡地方でも最大級の大型前方後円墳が造営されている。

今回の調査は、県道の拡幅整備計画に伴って実施したもので、昨年度の調査に継続するものである。調査対象地は島集落を北東～南西方向に縦断する県道の整備予定地内で、昨年度調査の第11トレンチと第12トレンチの間に２ヶ所のトレンチ（第15、16トレンチ）を設定して調査を実施した。昨年度の調査では、第11トレンチと第12トレンチの間で遺構が途切れるものと考えられており、本調査でその範囲がさらに限定されるものと想定された。



第26図　大桷遺跡 調査トレンチ位置図

第15トレンチ(Tr-15)〔第27 図　図版11・12〕

松島神社の北東約115m程度の水田地に設定した２×７mのトレンチである。調査時点で現耕作土の一部を使って暫定の畦畔が作られていたため、調査の掘下げ面は、標高7.55m程度である。掘下げ面から20㎝程度は現耕作土で、土中から瓦で蓋をした形態のものや、河原石を入れた暗渠を検出した。その下

の第３層上面（標高7.35m程度）から近世以降の陶器椀が出土した溝状遺構を検出した。遺物包含層は第３、15、16、23層で、近世以降の陶磁器類や漆器椀が検出された。また、遺物は検出されなかったが、順層の堆積下で、標高6.8～6.7m付近の第９層（褐灰色粘質土）が昨年度調査の第11トレンチ第７、８層（黒褐色粘質土）に対応する可能性が考えられ、古墳時代の遺物包含層が遺存するものと考えられる。以下では、第11層（灰色粘土）から流木が検出されている（標高6.3m前後）。

なお、上記以外には明瞭な遺構は検出されなかった。

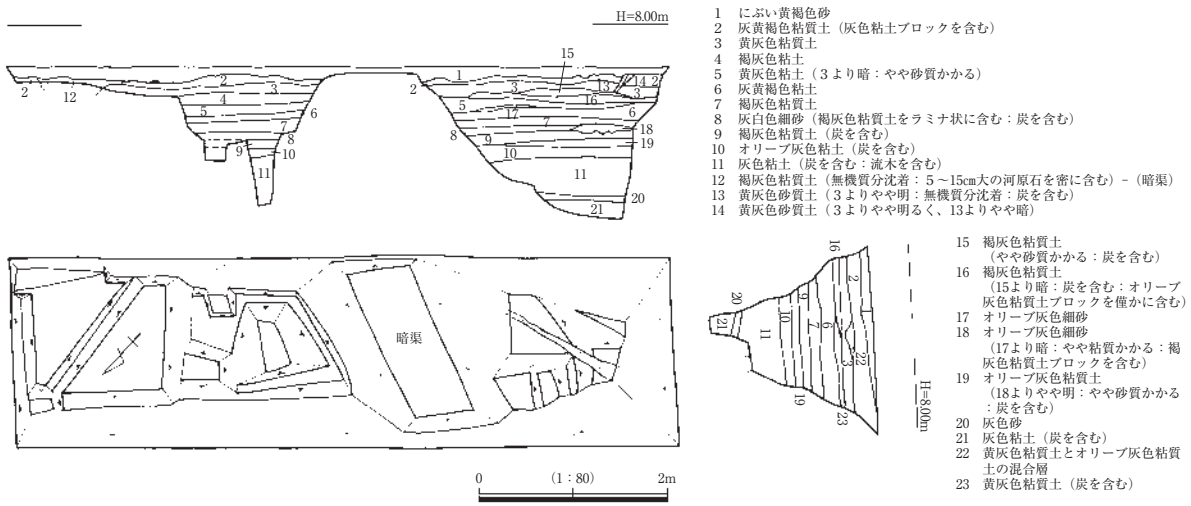
第16トレンチ（Tr-16）〔第28・29図　図版12・13・22〕

第15トレンチの北東約140mの旧水田地に設定した3.5×10.3mのトレンチで、地表面標高は7.6～7.7m程度である。層序は基本的に順層が続き、標高7.5m付近までが耕作土で、その下面から河原石を使用した暗渠が検出された。標高７～6.8m付近の第６、７層が遺物包含層で、弥生土器片と縄文時代晩期の縄文土器片が検出された。この７層下面が遺構検出面で、径２m以上の土坑（SK-01）と長軸0.95m程度の土坑（SK-02）を検出した。前者からは縄文時代晩期の突帯文を付した深鉢（第29図２、３）と弥生時代前期の壺（第29図４）が供伴状態で検出されている。また、遺構に伴わないものの弥生時代前期の甕口縁部（第29図１）が出土している。

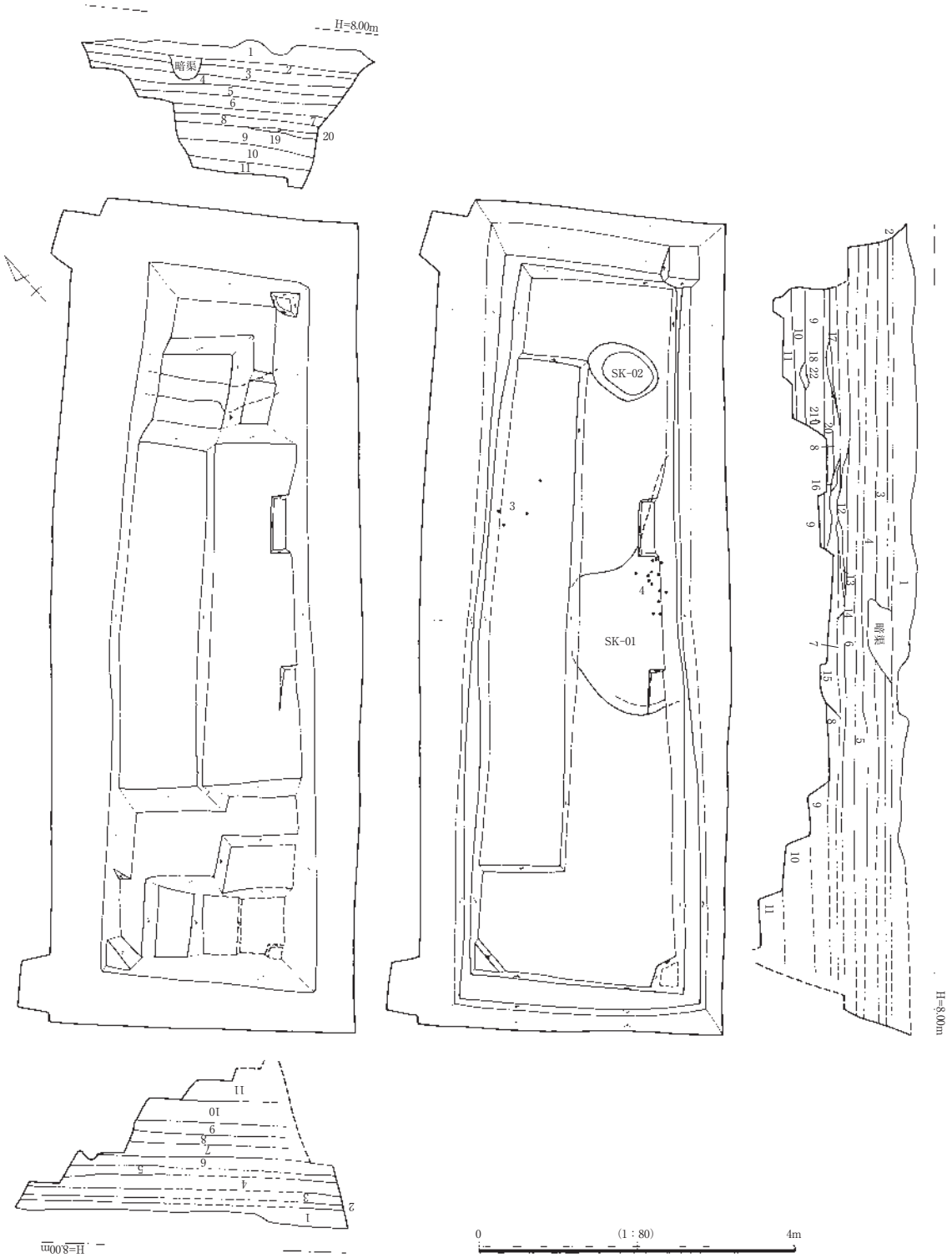
土坑検出面下層の標高6.4m前後堆積する第10層（黄灰色粘質土）上面から、第22層が埋土となる幅0.4mあまりの溝状遺構を検出した。また、標高6.7～6.1m程度の第８、９、10層は、その土層の中に撹拌によってとり込まれた可能性も考えられる下層の堆積土がブロック状に混入することから、遺構が存在する可能性が考えられる。

小結

今回の調査地は、現状では平野部の平坦地のように見られるが、第16トレンチ部分は、本年の第15トレンチや昨年度の第11、12トレンチとは様相が異なり、縄文時代晩期の突帯文土器を供伴する弥生時代前期の遺物が出土した遺構が検出されている。これまでの調査では明らかになっていないが、この第16トレンチ周辺の西側に所在する大桷遺跡の縄文時代の遺構が、あるいは舌状に微高地として遺存する可能性なども考慮する必要があると思われる。また、畦畔等の明瞭な遺構は検出していないものの、土層中のブロックの入り具合等から水田遺構の存在する可能性もあり、開発事業の際には十分配慮が必要である。

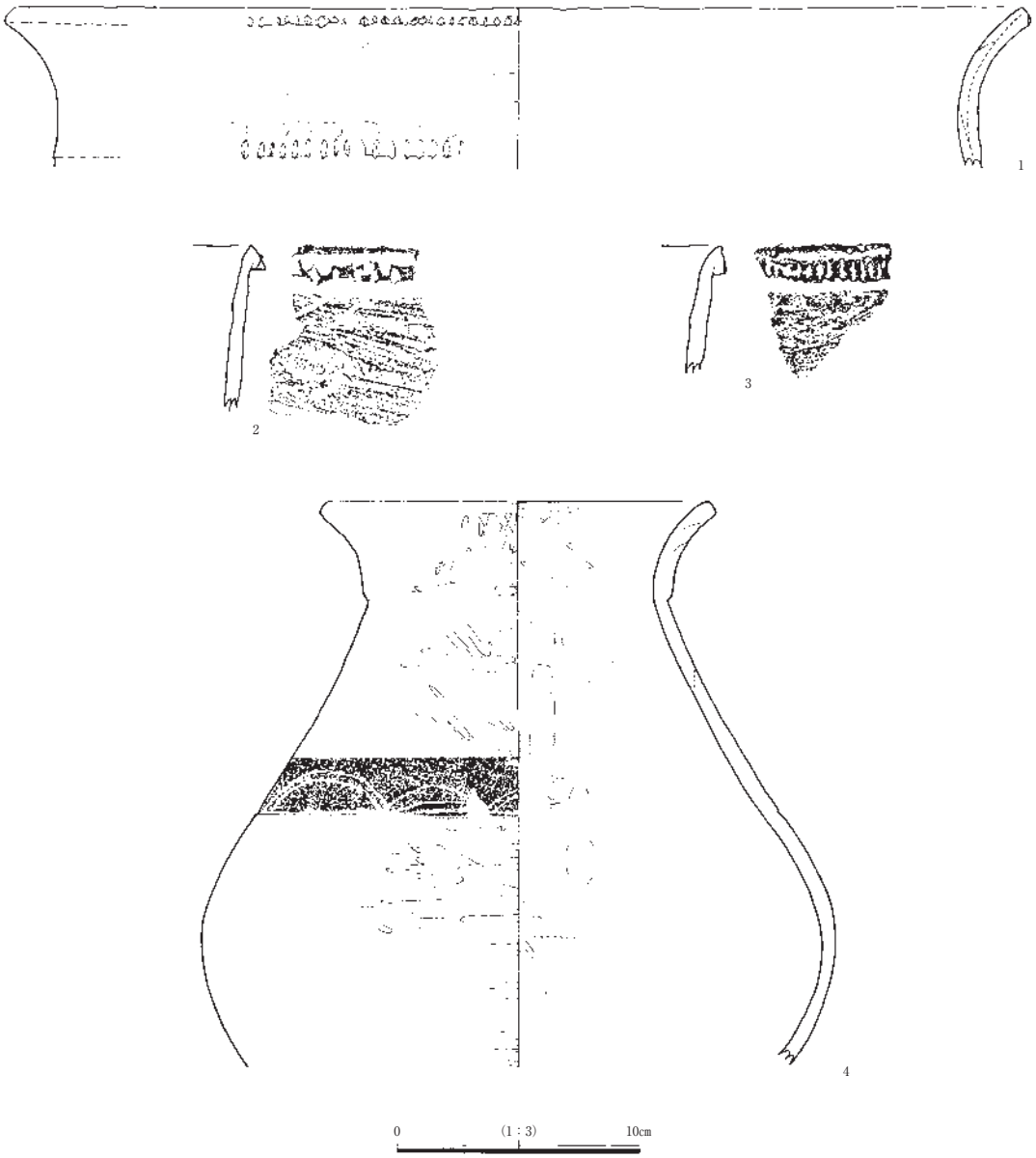


第27図　大桷遺跡 第15トレンチ実測図



1　黒褐色粘(砂)質土-現耕作土
2　褐灰色粘(砂)質土
3　灰黄色粘質土（明黄褐色土ブロックを含む）
4　黄灰色粘質土
5　灰黄褐色粘質土
6　褐灰色粘質土（２より暗：黒褐色土ブロックを多く含む：無機質分沈着）-包含層
7　灰黄褐色粘質土（にぶい黄橙色土ブロックを含む：炭を含む：無機質分沈着）
8　黄灰色粘質土（炭を含む：無機質分沈着：灰色砂質土ブロックを含む）
9　灰色砂質土（黄灰色粘土ブロックを含む）　=10層土のブロック
10　黄灰色粘質土（炭を含む 黄灰色砂質土ブロックを含む）-11層土のブロック
11　黄灰色砂質土（10よりやや明るく、やや粘質かかる）
12　灰黄褐色粘質土
13　灰黄褐色粘質土（12より明：炭を含む）
14　灰色粘質土　（ややオリーブ灰色かかる：炭を含む）
15　灰色粘土（14より灰色度強：炭を多く含む：土器片を多く含む）
16　オリーブ灰色砂質土（炭を含む）
17　灰黄色細砂シルト
18　灰色粘質土 と 灰色細砂：シルトの混合　（炭を多く含む）
19　18と同様　（炭を多く含む：土器細片を含む）
20　黄灰色粘質土（灰色粘土ブロックを含む）
21　黄灰色粘質土（20より暗：黄灰色粘質土 ブロックを含む）
22　灰色粘質土 と 黄灰色粘土の混合　（炭を多く含む）

第28図　大桷遺跡 第16トレンチ実測図



第29図　大桷遺跡 第16トレンチ出土遺物実測図

第10節　天神山遺跡

天神山遺跡は、鳥取平野の西端に形成された潟湖である湖山池の東岸に立地している。湖山池周辺には鳥取市域の中でも一際多くの遺跡、墳墓が所在することで知られ、桂見遺跡、西桂見遺跡、桂見墳墓群、布勢遺跡、湖山第１、２遺跡をはじめとして縄文時代から中世の遺跡が数多く分布している。天神山遺跡の南丘陵にも国史跡である布勢古墳（布勢１号墳）が立地し、天神山遺跡の中央に位置する標高17mあまりの独立丘陵「天神山」には、因幡国支配の拠点となった布施天神山城が築かれている。

今回の調査は、公共下水道整備事業に伴い実施したもので、整備計画内に３箇所のトレンチを設定した。湖山南三丁目地内に位置し、おおむね天神山遺跡の南端にあたる。平成20年度に公共下水道整備事業に伴い遺跡の南東部で第１、２トレンチ、平成21年度に宅地開発に伴い東および南東部で第３、４トレンチの調査を行っている。今回の第５～７トレンチ名は、これらの続き番号として付したものである。

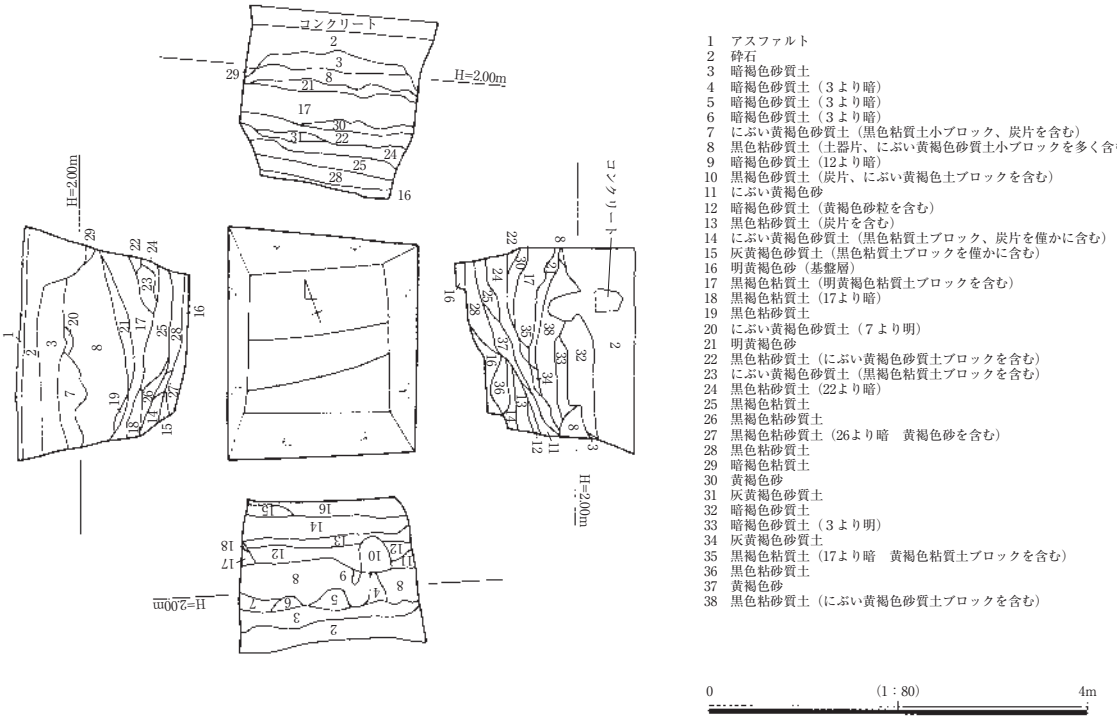
第30図　天神山遺跡 調査トレンチ位置図

第５トレンチ(Tr－５)〔第31・33図　図版13・22・23〕

鳥取緑風高校敷地の南西の農園南を流れる川沿い市道のうち南の宇山方向へ上る市道とのＴ字交差点に設定した２×2.3mのトレンチである。西45m余りに第６トレンチ、西80mに第５トレンチが所在する。地表舗装面の標高2.62mを測る。地表下1.91mの標高0.71mまで掘り下げを行った。標高2.2m、部分的に２m前後まで砕石および客土が行われ、その下層に第３～７、20、32層の旧耕作土とみられる締まりの弱い暗褐色・にぶい黄褐色砂質土が広がる。その下位に黄褐色土と黒褐色土が良く混じり合い土器片を多く含む第８層黒色粘砂質土がトレンチ南西側で厚さ40～50㎝程度堆積する。今回第５トレンチで出土した遺物の多くは第８層中の出土である。その下層の第11層上面で北側へ大きく落ち込む溝状遺構を検出した。底面の第16層明黄褐色砂が地山、第28層が最下層、第11～14層を基盤層として掘り込む。この第11層・12層上面では溝状遺構の他に深さ38㎝のピット（第10層）を検出している。なお、第16層上面で土坑状の遺構（第36層）を検出している。溝状遺構は検出面の標高1.82m、底面の標高0.82m、検出面からの深さ1.01mを測る。

遺物はコンテナ１箱分程度が出土しており、陶磁器、須恵器、瓦質土器、土師器、土錘、匙状木製品などがある。主に土師器と須恵器がそれぞれ半数程度を占め、瓦質片や備前擂鉢片などが僅かに混じる程度である。遺物の多くは第８層中の出土であるが、同層ではやや時期が異なる遺物も含まれる。図化した（第33図１～９）以外にも、耕作土より14世紀後半の古瀬戸の灰釉平碗、第８層より９～10世紀代の緑釉土器細片なども出土している。（第33図１・３・７）が第８層、（第33図８・９）が溝状遺構埋

土、（第33図２・６）が溝状遺構の基盤層である第13層、（第33図４）は上層撹乱土、（第33図５）はトレンチ断面からの転落である。土師器杯（第33図１）は外面指ナデおよび指おさえによってやや内湾する底部から稜をとって外方へ立ち上がる口縁部へと続き内外面赤彩される。土師器皿（第33図２）は底部糸切りで板目の圧痕を観察、口縁端部は先細りで終える。土師器杯（第33図３）は砂粒を多く含むやや粗い胎土で底部糸切り、口縁部の立ち上がりが比較的急である。土師器甕（第33図４）は湾曲するく字状口縁部で内外面ハケ目調整され口縁先端部横ナデ、外面に指おさえ痕が明瞭に残る。製塩土器（第33図５）はやや粗い胎土で内外赤褐色の色調、内面に布目が観察される。瓦質鍋（第33図６）は口縁端面や内面の屈曲に比べて口縁外面の屈曲が甘く丸みをもって体部へ続く、内面および口縁部外面の横ナデ、ナデに比べ体部外面は粗雑な調整である。備前擂り鉢（第33図７）は灰色の色調で６条の擂目を観察、口縁端部内面はやや上方へ摘みあげる形態であることから備前ⅣＡ期、14世紀代とみられる。土錘（第33図８）は中央が膨らむ管状土錘で、一端が欠損するものの幅1.18cmに対し遺存長5.1cmと細長い形状である。匙状木製品（第33図９）は木目より広葉樹とみられ、両端が欠損するが断面浅い椀状で厚さ1.5cm、内面を中心として表面が炭化および暗褐色の色調となる。



第31図　天神山遺跡 第５トレンチ実測図

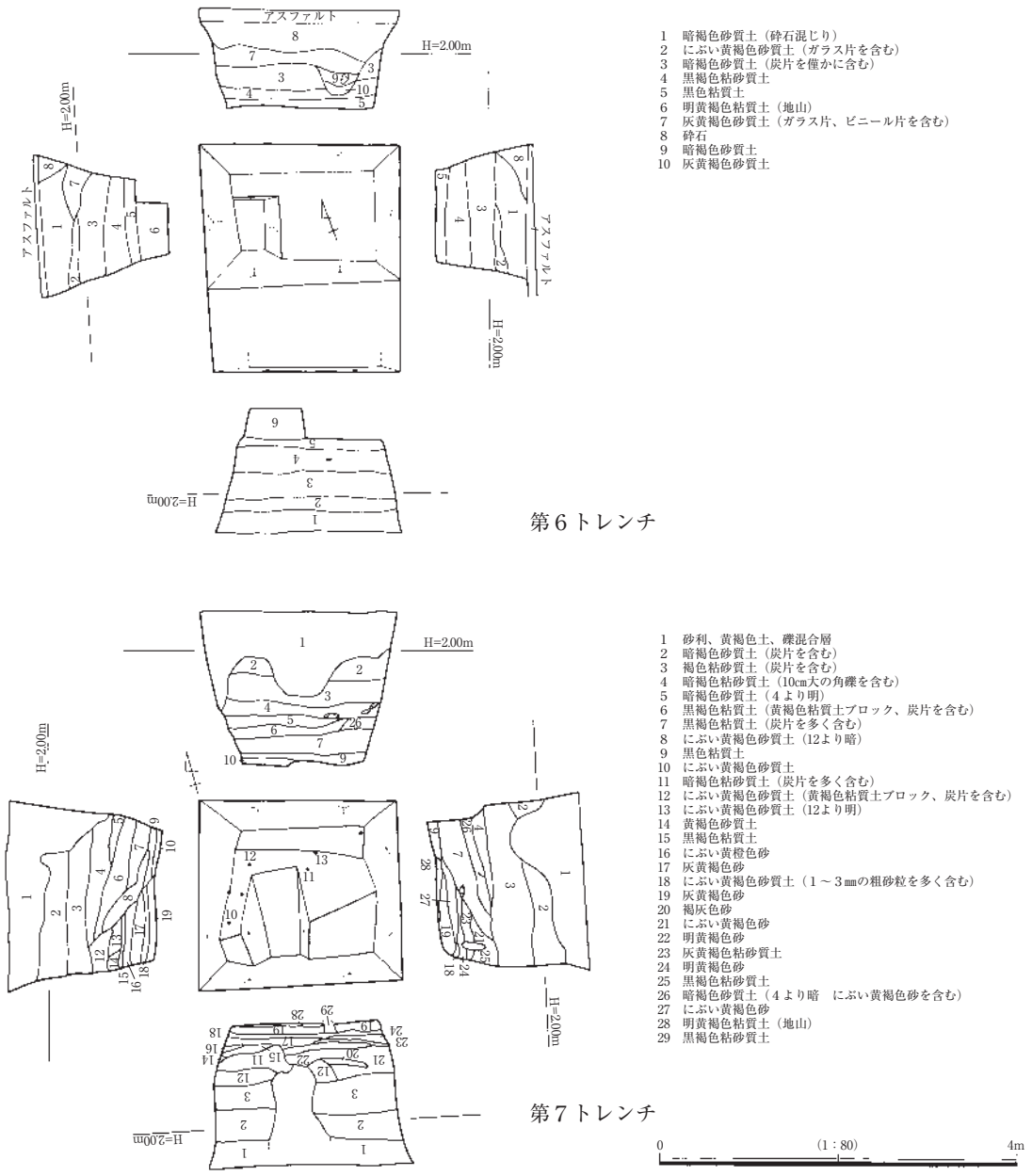
第６トレンチ（Tr－６）〔第32図　図版13・14・23〕

鳥取緑風高校敷地の南西の農園南を流れる川沿い市道のうち南の宇山方向へ上る市道とのＴ字交差点に設定した2.2×2.5mのトレンチである。東45m余りに第５トレンチが、西30mに第７トレンチが所在する。地表舗装面の標高2.52mを測る。地表下1.47mの標高1.05mまで掘り下げを行った。標高2.06m、北側では1.85m付近まで砕石や、耕作土にガラス・ビニール片が混じった客土が行われている。下層の第３層暗褐色砂質土は旧耕作土とみられ、その下層に第４層黒褐色粘砂質土、第５層黒色粘質土はやや締まりがあり褐色土の混じり方から第５トレンチの第８層に対応する可能性がある。標高1.41mで第６層明黄褐色粘質土の地山となる。遺構は検出されなかった。

遺物はコンテナ約1/3箱分が出土している。第３・４層中のものが多く、第３層中に土師器細片や19世紀後半の肥前系の陶磁器細片、地元窯牛ノ戸、第４層中に土師器細片、備前産体部片、18世紀後半～19世紀後半の肥前系染付細片、瀬戸・美濃産火鉢片、第５層で備前産鉢片、瓦質羽釜・鍋片が出土している。

第７トレンチ(Tr－７)〔第32・33図　図版14・23〕

鳥取緑風高校敷地の南西の農園南を流れる川沿い市道のうち南の宇山方向へ上る市道とのＴ字交差点に設定した２×2.2mのトレンチである。東30mに第６トレンチ、東80mに第５トレンチが所在する。舗装アスファルトを除いた地表面の標高2.50mを測る。地表下1.82mの標高0.68mまで掘り下げを行った。砂利および礫、黄褐色土の混合である客土は標高２m前後、部分的には地表から厚さ1.1m、標高1.35m付近まで及ぶ。その下層、第２層暗褐色砂質土、第３層褐色粘砂質土はともに褐色系で炭片を含み、第２層の方がやや締まり強く、第３層はやや赤味を帯びる色調である。その下層、第12・21層上面、標高1.56mで北側へ大きく落ち込む溝状遺構を確認した。検出面から深さ88㎝、標高0.68mのトレンチ北端第28層明黄褐色粘質土の地山面まで掘り下げたが、落ち込みはさらに北側へ続くと推察される。溝状遺構の埋土中には多くの遺物を含む。また、埋土第７層黒褐色粘質土は第５トレンチ第８層に似る。溝状



第32図　天神山遺跡 第６・第７トレンチ実測図

遺構の基盤となる第11～18・21～27層においても層が細かく分かれるものの明らかな遺構は検出されなかったが、遺物が１袋弱出土しており、備前産壺片、瓦質鍋片、７世紀代の須恵器杯身片、須恵器壺甕の体部片、土師器片、弥生土器片、土錘がある。第28層地山直上で古墳時代前期土器片を出土している。

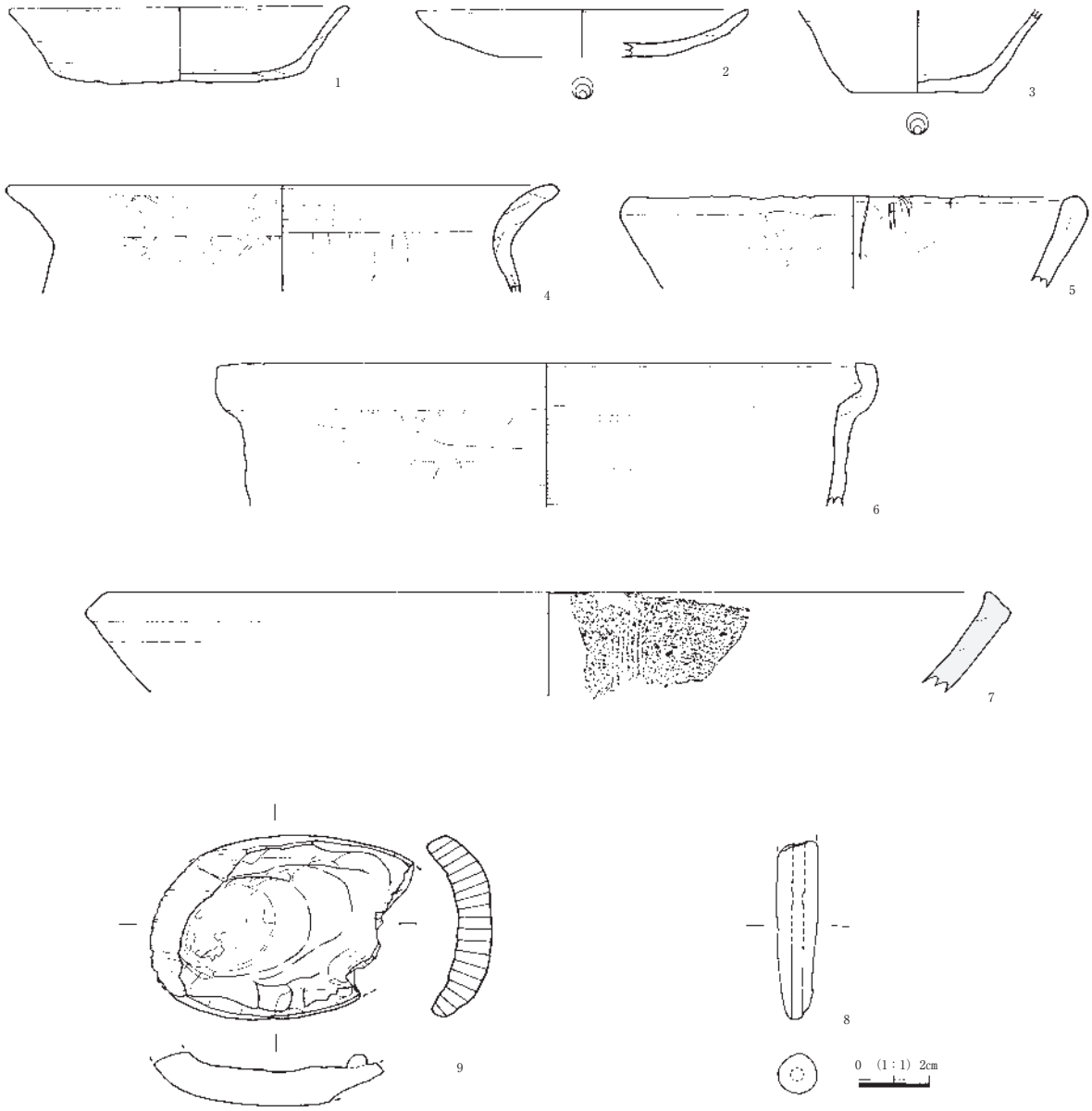
遺物はコンテナ１箱分程度が出土しており、陶磁器、須恵器、瓦質土器、土師器、土錘、古銭「永楽通宝」がある。溝状遺構埋土からの出土が中心で、土師器と須恵器細片も含まれるが第５トレンチほどの出土はなく、京都系土師器皿や備前産擂り鉢・甕体部片などが比較的目立つ。第６層から瀬戸・美濃産の灰釉の端反皿（第33図10）、備前産擂り鉢（ⅣＢ期）、第26層から京都系土師器皿（第33図11）、第７層から京都系土師器皿（第33図13）、第８層から越前甕口縁部（Ⅴ１～Ⅴ２期）、第６～８層で明代景徳鎮窯皿、第９層で京都系土師器皿（第33図12）、第９・10層で瀬戸・美濃産灰釉連弁丸碗、龍泉窯系青磁片などが出土している。溝状遺構の遺物は陶磁器の年代から概ね15世紀後半～16世紀前半におさまる。灰釉の端反皿（第33図10）は口径7.8㎝、器高2.0㎝、釉は灰オリーブ色、削出しの高台に僅かに釉の剥ぎ取りが観察される。京都系土師器皿（第33図11～13）は、口径8.8㎝、11.9㎝、16.1㎝と分かれるが、器高は（12、13）が2.1㎝、(11)は2.25㎝と似通った大きさとなる。全体に肉厚で、口部端部は外方へ屈曲気味となり先端は上外方へ摘み沈線がめぐる。底部はナデ・指おさえが残り、(12)はへそ皿状となる。

小結

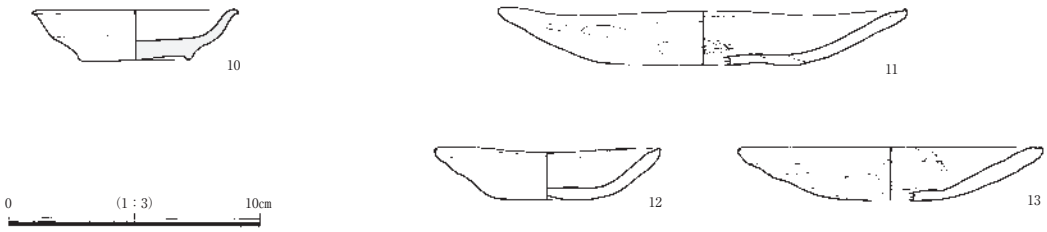
今回の調査は、天神山遺跡の南域境界部、鳥取緑風高校敷地内南西の農園南を流れる川の南沿岸、東西に走る市道にそれぞれ設定した３箇所のトレンチである。調査地付近は標高2.6～2.5mと現在では湖山池のある西側へ向けて僅かに標高を下げる平坦地のように見えるが、南北方向では標高約40mの宇山から北側へ向けて標高を下げ、ちょうど調査地市道付近が裾先端となり、川を挟んで平坦地、天神山へと続く地形となる。天神山地区復元案（『鳥取県中世城館分布調査報告書』2002年）では、この川付近が「するが屋敷」の内堀と推測されている。

調査の結果、第５トレンチ標高1.82m、第７トレンチ1.56mで、北側へ落ち込む溝状遺構を検出した。どちらも地山面を掘り込んでおり、底部へ向け傾斜は緩くなってはいるがさらに北側へ落ち込む様相を示す。確認できた深さは第５トレンチで1.01m、第７トレンチで0.88mを測る。また、地山面は第５トレンチで標高0.82m、第６トレンチで1.41m、第７トレンチで0.90mで検出しており、第６トレンチ付近が小高くなる微地形が存在するものと推察される。第５、７トレンチで本来はまだ南側へ立ち上がる可能性を残すものの、溝状遺構の南側肩部を検出した。第６トレンチでは地山面上層の堆積は北側への傾斜や層の乱れもさほどなく溝状遺構の埋土とは言い難い。よって、仮に第５トレンチと第７トレンチの溝状遺構とが同一のものとすれば直線的でなく第６トレンチ箇所では北側へやや蛇行していたということになろう。復元された「するが屋敷」の内堀とすれば堀は絵図よりさらに長いことにもなる。今回検出した溝状遺構の底部と北側を流れる川の底とは比高差があり同一で続くものとは考え難い部分もあるが、ある程度後世に掘り直しがなされたにせよ、現在の川は堀の名残りを示すものと考えるのが妥当であろう。今回検出した溝状遺構が堀そのものである確証を得るには今後の調査の進展を待たねばならないが、検出層や溝状遺構埋土の遺物の年代が15世紀後半～16世紀前半であることなどから当該期の遺構であることは確実である。

また、上層での厚い旧耕作土、黒色粘砂質土などの遺物包含層の検出状況から、場所によっては当時の遺構面が良好な状態で遺存していると思われる。いずれにせよ、天神山城跡を含めた天神山遺跡の解明には、堀の性格を知る上でも堀外の状況の確認は必要であり、天神山遺跡の南側周辺の開発についても十分に注意を払っていく必要がある。また、今回、溝状遺構の基盤となる層や地山直上で土坑状の遺構を検出しており、天神山城より先行する時期や古墳時代前期、弥生時代を含めた下層の遺構についても十分留意しなければならない。



第５トレンチ



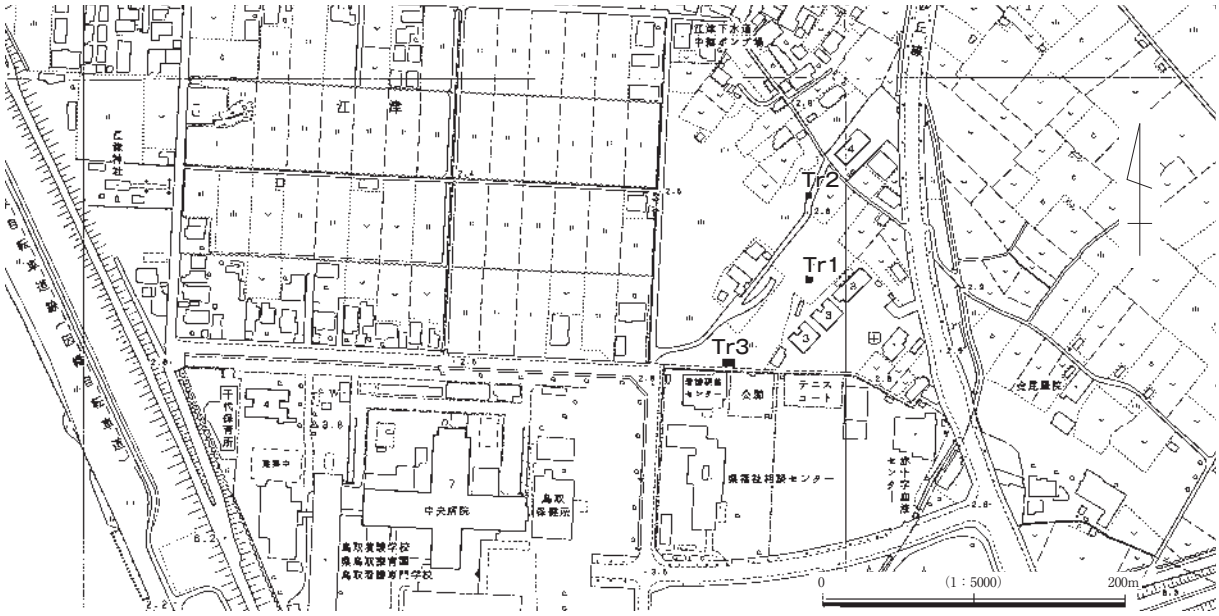
第７トレンチ

第33図　天神山遺跡 第５・第７トレンチ出土遺物実測図

第11節　秋里遺跡

秋里遺跡は、鳥取市秋里、江津地内に所在し、旧千代川左岸に形成された標高3.5m前後の自然堤防上に立地している。遺跡は昭和49年の河川改修および国道９号バイパス建設工事中に発見され、発掘調査によって大量の土師器とともに船、鳥、馬などを模した土製品などが出土したころから古墳時代前期～中期の祭祀遺跡であることが明らかになった。また、その後行われた数次の発掘調査によって弥生時代～中世の複合遺跡であることが明らかになってきている。遺跡の範囲は東西500m、南北800mあまりにおよぶ。周辺には、開地谷古墳群、浜坂横穴群などの古墳群や、縄文～古墳時代の遺物散布地である追後遺跡などが立地している。

今回の調査は区画整備事業に伴って実施したもので、道路整備地内３箇所にトレンチ（第１～３トレンチ）を設定し試掘調査を行った。調査地は旧袋川左岸に位置し、県立中央病院の北東110～180m地点である。



第34図　秋里遺跡 調査トレンチ位置図

第１トレンチ(Tr-１)〔第35図　図版15〕

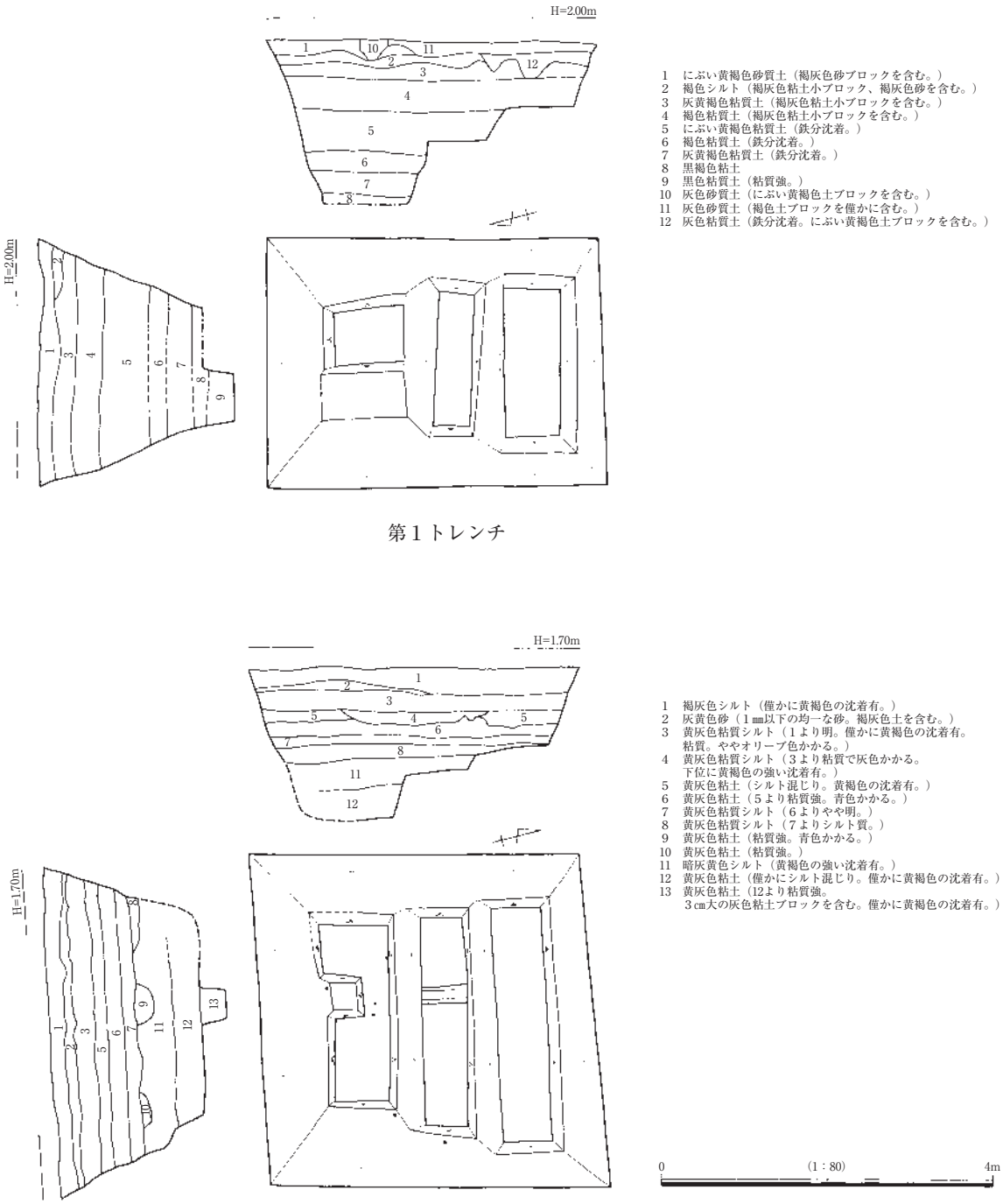
3.0×4.0mのトレンチで、標高-0.6mまで掘り下げを行った。全体に整然とした堆積状況が見られる。第１層は出土した陶器片から近・現代の堆積とみられる。第３層には遺物は認められず、下層の第４・５層に遺物が含まれ、４層から土鍋片と思われる瓦質土器片、５層からは須恵器、土師器片が出土した。５層出土の須恵器には底部糸切りの杯が含まれている。第４・５層が奈良時代～中世の遺物包含層と考えられる。

第５層下位の第６・７層から出土遺物はなく、標高０m以下で認められる黒褐色粘土（第８層）、黒褐色粘質土（第９層）から弥生土器とみられる破片が出土した。８・９層が弥生時代の遺物包含層になる可能性が考えられる。遺構は検出されなかった。

第２トレンチ(Tr-２)〔第35図　図版15〕

第１トレンチの北側約50mに設定した4.0×4.0mのトレンチである。第１～３層は無遺物層で、遺物包含層は標高０～１mに堆積する第５、６、７、11層である。遺物の出土量は僅かで、細片ではあるが、５層から土師器、６層から須恵器、瓦質の土鍋、７、11層から土師器が検出された。11層から出土した土師器には古墳時代前期に比定される甕の口縁部が含まれている。

遺構は第11層の上面から溝（第９層）が検出された。溝は幅50㎝前後、深さ23㎝あまりを測り、主軸をほぼ南北にとる。時期は上下層の包含遺物から推定して古墳時代の可能性が考えられる。



第１トレンチ

第２トレンチ

第35図　秋里遺跡 第１・第２トレンチ実測図

第３トレンチ(Tr－３)〔第36・37図　図版15・16・23〕

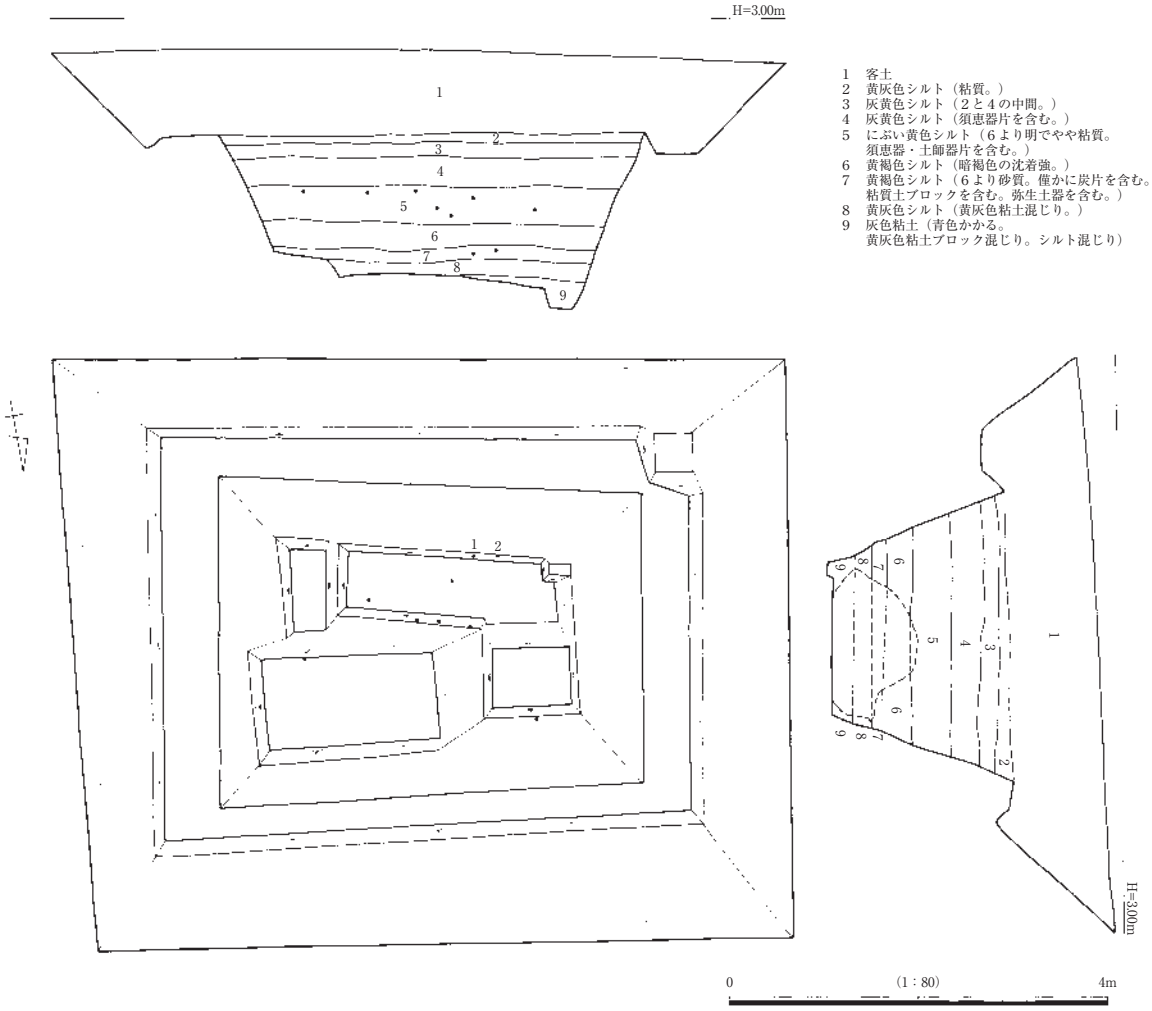
第１トレンチの南西約70mに位置する。客土部分の6.1×7.5m、厚さ1.0m前後は重機掘削を行い、その後3.2×4.5mのトレンチを設定した。客土下層の第２、３層と標高0.5m以下に堆積する第８、９層は無遺物層である。遺物は第４～７層に含まれ、４層と５層から須恵器、土師器の破片が僅かに出土した。須恵器片の中には８世紀後半代の所産とみられる高台を持つ杯や蓋が含まれており、奈良時代の遺物包

含層の可能性が考えられる。また、下層の６層から古墳時代前期の土師器片、７層からは弥生時代後期の甕（第37図１）、器台(2)が出土した。６、７層が弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層になるものと推測される。

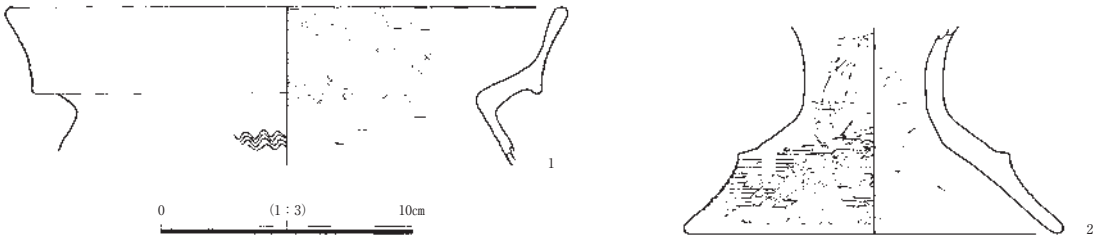
(1)は約1/8残存、口径21.8cmを測る。口縁部外面に平行沈線を施し、内面はヘラミガキ。頸部は外面に波状文を施し、内面はヘラケズリである。(2)は鼓形器台の脚台部で1/4残存する。外面は、台部に12条以上の平行沈線を施し、後ヘラミガキ。内面は、頸部上半にヘラケズリ以下ナデ、台部はヘラケズリ後ナデ調整を行う。弥生時代後期後半代の所産と思われる。遺構は検出されなかった。

小結

調査対象地は秋里遺跡の北西端にあたる。調査の結果、第２トレンチから古墳時代の可能性が考えられる溝遺構と遺物包含層が検出され遺跡が存在することが明らかになった。また、第１、３トレンチからは明確な遺構は検出されなかったが、第１トレンチから奈良時代～中世、弥生時代、第３トレンチから奈良時代、古墳時代、弥生時代の遺物が出土した。量的には僅かではあるが、標高-0.5mから1.5mあたりの堆積層に弥生時代～中世の遺物包含層が存在するものと思われる。秋里遺跡の範囲が北側に広がっていく可能性もあり注意が必要である。



第36図　秋里遺跡 第３トレンチ実測図



第37図　秋里遺跡 第３トレンチ出土遺物実測図

第12節　橋本所在遺跡

調査対象地内ではこれまで発掘調査が実施されたことがなく、隣接の古郡家遺跡や大路川遺跡が知られるのみである。今回の調査は県道国安桂木線道路改良工事（鳥取市橋本～古郡家）計画に伴うもので、その予定地である水田と畑地に５箇所のトレンチを設定し調査を行った。調査後は直ちに埋め戻しを行った。

周辺地形をみると、調査地の南約400m付近までは中国山地から北に延びる丘陵が延伸し、その裾に橋本集落が形成されるとともにその前面に広大な鳥取平野が展開する。対象地はその西・東にそれぞれ山白川および大路川が北流し、圃場整備がなされた現状でも第２トレンチ付近を高所として、西・東の第１・第３トレンチ方向へそれぞれ若干下る微地形が観察される。このことから対象地周辺は、古くは丘陵と河川による舌状の微高地とその縁辺地形であったものと想定された。

第38図　橋本所在遺跡 調査トレンチ位置図

第１トレンチ(Tr－１)〔第39 図　図版16〕

山白川の東約95mの計画地内に設定した3.0×7.0mのトレンチである。現状は畑作地として利用されており、地表面標高は8.8m程度である。現地表面下20㎝程度が現耕作土（第１、２層）で、その下位に旧耕作土と思われる褐灰色粘質土（第３層）が堆積する。この下面付近で５～８㎝大の河原石を詰め込んだ北西～南東方向の暗渠を検出した（標高8.4m付近)。その下位は順層が続き、標高８m付近までは酸化鉄分とみられる黄褐色系の無機質分を多く含むやや灰色度の強い灰黄褐色あるいは黄灰色系の粘土層（第９、11層）で、さらに下位の標高7.6m付近までは暗灰黄色、灰黄褐色系の黄褐色無機質分を密に含んで全体的に黄色く見える粘土層（第12～15層）が、そして標高6.6m付近までは灰色粘土層（第16、17、19～22層）が堆積する。

遺物や明瞭な遺構は検出されなかったが、断面観察等では、第12層（標高8.0m付近）や第15層（標高7.7m付近）には下位層の土壌ブロックが多く含まれており、水田遺構の可能性は考えられる。

第２トレンチ(Tr－２)〔第39 図　図版16〕

第１トレンチの東約130mの畑作地内に設定した3.0×7.0mのトレンチで、地表面標高は8.8m前後である。層序は基本的に第１トレンチと類似し、標高8.5m付近までは現耕作土並びに旧耕作土（第３層）で、その下面から５～８㎝大の河原石を詰め込んだ西南西～東北東方向の暗渠と南北方向の水路状遺構(SD-01）を検出した。その下の標高8.1m付近までは黄褐色系の無機質分を多く含む暗灰黄色粘土層（第10、11層)、7.5m付近までが黄褐色無機質分を密に含んで全体的に黄色く見える粘土層（第12～19層)、そして6.6m付近までの灰色粘土層（第20～24層）と続く。

遺構は上述の暗渠とSD-01を検出したのみで、SD-01は最大検出幅1.58m、深さ0.28mを測り平面的に二段掘り状を呈するが、断面観察から、掘り直しの可能性も考えられる。底面付近から見込みに釉剥ぎ痕の磁器片や在地の可能性も考えられる陶器片等が検出されており、近世・近代以降の時期が考えられる。

遺物包含層は第20～23層の灰色粘土層で、土師器片が出土したほか、数本の直径３～５㎝程度の立木が検出された。また第１トレンチと同様に、標高7.8m付近の第15層や第18層にはその下位層に堆積する灰色粘土のブロックが多く含まれおり、耕作に伴う撹拌によって混入した可能性が考えられることから、水田遺構の可能性も推測される。

第３トレンチ(Tr－３)〔第40図　図版17〕

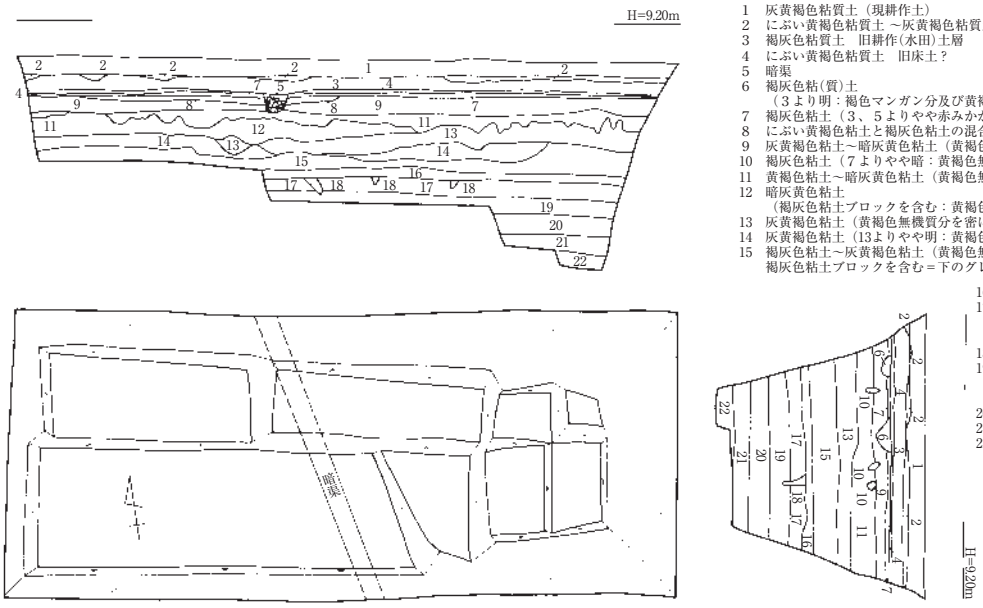
第２トレンチの東約150mの畑作地内に設定した3.0×7.0mのトレンチで、地表面標高は8.7m程度である。層序は基本的に第１、第２トレンチと同様に標高8.5m付近までは現耕作土並びに旧耕作土とみられる褐灰色粘質土（第３層）で、その下面付近で、南北方向の塩ビ管使用暗渠とみられる溝状遺構を検出した。その下8.2m付近までは黄褐色系の無機質分を多く含む暗灰黄色粘土層（第10層)、7.7m付近までが黄褐色無機質分を密に含んで全体的に黄色く見える粘土層（第13～16、20～22層)、そして6.8m付近までの灰色粘土層（第23～27層）と続く。

遺物は、現耕作土下付近から陶器（擂り鉢）片１、須恵器片１が検出されたほか、第10層から土師器片３点が出土した。また第１、第２トレンチと同様に標高7.7m付近の第22層には、その下位層の灰色粘土ブロックが混入することから、水田遺構が存在した可能性は考えられる。

第４トレンチ(Tr－４)〔第40図　図版17〕

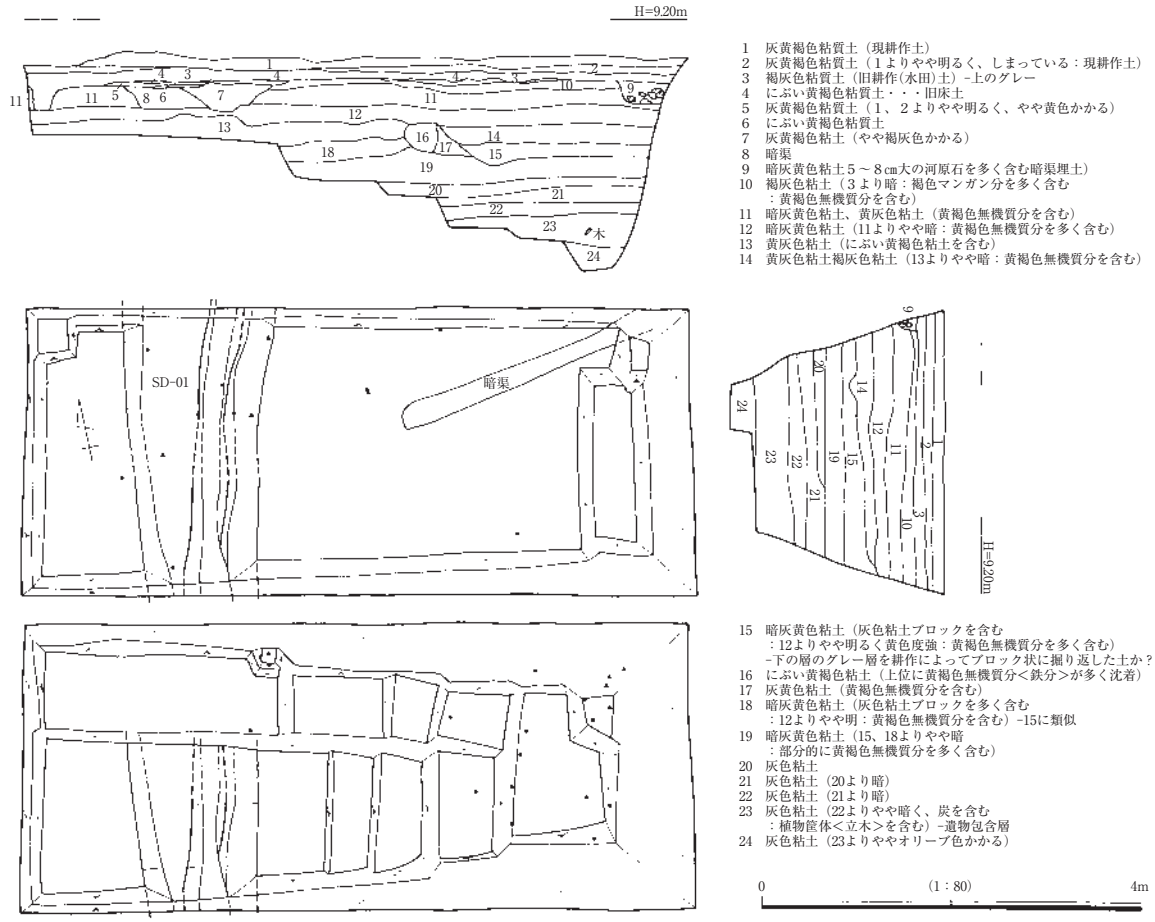
第３トレンチの東155mの水田に設定した2.5×6.0mのトレンチで、現地表面の標高は8.30mを測る。にぶい黄褐色粘質土（第３層）から掘り込まれる暗渠（第15・６・７層）から陶磁器片２点、土師器片１点、土錘１点が出土している。第３層以下は安定した堆積をしており、標高7.6m以下は灰色粘土層が続く。

遺構は検出されなかった。



1　灰黄褐色粘質土（現耕作土）
2　にぶい黄褐色粘質土 ～灰黄褐色粘質土（１より明：現耕作土）
3　褐灰色粘質土　旧耕作(水田)土層
4　にぶい黄褐色粘質土　旧床土？
5　暗渠
6　褐灰色粘(質)土
　（３より明：褐色マンガン分及び黄褐色無機質分を含む）
7　褐灰色粘土（３、５よりやや赤みかかる：褐色マンガン分を多く含む）
8　にぶい黄褐色粘土と褐灰色粘土の混合
9　灰黄褐色粘土～暗灰黄色粘土（黄褐色無機質分を多く含む）
10　褐灰色粘土（７よりやや暗：黄褐色無機質分を多く含む）
11　黄褐色粘土～暗灰黄色粘土（黄褐色無機質分を多く含む）
12　暗灰黄色粘土
　（褐灰色粘土ブロックを含む：黄褐色無機質分を密に含む）
13　灰黄褐色粘土（黄褐色無機質分を密に含む）
14　灰黄褐色粘土（13よりやや明：黄褐色無機質分を含むが13より粗）
15　褐灰色粘土～灰黄褐色粘土（黄褐色無機質分を多く含む）
　褐灰色粘土ブロックを含む＝下のグレー土層の耕作撹乱ブロックか？
16　灰色粘土－Tr３の第23層対応
17　灰色粘土（16より暗くやや暗オリーブ色かかる）－Tr３の第24層対応
18　にぶい黄褐色粘土
19　灰色粘土（16より暗いが17ほど暗オリーブかからない：未分解植物遺体を含む）
20　灰色粘土（19よりやや暗）
21　灰色粘土（20よりやや暗）
22　灰色粘土
　（21よりやや暗く：炭を含む）

第１トレンチ

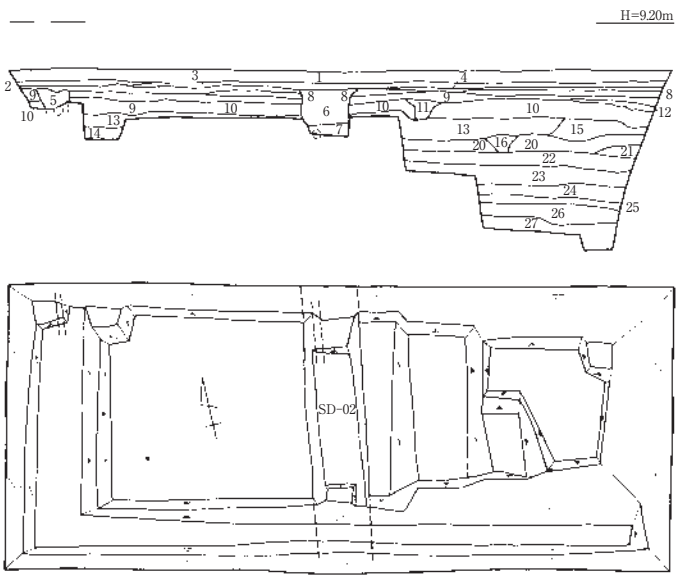


1　灰黄褐色粘質土（現耕作土）
2　灰黄褐色粘質土（１よりやや明るく、しまっている：現耕作土）
3　褐灰色粘質土（旧耕作(水田)土）－上のグレー
4　にぶい黄褐色粘質土・・・旧床土
5　灰黄褐色粘質土（１、２よりやや明るく、やや黄色かかる）
6　にぶい黄褐色粘質土
7　灰黄褐色粘土（やや褐灰色かかる）
8　暗渠
9　暗灰黄色粘土５～８㎝大の河原石を多く含む暗渠埋土）
10　褐灰色粘土（３より暗：褐色マンガン分を多く含む
　：黄褐色無機質分を含む）
11　暗灰黄色粘土、黄灰色粘土（黄褐色無機質分を含む）
12　暗灰黄色粘土（11よりやや暗：黄褐色無機質分を多く含む）
13　黄灰色粘土（にぶい黄褐色粘土を含む）
14　黄灰色粘土褐灰色粘土（13よりやや暗：黄褐色無機質分を含む）
15　暗灰黄色粘土（灰色粘土ブロックを含む
　：12よりやや明るく黄色度強：黄褐色無機質分を多く含む）
　－下の層のグレー層を耕作によってブロック状に掘り返した土か？
16　にぶい黄褐色粘土（上位に黄褐色無機質分<鉄分>が多く沈着）
17　灰黄色粘土（黄褐色無機質分を含む）
18　暗灰黄色粘土（灰色粘土ブロックを多く含む
　：12よりやや明：黄褐色無機質分を含む）－15に類似
19　暗灰黄色粘土（15、18よりやや暗
　：部分的に黄褐色無機質分を多く含む）
20　灰色粘土
21　灰色粘土（20より暗）
22　灰色粘土（21より暗）
23　灰色粘土（22よりやや暗く、炭を含む
　：植物筐体<立木>を含む）－遺物包含層
24　灰色粘土（23よりややオリーブ色かかる）

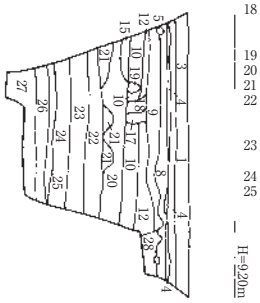
0　(1：80)　4m

第２トレンチ

第39図　橋本所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図

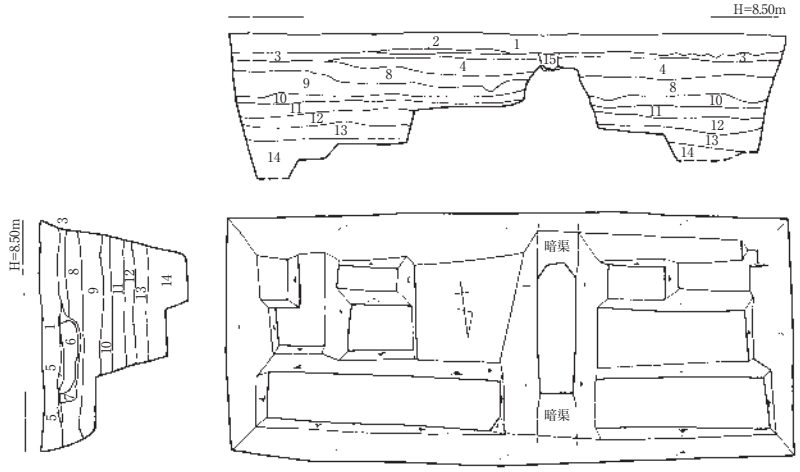


1　灰黄褐色粘質土（現耕作土）
2　灰黄褐色粘質土（１より明：現耕作土）
3　褐灰色粘質土
4　褐灰色粘質土（にぶい黄褐色土ブロックを含む）
5　にぶい黄褐色粘土と褐灰色粘質土の混合（マンガン分含む：暗渠埋土）
6　褐灰色粘土とにぶい黄褐色粘質土の混合（マンガン分含む：暗渠埋土）
7　にぶい黄橙色粗砂（４～５㎝大の砕石含む：暗渠埋土）
8　にぶい黄褐色粘質土～灰黄褐色粘質土
9　褐灰色粘土（４より暗：マンガン分沈着）
10　暗灰黄色粘土（黄褐色無機質分を多く含む）
11　黄灰色粘土（黄褐色無機質分、マンガン分を多く含む）
12　暗灰黄色粘土（10よりやや明：黄褐色無機質分を含む）
13　暗灰黄色粘土（10よりやや明：黄褐色無機質分を含む）
14　褐灰色粘土（褐色無機質分を含む）
15　黄灰色粘土（無機質分を含む）
16　にぶい黄褐色粘土
17　暗灰黄色粘土（12、10より暗：炭及び黄褐色無機質分を含む）



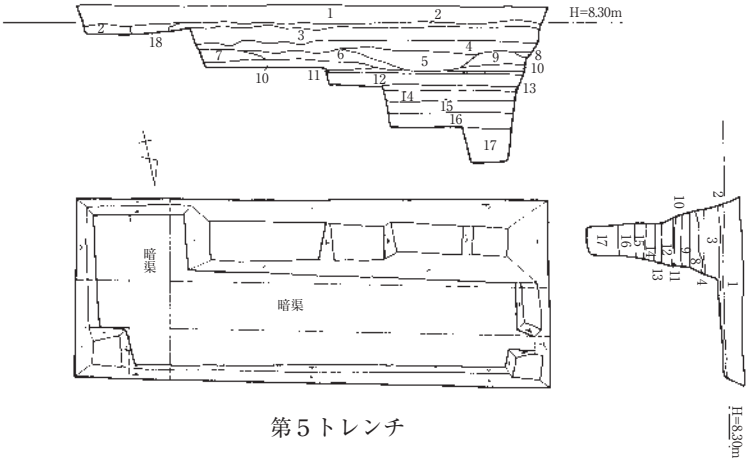
18　暗灰黄色粘土（12、10よりやや暗く、17よりやや明：炭及び黄褐色無機質分を含む）
19　黄灰色粘土（黄褐色無機質分を含む）
20　黄灰色粘土（黄褐色無機質分を含む）
21　黄灰色粘土（20より暗）
22　黄灰色粘土～灰黄色粘土（21よりやや明るく：黄色度強：無機質分点在）
23　灰色粘土（灰黄色粘土及び無機質分を含む）
24　灰色粘土（無機質分を含む）
25　灰色粘土（24よりややオリーブ色かかる）
26　灰色粘土（24、25よりやや暗：炭を含む）
27　灰色粘土（26よりやや暗）
28　褐灰色粘土（にぶい黄褐色土、マンガン分、黄褐色無機質分を含む）

第３トレンチ



1　灰黄褐色粘質土（現耕作土）
2　灰黄褐色粘質土
3　にぶい黄褐色粘質土
4　にぶい黄褐色粘質土（３より明）
5　灰黄褐色粘質土（暗灰黄色土ブロック混じる）
6　灰黄色土（砂質）
7　暗灰黄色粘質土
8　暗灰黄色粘質土（マンガン分沈着）
9　暗灰黄色粘質土（８よりマンガン分多く沈着）
10　灰黄褐色粘土
11　灰色粘土
12　灰色粘土（マンガン分沈着、炭を含む）
13　灰色粘土（12より明）
14　灰色粘土（13よりやや暗）
15　褐灰色粘土とにぶい黄褐色粘質土（暗渠埋土）

第４トレンチ



1　褐灰色粘土（現耕作土）
2　にぶい黄褐色粘質土
3　灰黄褐色粘質土（３～５㎜大の暗褐色・灰色礫混じり）
4　褐灰色砂質土（２～３㎜の礫を含む）
5　褐灰色粗砂（３～10㎜の礫多い）
6　褐灰色砂
7　にぶい黄褐色粘質土（砂質、暗褐色粘質土ブロックを含む）
8　褐灰色砂質土（10㎜前後の礫を含む）
9　褐灰色砂質土（８より明、暗褐色粘質土ブロックを含む）
10　にぶい黄褐色砂質土
11　灰黄色粘土
12　灰色粘土
13　灰色粘土（炭混じり）
14　灰色粘土（12より暗）
15　灰色粘土（ややオリーブ色かかる）
16　灰色粘土（13より暗）
17　暗灰色粘土（未分解植物遺体を含む）
18　暗渠

第５トレンチ

0　(1：80)　4m

第40図　橋本所在遺跡 第３・第４・第５トレンチ実測図

第５トレンチ(Tr－５)〔第40図　図版17〕

第４トレンチの東160mの水田に設定した2.0×5.0mのトレンチで、現地表面の標高は8.45mを測る。にぶい黄褐色粘質土から掘り込まれる暗渠がトレンチ内の縦横に認められ、一部分を深掘りすることで下層の確認となった。第４層下で砂質土の堆積がみられたが、明確な遺構は検出されなかった。標高7.80m前後の灰黄色粘土（第11層）から、灰色粘土層（第12～16）が続き暗灰色粘土（第17層）には未分解植物遺体が含まれる。

遺物は第３・５層から土師器細片が僅かに出土した。

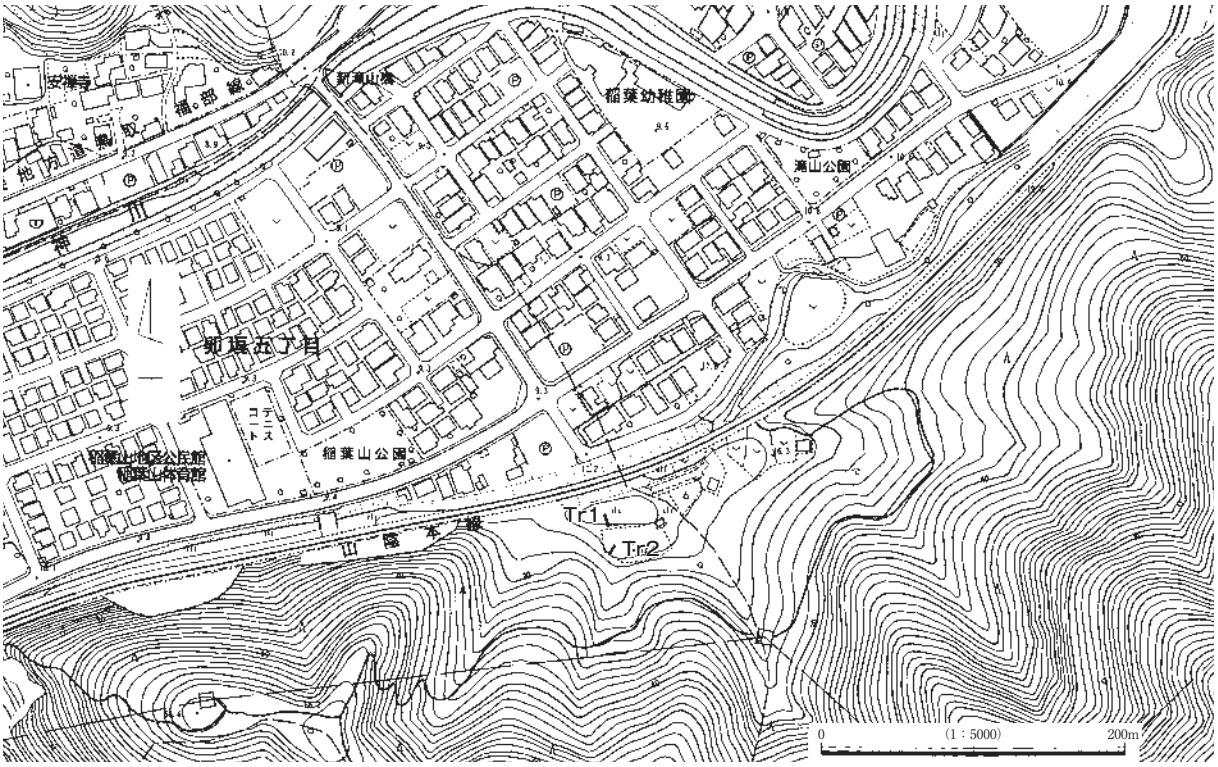
小結

今回の調査地は、丘陵縁辺の舌状微高地にあたるとみられ、集落跡の存在の可能性を考慮しながら調査を実施した。その結果、現耕作土及びほ場整備前の旧耕作土下付近から水路や暗渠を検出したほかに明瞭な遺構は検出されなかった。しかしながら、標高7.8～7.8m付近の灰色粘土層の直上層付近では、下位粘土層由来の可能性も考えられる粘土ブロックが認められ、密度は低いものの灰色粘土層中に遺物包含層が認められる。畦畔等の明瞭な遺構は検出していないものの、水田遺構の存在やその他の遺構が存在する可能性も依然残り、開発事業の際には慎重を要する。

第13節　卯垣所在遺跡

鳥取市卯垣地区の南東に位置し、JR山陰本線の南側丘陵山麓に立地している。遺跡が所在する同一丘陵上には数多くの古墳が築かれており、西側丘陵に首山古墳群（22基）、東側には宇倍野山古墳群（66基）や弥生墳丘墓が検出された滝山猿懸平墳墓群などが展開している。また、卯垣、滝山地区の北側に位置する丘陵には卯垣古墳群（６基）、滝山古墳群（７基）、滝山第１、第２遺跡などが所在しており、一帯は多くの遺跡が立地する地域となっている。

今回の調査は道路整備に伴って実施したものである。調査地の現況は畑地や原野となっておりそれぞれ１箇所にトレンチを設定して調査を行った。



第41図　卯垣所在遺跡 調査トレンチ位置図

第１トレンチ(Tr－１)〔第42・43図　図版17・18・23〕

標高13m前後の畑地に設定した1.5×9.1mのトレンチである。厚さ10～20cmの耕作土下には黄褐色土や黒褐色土をブロック状に含む暗褐色砂質土（第４層）が堆積しており、その上面から現代の暗渠埋設溝（第３層）や穴（第２、11層）が掘り込まれている。第４層には須恵器片、瓦質の羽釜片、底部糸切りの土師器皿や製塩土器とみられる破片など時期差のある遺物が含まれており、畑造成に伴う客土の可能性が考えられる。第４層の下位に堆積する褐色粘質土（第５層)、暗褐色粘質土（第６層）はトレンチ全体で認められる。両層とも比較的安定した堆積状況を示すが、地山土とみられる黄褐色土のブロックや炭片が含まれることから２次堆積層と考えられる。この第５層上面からは浅い土坑状の掘り込み（第12、13層）が確認され、12層埋土から底部糸切りの土師器皿が出土している。地表下80～90cmで見られる第８層の黄褐色粘質土が地山とみられ、地山上層の第７層には須恵器片、土師器片が含まれている。

遺構は、第５層上面から土坑状遺構（埋土第12、13層）２、第６、７層から直径25～40cm、深さ20cm前後のピット３（P-01～03）が検出された。出土遺物から土坑は中世、ピットは奈良から平安時代の遺構の可能性が考えられる。

遺物は、土坑埋土の第12層から底部糸切りの土師器皿片、第４層から土師器甕（第43図３)、製塩土器とみられる(4)、瓦質羽釜(5)のほか須恵器片、土師器片が、第５層から土師器皿(１、２)と須恵器片、土師器片、第７層から須恵器、土師器の破片が出土した。遺物の出土量は多く５袋分を数える。

(1)は口縁部1/5残存する。口径24cmあまりを測る大型の皿で、内面に回転成形による凹線が残る。緻密な胎土で淡褐色を呈する。(2)は底部糸切りの土師器皿である。口径6.7cm、底径4.2cm、器高1.9cmを測る。体部内外面ヨコナデ。(3)は甕口縁部で1/10残存し、復元口径は10.1cmである。内面は横斜位のハケ目、外面はナデのち縦方向に６条単位のハケ目調整を施す。(4)は口縁部1/16残存し、復元口径15cmあまりを測る。外傾気味に立ち上がり、外面は指成形のちナデ調整、内面は剥落不明。器壁が厚く、口縁部の形態から製塩土器の可能性が考えられる。(5)は瓦質の羽釜である。口縁部約1/26残存し、復元口径20.8cmを測る。内外面ナデ、外面に成形時の指頭圧痕跡が残る。

第２トレンチ(Tr－２)〔第42・43図　図版18〕

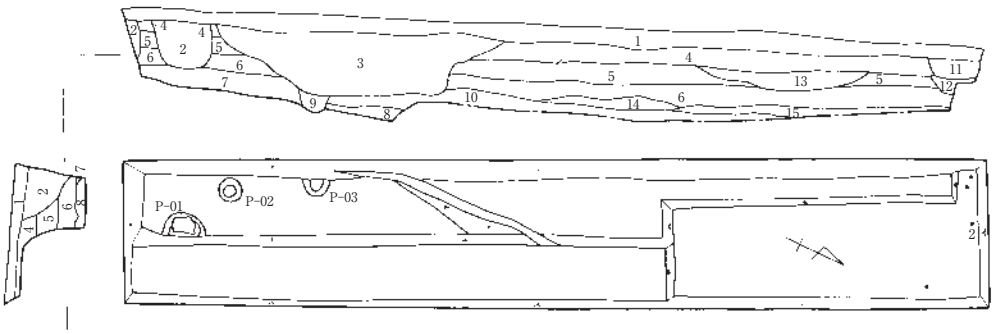
第１トレンチの南約16mに位置し、谷部に開けた標高15m前後の平坦部に設定した1.0×7.7mのトレンチである。厚さ10～20cmの表土下に堆積する第２～４層、11層、12層中には地山土と見られる明黄褐色土や１～４cm大の礫が多く含まれることから流入堆積土と見られ、その下位に堆積する黒褐色粘質土（第６層）が一時期の表土層と考えられる。第６層以下は丘陵の斜面傾斜に沿った堆積層（第７、13、14層）が見られ、その中の第７、13層が遺物包含層である。地山は表下約1.3mで認められるにぶい黄褐色粘質土（第15層）と思われる。遺構は検出されなかった。

遺物は、表土、第７層、第13層から出土した。７層遺物には、土師器皿のほか多数の須恵器片、土師器片が含まれている。また、13層からは須恵器、土師器の破片、鉄釘１が出土し、須恵器の中には高台を持つ杯の細片が含まれている。第７層は中世、第13層が奈良時代の遺物包含層と推測される。

（第43図６）は表土から出土した蓋杯である。(6)は蓋で約1/16残存し復元口径11.9cmを測る。稜を持ち口縁部に内傾する明瞭な段を有する。天井部3/4ヘラ削り。(7)は黒褐色粘質土（第６層）の上位層からの出土遺物で、底部糸切りの土師器皿である。底径5.3cmを測る。

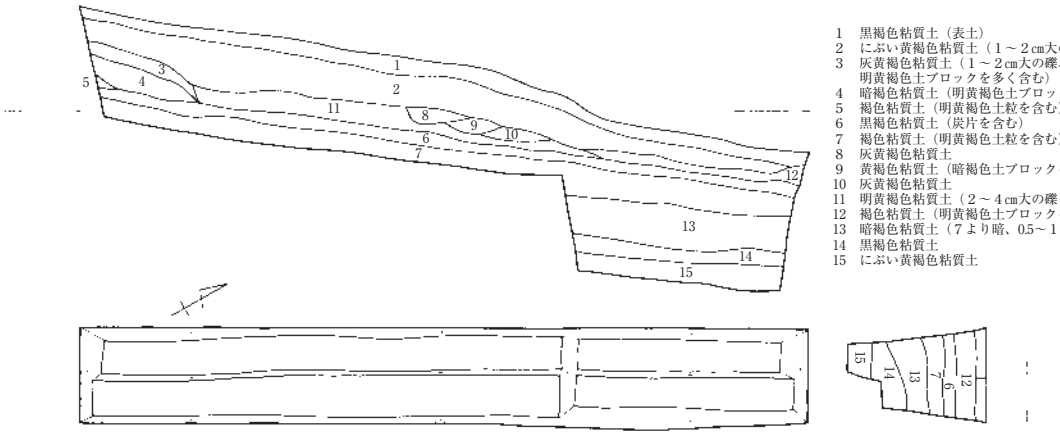
小結

調査の結果、第２トレンチからは明確な遺構は確認されなかったが、第１トレンチから土坑状遺構２、ピット３を検出した。遺物の出土量は両トレンチともに多く、遺物包含層として第１トレンチから３層、第２トレンチから２層を確認することができた。時期的には奈良時代～中世の包含層とみられ、同時期の遺跡が存在するものと考えられる。



1　暗褐色砂質土（耕作土）
2　暗褐色砂質土（１～３㎝大の礫、黄褐色土、黒褐色土ブロックを含む）
3　暗褐色砂質土（１～３㎝大の礫、黄褐色土、黒褐色土ブロックを含む　暗渠坑）
4　暗褐色砂質土（２、３より明、黄褐色土、黒褐色土ブロックを含む）
5　褐色粘質土（黄褐色土、黒褐色土ブロックを含む）
6　暗褐色粘質土（炭片、黄褐色土ブロックを含む）
7　にぶい黄褐色粘質土
8　黄褐色粘質土（地山）
9　暗褐色粘質土（炭片、黄褐色土ブロックを含む　P-03埋土）
10　黒褐色粘質土（炭片を含む）
11　暗褐色砂質土（４より明、0.5～１㎝大の礫を含む）
12　黄褐色粘質土（土器片、暗褐色土ブロックを含む）
13　にぶい黄褐色砂質土（１～２㎝大の礫を多く含む）
14　暗褐色砂質土（５～10㎝大の角礫点在、１～３㎝大の礫を多く含む）
15　褐色粘質土（炭片、黄褐色土ブロックを含む）

第１トレンチ

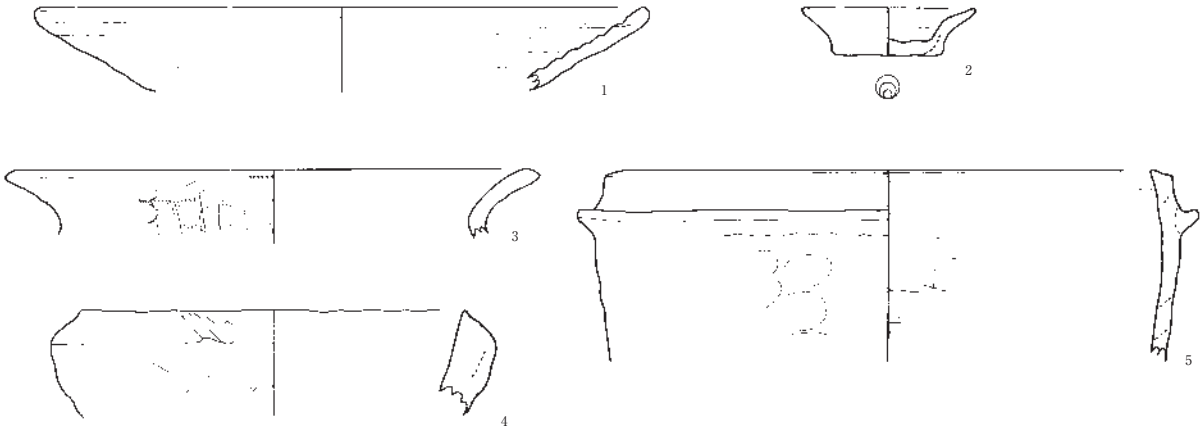


1　黒褐色粘質土（表土）
2　にぶい黄褐色粘質土（１～２㎝大の礫を多く含む）
3　灰黄褐色粘質土（１～２㎝大の礫、明黄褐色土ブロックを多く含む）
4　暗褐色粘質土（明黄褐色土ブロックを含む）
5　褐色粘質土（明黄褐色土粒を含む）
6　黒褐色粘質土（炭片を含む）
7　褐色粘質土（明黄褐色土粒を含む）
8　灰黄褐色粘質土
9　黄褐色粘質土（暗褐色土ブロックを含む）
10　灰黄褐色粘質土
11　明黄褐色粘質土（２～４㎝大の礫を多く含む）
12　褐色粘質土（明黄褐色土ブロックを含む）
13　暗褐色粘質土（７より暗、0.5～１㎝大の礫を含む）
14　黒褐色粘質土
15　にぶい黄褐色粘質土

第２トレンチ

0　(1：80)　4m

第42図　卯垣所在遺跡 第１・第２トレンチ実測図



第１トレンチ

0　(1：3)　10cm

第２トレンチ

第43図　卯垣所在遺跡 第１・第２トレンチ出土遺物実測図

第14節　用瀬安蔵所在遺跡

用瀬町岡集落の北に位置し、安蔵川右岸の段丘上に立地している。調査地の南側には丘陵が迫り、丘陵の尾根上（標高250m）に中世城郭跡の荒山城（安蔵城跡）が築かれていることが知られているが、安蔵川流域における遺跡の存在について今までのところ明らかとなっていない。

今回の調査は携帯電話基地局の整備計画に伴い実施したもので、事業計画地内１箇所にトレンチを設定し調査を行った。

第１トレンチ（Tr－１）〔第45図　図版18〕

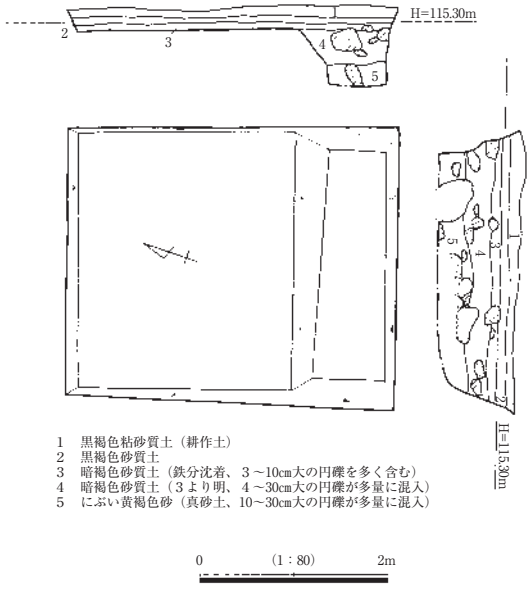
3.0m×3.5mのトレンチである。現況は畑地として耕作されており、厚さ10～15cmあまりの耕作土が確認される。耕作土の下層は礫を多く含む砂質土の堆積が見られ、表土下50cm以下は真砂土と大型の礫との混合層（第５層）が続く。

遺構、遺物は検出されなかった。

小結

調査の結果、遺跡の存在は確認できなかったが、調査地の北東側に当たる安蔵川下流域に開ける平野部縁辺には微高地状の地形が展開しており、遺跡の立地には好条件を備えている。今後の開発事業等に際しては注意を要する地域といえる。

第44図　用瀬安蔵所在遺跡 調査トレンチ位置図



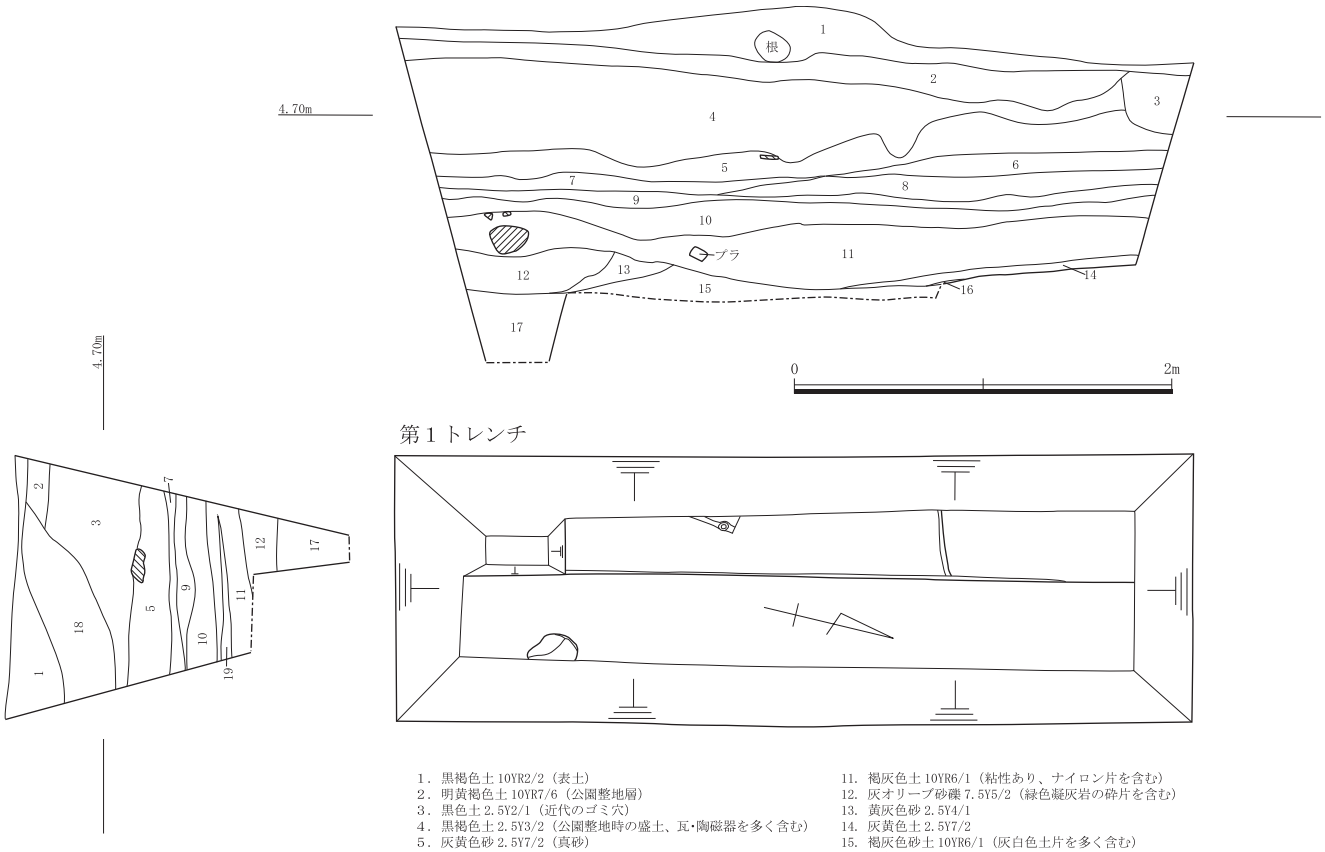
第45図　用瀬安蔵所在遺跡 第１トレンチ実測図

第15節　鳥取城下町関連遺跡

史跡鳥取城跡の南側、県庁北側緑地に位置する。駐車場化計画に伴う試掘調査であり、2009年度に第１～３トレンチ、2010年度に第４トレンチの計４本のトレンチを設定した。調査年度は異なるものの、同一地内にあり、原因も同じであるためここではまとめて報告する。調査区は鳥取城内堀に隣接する場所にあり、江戸時代には城下町の屋敷地であった。関ヶ原の戦い後の慶長６年（1601）徳川方の武将であった池田長吉が6万石で入城すると城郭とともに城下の整備を行ったとされる。さらに元和3年(1617)姫路城から池田光政が移封してくると32万石の城下町、藩の中心部としてさらなる整備が進み、街の骨格が形成された。

今回の調査地、県庁北側緑地部分についても数区画に分かれており、安政５年（1858）に完成した鳥取藩の測量図『鳥取城下全図』(鳥取県立図書館蔵）によると、第１トレンチの場所には在御用場、第２・３トレンチは大西○○（破損のため判読できず）拝領屋敷地となっている。また、明治以降は永らく県会議事堂のあった場所として知られ、昭和50年代に解体されると、一帯は県庁北側緑地として整備が進み、現在の公園となった。

第46図　鳥取城下町関連遺跡 調査トレンチ位置図



1．黒褐色土 10YR2/2（表土）
2．明黄褐色土 10YR7/6（公園整地層）
3．黒色土 2.5Y2/1（近代のゴミ穴）
4．黒褐色土 2.5Y3/2（公園整地時の盛土、瓦･陶磁器を多く含む）
5．灰黄色砂 2.5Y7/2（真砂）
6．黒褐色砕石 10YR3/1
7．褐灰色砕石 10YR6/1（6 層と一連）
8．にぶい黄褐色粘質土 2.5YR6/3
9．黄橙色土 10YR7/8（6・7 層に伴う整地層）
10．橙色砕石 7.5YR6/6
11．褐灰色土 10YR6/1（粘性あり、ナイロン片を含む）
12．灰オリーブ砂礫 7.5Y5/2（緑色凝灰岩の砕片を含む）
13．黄灰色砂 2.5Y4/1
14．灰黄色土 2.5Y7/2
15．褐灰色砂土 10YR6/1（灰白色土片を多く含む）
16．黒色土 2.5Y2/1（焼土面）
17．黒褐色粘質土 2.5Y3/1
18．黒褐色土 10YR3/1（近代ゴミ穴）
19．にぶい黄色粘質土 2.5Y6/3（11 層の一部）

第47図　鳥取城下町関連遺跡 第１トレンチ実測図

2009年度

第１トレンチ(Tr１)〔第47図　図版19〕

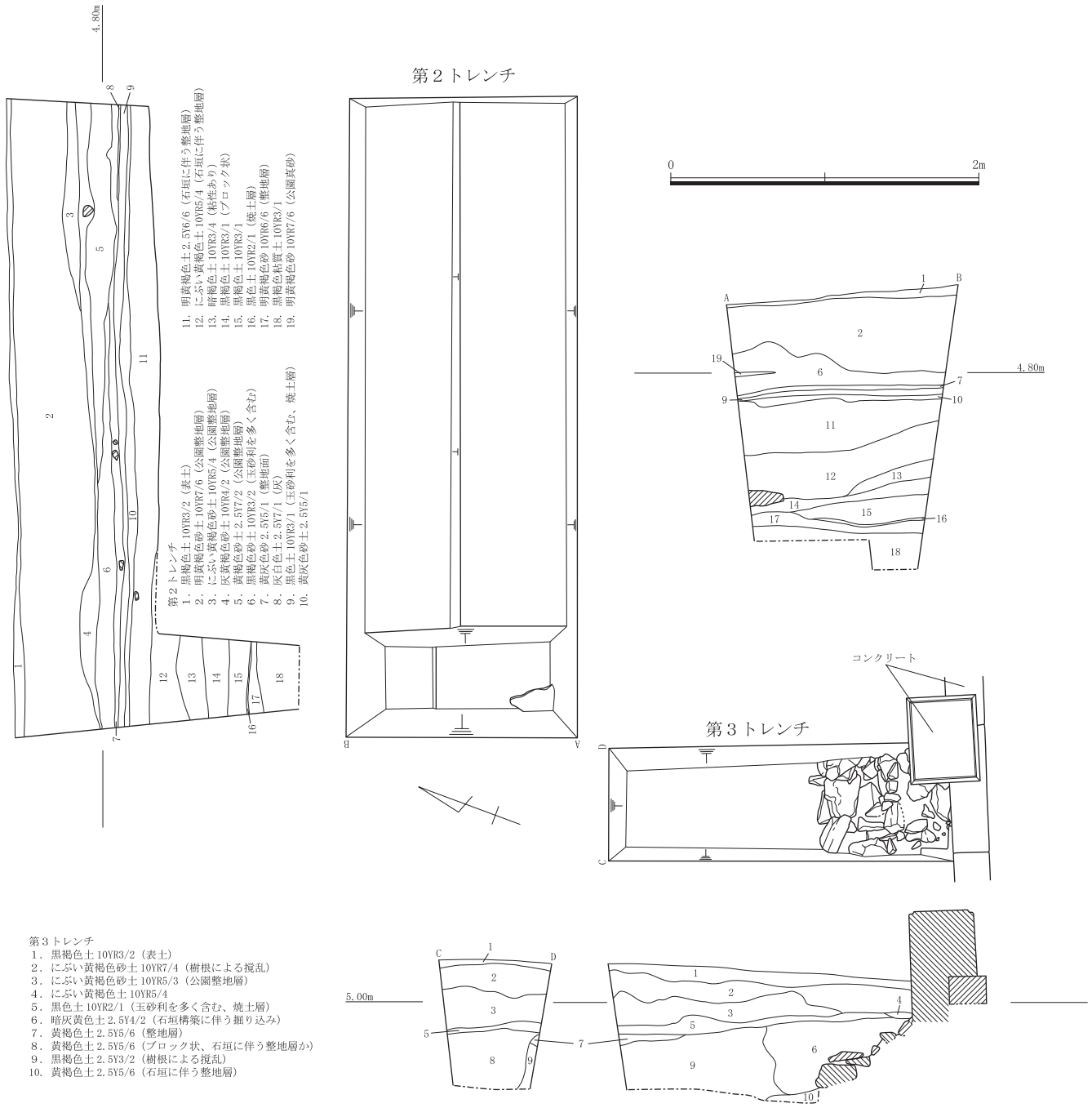
公園内北側に設定した4.2×1.4mのトレンチである。表土を除去すると現公園整備に伴う整地面である黄色系の砂礫である２・５層が広がり、間の４層は近代のゴミとともに近世瓦片も含んでいた。その下11層までは路盤砕石層やナイロンを含む層などの近代層が続く。標高４m付近にある12層になると一転し、しまりのある土質となる。13層は性格不明であるが、細かく砕いた緑色凝灰岩を敷いた層であり、その下、標高3.8～3.9m付近に広がる16層は、焼土層である。17層になると黒色系の粘質土へと変わるが、今回の調査対象深度を越えたため、これ以上の掘削は行わなかった。

第２トレンチ(Tr２)〔第48図　図版19〕

公園内南側、鳥取県庁側に設定した4.1×1.5mのトレンチである。下層確認のためサブトレンチを設け深く掘削を行った。表土下には第１トレンチ同様、公園整備に伴う整地土が厚く敷かれている（２～５層)。６・９層は玉砂利を多く含む層で、間には整地層である７層が敷かれる。玉砂利は明治期以降周辺で多くみられるもので、９層については焼土層である。10層以下になると土質は変わり、11・12層は、ともにブロック状の黄色系土が混ざり合う埋土で、10層は、これらの上面に敷かれた砂と考えられる。13～15層になると粘性のある黒色系の土となり、標高3.8～3.9mにある16層は焼土層である。焼土層下の17層は、地盤面とみられる硬化面である。

第３トレンチ(Tr３)〔第48図　図版19〕

第２トレンチの南側の隣接地に設定した2.2×0.7mのトレンチである。表土下の２・３層は公園整地の真砂であり、その下、５層は玉砂利を含む焼土層である。調査区の東側には、標高5.0mを天端とし、



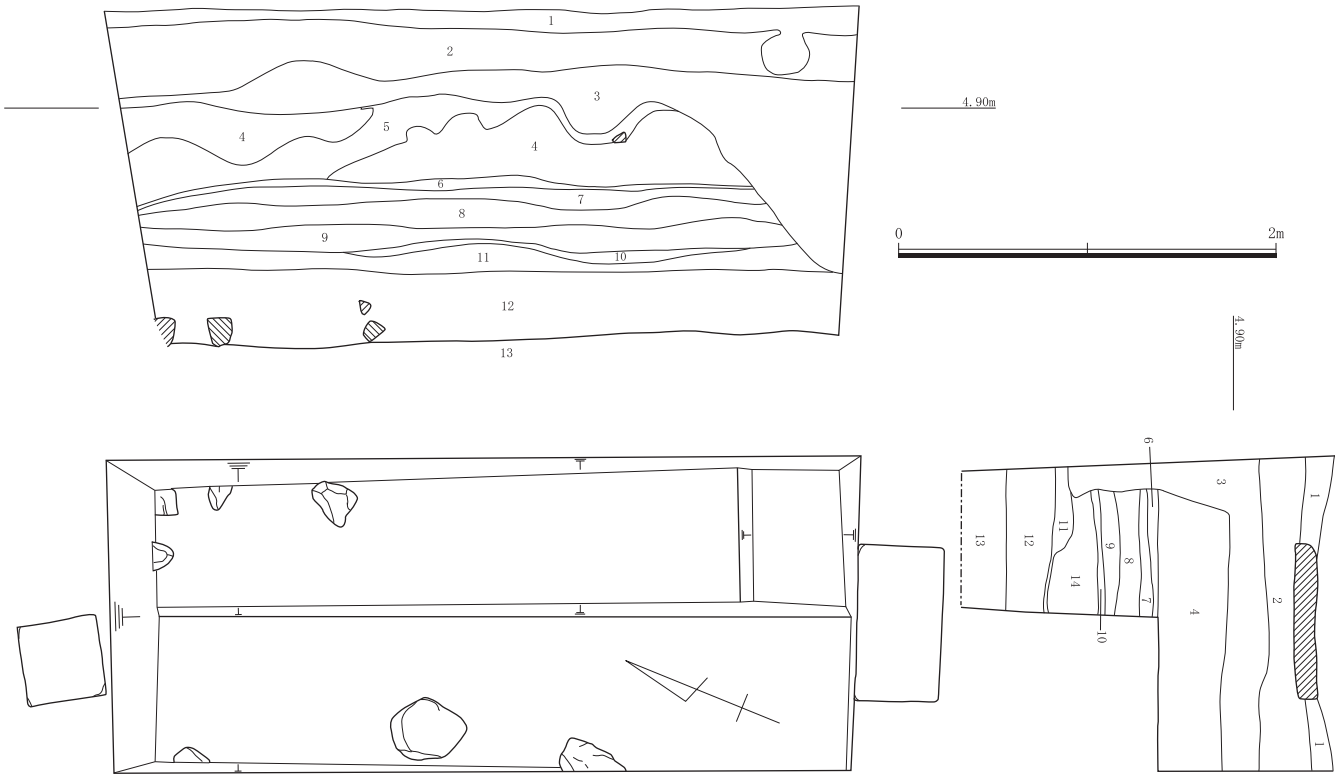
第48図　鳥取城下町関連遺跡 第２・第３トレンチ実測図

高さ60㎝程の石垣が存在する。撹乱である９層を除く５層以下はこれら石垣にともなう層で、８層は埋土、６層は石垣設置時のものである。石垣の裏側には20㎝程の裏栗石が積まれている。標高4.4m付近まで掘り下げを行ったが底面までは至っていない。

2010年度

第４トレンチ（Tr４）〔第49図　図版19〕

公園内北側、2009年度第１トレンチ横に設定した3.9×1.6mのトレンチである。昨年度のトレンチ同様、２～５層は公園整備にともなう整地層である。続く６～８層は近代におけるある時期の地盤であり、８層は砕石層である。標高4.1mにみられる10層（11層の表面部分と考えられる）の焼土層以下では状況が変わる。標高4.0m付近を上面として水平に堆積する12層は、周辺の地山由来とみられる花崗岩質の岩



1．黒褐色土 10YR2/3（表土）
2．明黄褐色土 10YR7/6
3．にぶい黄褐色土 10YR7/4（公園整地層）
4．黄褐色土 10YR8/6（公園整地層）
5．黒褐色土 10YR3/2（公園整地層）
6．灰黄褐色細砂土 10YR6/2
7．にぶい黄褐色土 10YR5/4
8．にぶい赤褐色砕石 2.5YR4/4
9．褐灰色粘質土 10YR4/1
10．黒色土 10YR2/1（焼土層）
11．褐灰色粘質土 10YR4/1
12．明黄褐色砂礫 2.5Y7/6（地山由来のと考えられ、岩盤片を含む）
13．黒褐色粘質土 10YR3/1（炭片を多く含む）
14．黒褐色粘質土 10YR3/1（灰白色土片を多く含む）

第49図　鳥取城下町関連遺跡 第４トレンチ実測図

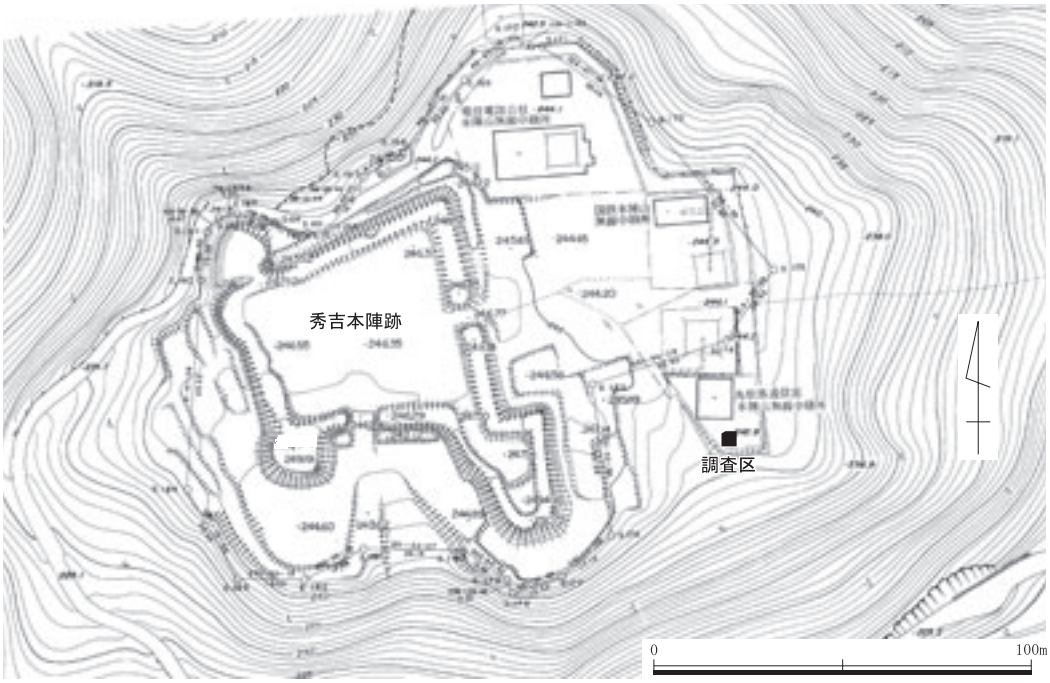
盤片を多く含む黄色系の砂礫層で30㎝の厚みを持つ。堅く整地されたこの層の上面は、遺構こそ確認できなかったものの、ある時期の地盤面と考えられる。13層は一転炭片を多く含む粘質土である。

小結

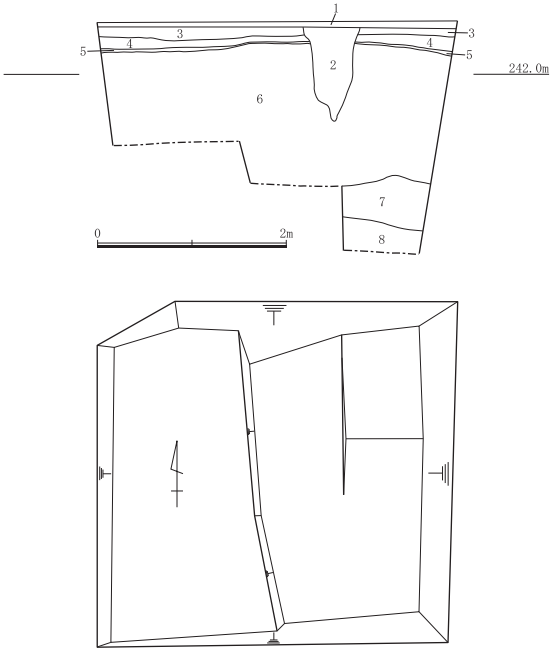
４つのトレンチ調査からは共通した状況がみてとれる。標高5.4m前後を地表とする現公園は、整備のための厚い盛土がみられる。第１トレンチ側で80㎝、第３トレンチ側で40㎝程である。公園化以前、同地は南北で段差があったため、その差が表れているとみられる。その下には近代の層が続き、標高4.0m付近にみられる焼土層を境に状況が変化する。それまであった近代の遺物はなくなり、第２トレンチ、第４トレンチのような整地による地盤面がみられる。これらの層にともなう遺構や遺物がないため、時期決定は困難であるが、状況的には江戸期の可能性が高い。

第16節　太閤ヶ平

太閤ヶ平は、鳥取平野の北東部、本陣山（標高250m）の山頂部に位置する。西側1400mにある久松山（標高263m）鳥取城を、天正８・９年（1580・81）羽柴秀吉を中心とする織田群が攻めた鳥取侵攻の際、秀吉本陣が置かれた場所として有名であり、「鳥取城跡附太閤ヶ平」として国史跡指定を受けている。秀吉は、周囲の山々に70ヶ所以上とも言われる数多の陣城を築いて外部との連絡を遮断させ、徹底的な兵糧攻め作戦をとった。最終的には鳥取城主吉川経家の自刃により戦いは終結した。高さ４～５mにもなる巨大な土塁に囲まれた本陣部分は、内寸58mを測る全国的にも例のないほど規模を誇る。今回の調査は、警察無線基地局建て替えに伴い実施したものである。



第50図　太閤ヶ平 調査トレンチ位置図



1．アスファルト
2．にぶい褐色砕石・砂礫 7.5YR6/4
3．黄灰色砕石 2.5Y4/1
4．黄色真砂 2.5Y8/6
5．灰黄砕石 2.5Y4/1
6．黒褐色砕石 10YR3/1
7．赤褐色土 2.5YR4/8
8．にぶい赤褐色土 5YR4/4

第51図　太閤ヶ平 第１トレンチ実測図

トレンチ〔第51図　図版19〕

本陣の北東側、史跡指定地の隣接地に設定した3.7×3.6mのトレンチである。周辺には本陣に付随する曲輪が数多く存在しており、現基地局建設時の図面でも直下に曲輪とみられる傾斜面途中の平坦地が記載されていたため、調査へ至った。地表下には地山由来と考えられる褐色系の土が厚く堆積しており、曲輪予想位置（標高241.5m）を越え標高240m付近まで掘り下げたが、依然コンクリート片を含む撹乱土であったため、それ以上の掘削は行わず調査を終了した。

小結

今回の調査は太閤ヶ平で行われた初めての発掘調査であったが、遺構、遺物ともに検出することはできなかった。本陣周辺の久松山側には多数の曲輪が存在する一方、調査地を含めた背面側は、著しく少ない。今後は、曲輪自体の調査と合わせ、その配置構成の検討も必要である。

第17節　鳥取城跡第24次調査（鳥取城堀端）

鳥取城は、鳥取平野の北東部、市街地端に位置する久松山（標高263m）に占地する。山上を中心とした中世鳥取城、山裾に広がる近世鳥取城（山下ノ丸）とが併存することが評価され、昭和32年12月18日に史跡指定となった。天正８・９年（1580・81）羽柴秀吉による鳥取攻め後に置かれた宮部継潤により山下ノ丸の築城が始まったとされ、慶長５年（1600）関ヶ原の戦い後、徳川方の武将池田長吉により骨格部分が、元和３年（1617）入府した池田光政に基本的な部分が整ったとされる。

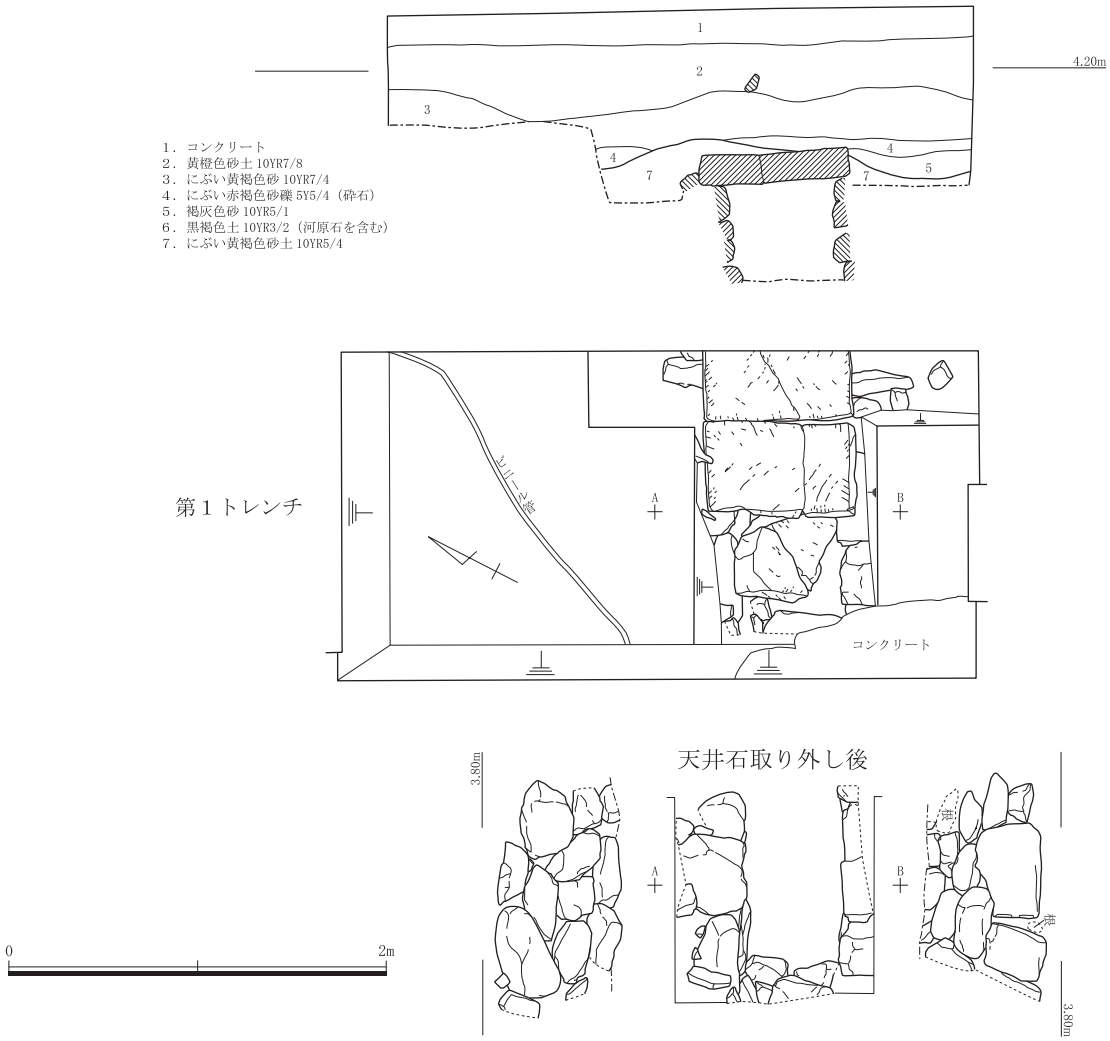
今回の調査は、バス待合所建設に伴い実施したもので、堀沿いの２ヶ所にトレンチを設定した。近世鳥取城部分における第24次の発掘調査であり、内堀石垣付近では初となった。なお、調査位置は史跡指定範囲（内堀石垣まで）の隣接地にあたる。

第１トレンチ（Tr１）〔第53図　図版19・20〕

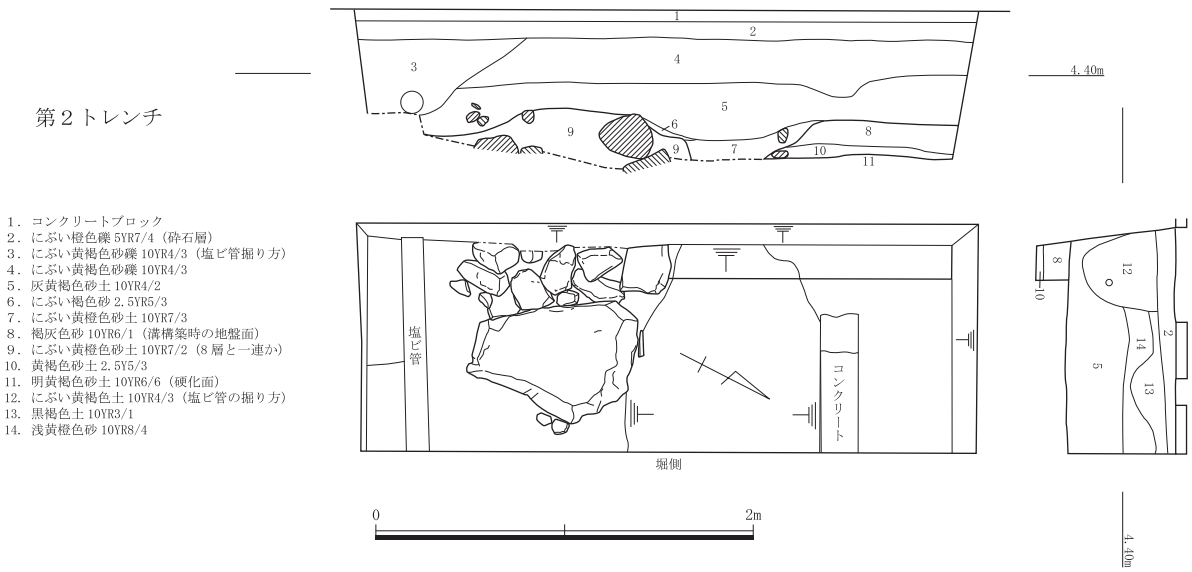
北ノ御門の西側に設定した3.4×1.7mのトレンチである。近代の造成土（１～６層）を除去した標高3.8m付近で溝の蓋石を検出した。蓋石は約80×50㎝、厚さ15㎝の緑色凝灰岩製の長方形石材であり、表面には石材切り出しの際の調整痕が多数残っていた。堀側の２石は亀裂が入るものの、おおよそ原位置を保っていたのに対し、１石は中央部も割れて、溝内に落ち込んでいた。城下側へ続く蓋石は完全に崩落し、溝内も土砂で埋まっていたため、調査過程で、落ち込んだ蓋石や土砂の一部を除去した。溝内部からの観察により調査区内の蓋石は、堀側から数えて３石目以降で、溝の内寸は50×50㎝の正方形状、側壁は３～４段の石積みであり、一部には河原石もみられた。

当時の地盤と考えられる第７層は、砂質土であり撹乱により上面の一部を削平されるものの、蓋石を覆う形で残存していることから、溝は暗渠であったことがわかる。

第52図　鳥取城跡第24次調査 調査トレンチ位置図



第53図　鳥取城跡第24次調査 第１トレンチ実測図



第54図　鳥取城跡第24次調査 第２トレンチ実測図

第２トレンチ(Tr２)〔第54図　図版20〕

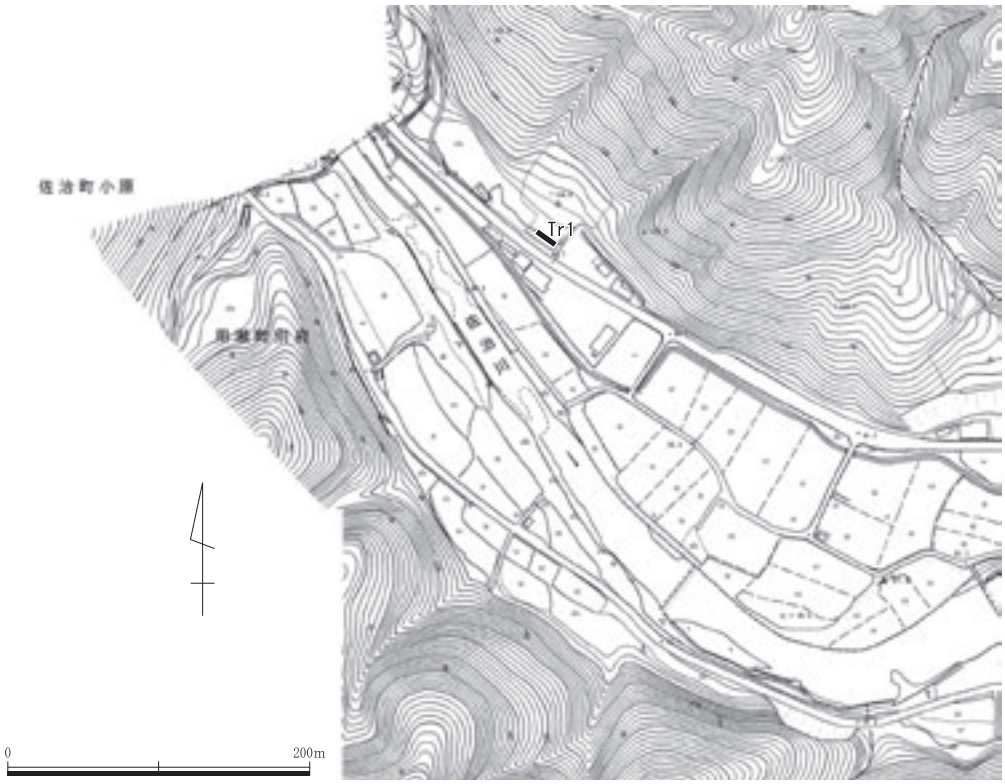
中ノ御門南側に設定した3.3×1.2mのトレンチである。配管工事や柵設置工事によりかなりの撹乱を受けているが、１～５層の近代層下には江戸期の地盤とみられる砂質土（８・９層）がある。両者は本来一連の層と考えられ、９層内の標高4.2mでは90×60㎝、厚さ20㎝程度の石材が検出された。堀側からの観察により、これは溝の蓋石であることがわかった。石材は花崗岩で第１トレンチのような連続した切り石状のものではなく、不定形の大石を置き、周囲の隙間を人頭大の石で埋めていた。土層観察の結果、これらの石の上には土が敷かれ、溝は暗渠であったことがわかった。調査対象深度を越え、蓋石も大型であるため、これを外しての溝内部調査は行わなかった。したがって、正確な内寸は不明であるが、堀側から観察した開口部の形状は、第１トレンチのものより、縦長の長方形状を呈している。

小結

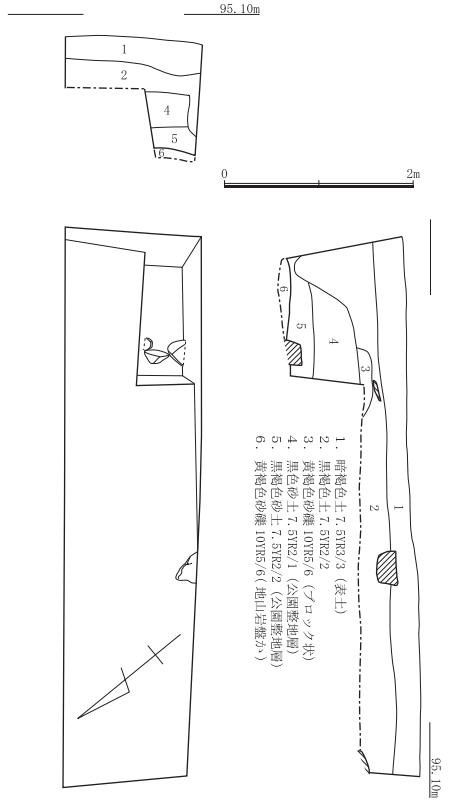
堀端に存在する数条の溝のうち今回は２条を調査したが形態はそれぞれ異なる。第１トレンチ溝の石材は、側壁が花崗岩主体の中に河原石を含むのに対し蓋石は緑色凝灰岩と、異なっていることから、蓋石の架け替えが推測される。蓋石と側壁との間に挟まっていた軒平瓦や、緑色凝灰岩が幕末期頃より多用されることからみても、19世紀代の架け替えと推定される。一方、第２トレンチ溝の蓋石石材は不定形な花崗岩で、間に小型の石材を利用している点など、側壁からの石の連続性がみられることなどから、第１トレンチより古くから存在していたと想定される。調査時の堀内水位は標高3.1m位であり、両トレンチの蓋石レベルには40㎝ほどの差があった。堀内水位が高まるとこれら溝から排水されたとみられる。

安政５年（1858）に完成した鳥取藩の測量図『鳥取城下全図』（鳥取県立図書館蔵）の下図には、水路・水門等が詳細に描かれており、２条の溝もまた、城下へ伸びる「水門」として記載されている。現状で堰のようなものは確認できてはいないものの、延長上のどこかに設置されていた可能性はある。

第18節　別府所在遺跡



第55図　別府所在遺跡 調査トレンチ位置図



第56図　別府所在遺跡 第１トレンチ実測図

調査区は、用瀬町別府の西端の佐治町との境付近、急峻な山に挟まれた谷部を流れる佐治川の斜面沿いに位置する。佐治川沿いには遺跡が点在しており、調査区の下流には、別府小谷所在遺跡や別府樟ノ元山添遺跡、上流の佐治町側には刈地鳥居原遺跡、葛谷古墳群が知られる。ここからは、縄文時代以降、各時代の遺構や遺物が検出されていることから今回の調査へ至った。

トレンチ（Tr１）〔第56図　図版20〕

丘陵の先端部分に設定した、5.9×1.45mのトレンチであり、下層確認のために南側の一部を掘り下げた。ナイロン等を含む表土層を除去すると、黒色土である２層が広がる。以下は砂質へと変化し、ブロック状の土塊とみられる３層、ほぼ同質の４・５層が厚く堆積する。６層は地山とみられる岩盤層である。遺構は検出できず、遺物は、２層内から出土した黒耀石片の１点のみである。

小結

周辺遺跡と関連が予想された調査であったが、地表から130cm地山まで掘り下げても遺構の検出はできず、遺跡を確認することはできなかった。

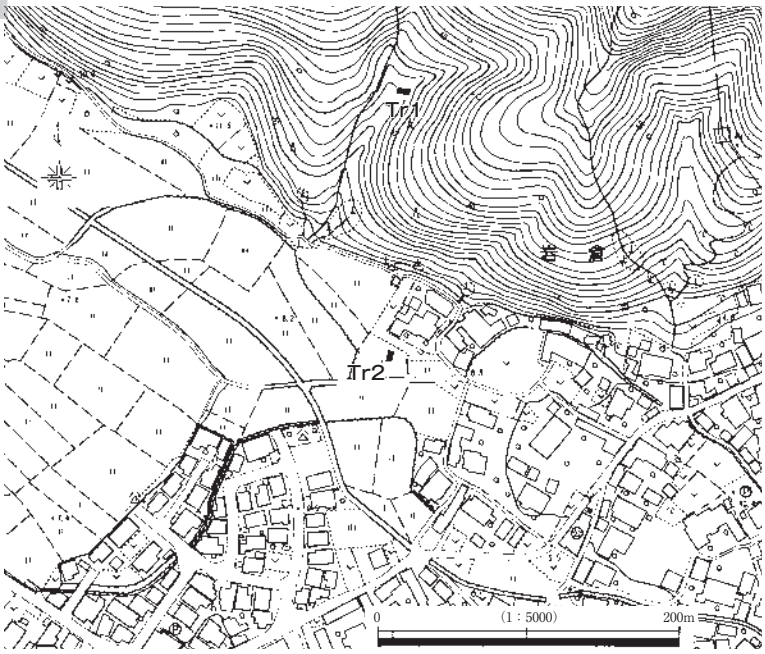
第19節　岩倉所在遺跡

岩倉所在遺跡は、鳥取市岩倉地区の北に位置し、岩倉山の山麓と麓の水田部に立地している。岩倉山丘陵には、西側に「首山古墳群」、東側には「宇部野山古墳群」、「滝山猿懸平墳墓群」等が展開しており、丘陵裾部に遺跡の所在を窺わせる地域である。

今回の調査は県道整備に伴い実施した発掘調査で、現況は林地と水田が耕作されており、それぞれ１箇所にトレンチを設定した。

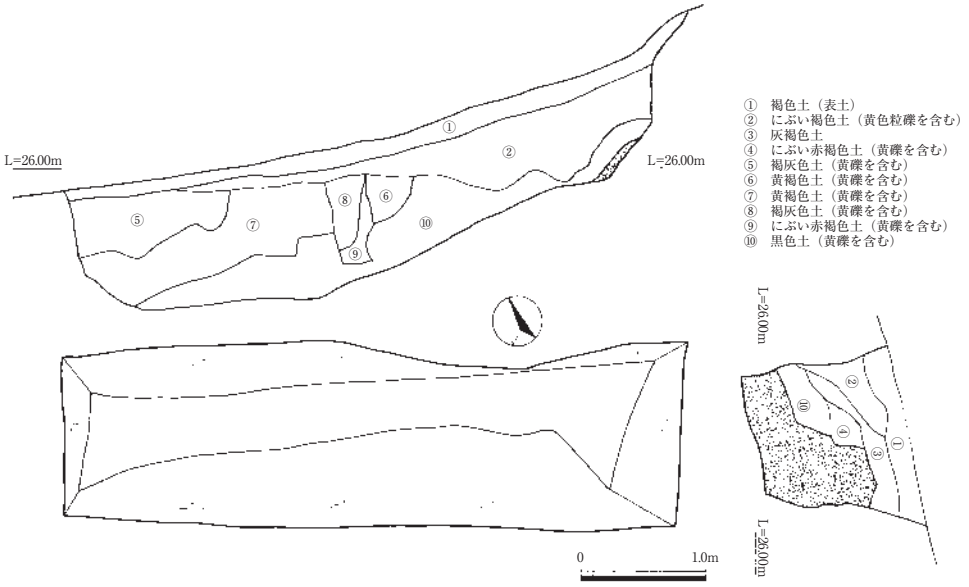
第１トレンチ（Tr-１）〔第58図　図版20〕

岩倉山の麓に所在する岩倉山観音堂の西方約300mの狭谷山麓で、檜と孟宗竹が繁茂する標高25.0m程度の斜地に1.5m×5.0mの東西トレンチを設定した。基本的な土層の層序は、第１層が層厚15cm～20cmで褐色土の表土である。第２層は層厚65cmのにぶい褐色土で黄色の礫土が混入しており、上方の丘陵尾根からの流入土と考えられるが、須恵器の小片１点を検出している。第３層は、層厚15cm～20cmの灰褐色土で東の一部に認められる間層で無遺物層である。第４層は層厚25cmにぶい赤褐色で、黄色の軟岩礫を多量に含んだ間層であり、尾根方向からの流入土で無遺



第57図　岩倉所在遺跡 調査トレンチ位置図

物層である。第５層は層厚40㎝の褐灰色土で黄色の礫が混入しており、尾根方向からの流入土で無遺物層である。第６・７は層厚40㎝～50㎝の黄褐色土で、黄色のブロック状の礫を多量に含んだ無遺物層で、尾根方向からの流入土である。第８層は層厚55㎝の褐灰色土で黄色礫が混入しており立木が朽ちた腐食土の無遺物層である。第９層は層厚70㎝のにぶい黄褐色の礫混土で、立木が朽ちた腐食土の無遺物層である。第10層は層厚30㎝～60㎝の黒色土で黄色礫粒土が多く混入した無遺物層であり、黄灰色の地山の上面を覆う流入土である。

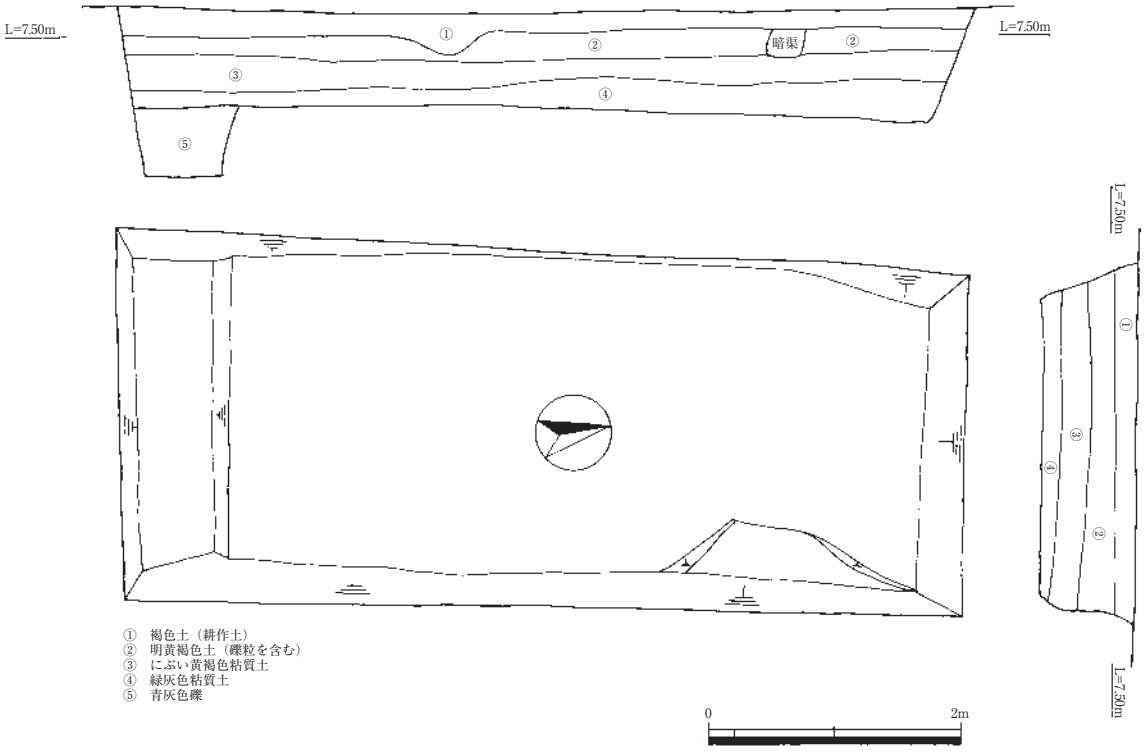


第58図　岩倉所在遺跡 第１トレンチ実測図

これにより、時期の特定はできないが、第２層以下の下層は、東方の尾根方向から土砂の流入が繰り返されて堆積したものと推定され、遺構等は検出されなかった。

遺物は、叩き痕の残る須恵器片が１点検出されているが、小片であることから器形・部位等の特定はできなかった。

第２トレンチ（Tr－２）〔第59図　図版20〕

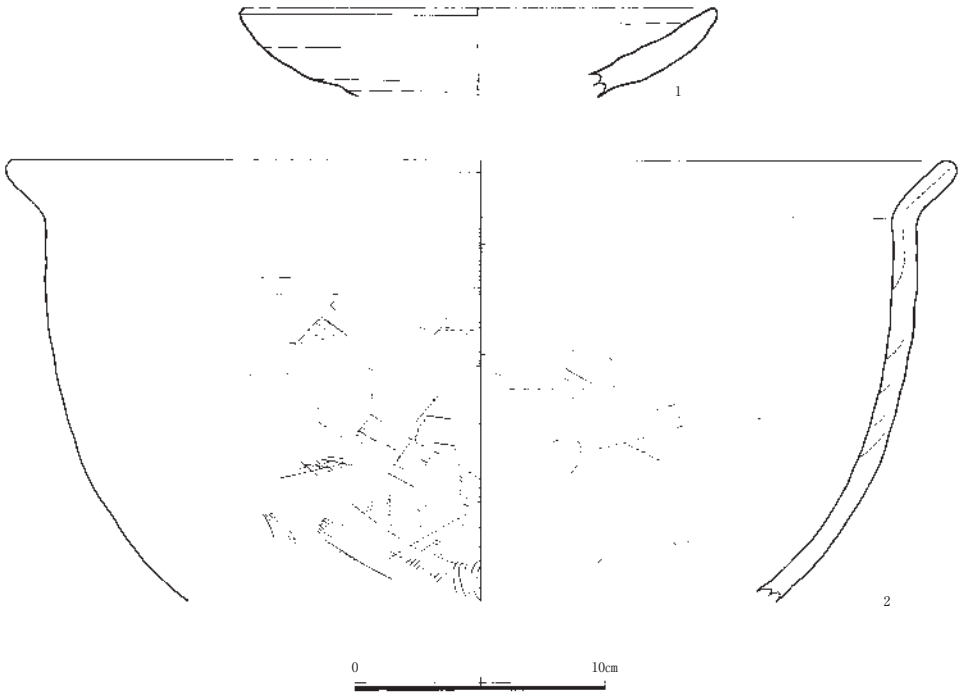


第59図　岩倉所在遺跡 第２トレンチ実測図

岩倉山の麓に所在する岩倉山観音堂の西方約250mの山裾で、標高８m程度の水田部に7.0m×3.0mの南北トレンチを設定した。基本的な土層の層序は、第１層が層厚10cm～20cmの褐色を呈する表土（耕作土）で無遺物層である。第２層は層厚15cm～25cmの明黄褐色土で、礫粒が混入した無遺物層である。第３層は層厚16cm～30cmのにぶい黄褐色の粘質土で、土師器片と須恵器片が数点検出された。第４層は層厚20cm～30cmの緑灰色の粘質土で、大型の土鍋片等が検出された。第５層は摩耗が著しい握り拳台から小豆台の礫層で、摩耗が著しいことから河原石と思われ、部分的に掘り下げたが、層厚70cm以上の礫層であることが確認された。

遺構は検出されなかったが、遺物は第４層で土師器片と須恵器片を数点検出し、第５層から土師質の土鍋を検出した。

(1)は底部を欠損し、復元口径12cmを測る土師器の皿で、風化と剥落が進んでいるが、内外面共にヨコナデ調整を施す。又、底面に回転糸切り調整痕を残す同個体と思われる土師器片が検出されている。(2)は底部を欠損しており、復元口径37cmを測る土師質の鍋である。口縁部が「く」の字に屈曲し、内外面共にハケメ調整とユビオサエが施されており、外面は使用による煤の付着が著しい。



第60図　岩倉所在遺跡 第２トレンチ出土遺物実測図

小結

今回の調査は、道路整備に伴い実施したもので、整備計画路線上の岩倉山山麓の狭渓と裾に広がる水田部に調査トレンチを設定し垂直的に埋蔵文化財の有無を確認した。

山麓の第１トレンチでは、東方尾根からの土砂が流入した痕跡を確認したが、遺構等の検出されなかった。

水田部の第２トレンチでは、ほぼ安定した層序が確認され、第３層で土師器と須恵器の小片を検出したが破断面に摩耗が認められることから二次的な堆積と考えられる。第４層のシルト層中で土鍋片を検出したが、量的には少なく、遺構の検出もされなかった。

検出された土師器の皿と土師質の土鍋は、その調整と器形から平安時代から鎌倉時代に比定され、第４層の下層として確認された摩耗の著しい礫層が河川の氾濫又は河道に堆積し、同時期後にシルト層の堆積が繰り返されたものと考えられる。

第３章　自然科学分析

第１節　良田中道所在遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

良田中道所在遺跡は、毛無山・箕上山山地の山麓緩斜面（鳥取県,1975）の開析谷に位置する。今回の分析調査では、谷底低地の古環境に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定および植物珪酸体分析を実施する。

１　調査地点の層相

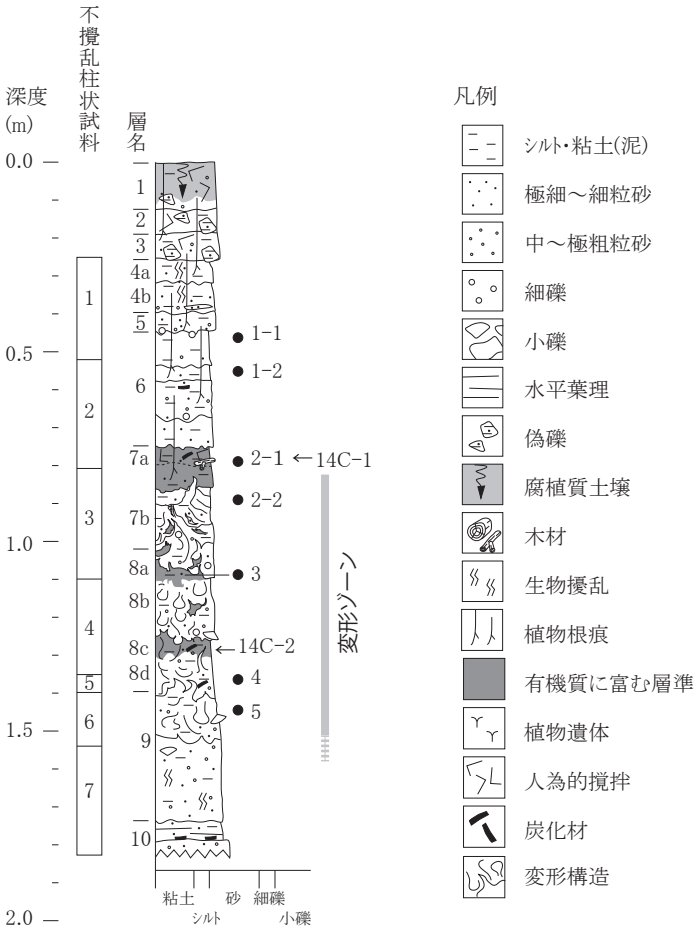
分析調査は調査区東壁の断面より採取された不撹乱柱状試料について実施する。不撹乱柱状試料は、現在の耕作土直下から発掘調査底面までの堆積層から連続して採取されている。東壁断面の写真および不撹乱柱状試料の層相観察結果を踏まえ、層序模式柱状図を作成した（第61図）。層名は、発掘調査時に設定されている１層から10層を踏襲し、細分される層準は枝番分けして層名を付した。柱状試料として採取されている４層より下位層準の堆積層の層相を以下に記載する。

４層：大きく２層に細分される。上位より４ａ層・４ｂ層と呼ぶ。４ａ層は黄灰～灰色を呈する、著しく擾乱ないし撹拌されている、細礫・中粒～粗粒砂混じり泥質細粒砂～細粒砂質泥からなる。幅１㎜以下の間隙が発達し、間隙に画された堆積物の形状は亜角状をなし、偽礫状を呈する。垂直・放射方向にのびる幅１㎜以下の微細な植物根痕も発達し、これらに沿って点状・斑状の酸化鉄・マンガンの沈着が確認される。

４ｂ層は黄灰～灰色を呈する、著しく擾乱ないし撹拌されている細礫・中粒～粗粒砂混じり泥質細粒砂～細粒砂質泥からなる。基本的な堆積・土壌構造は３層に類似するが、間隙に画された亜角状を呈する偽礫状の構造が相対的に大きく、初生の堆積構造を残す細粒砂の葉理からなる偽礫、細粒～中粒砂と泥が混じる偽礫ないし集合体などが下部で挟在するなど、４ａ層に比較して擾乱ないし撹拌の程度がやや弱い。以上の層相から、４層は人為的擾乱が及んだ氾濫堆積物と推定される。なお、４層から発掘調査時に土師器１点が出土している。

５層：暗灰～灰色を呈する、著しく擾乱されている細礫・中粒～粗粒砂混じり泥質細粒砂～細粒砂質泥からなる。グライ化している。上位層準から連続する幅数㎜の植物根痕が発達する。この根痕に沿って、うん管状酸化鉄が沈着する。

６層：灰色を呈する、著しく擾乱されている炭化物・細礫・中粒砂まじり泥質細粒砂～砂質泥からなる。層相から人為的擾乱



第61図　調査地点の層序・資料採取位置図

が及んだ堆積物とみられる。本層中からは板杭１点が出土している。

７層：大きく２層に細分される。上位より７ａ層・７ｂ層と呼ぶ。７ａ層は暗褐色を呈する、炭化物・中粒砂まじり有機質細粒砂質泥、７ｂ層は暗灰色を呈する、炭化物・細礫・中粒砂まじり細粒砂質泥と灰色を呈する泥質細粒砂からなる。７ａ層の上半部は人為的擾乱が著しく、泥マトリクスからなる、亜角よりさらに角のとれたブロック土ないし粒団の層がみとめられ、側方に泥がちな部分と砂がちな部分がまだらに分布し、最上部で細粒化する。下半部は砂マトリクスを伴い、淘汰が悪く、角～亜角でブロック状、板状ないし刃状の形をなす最大粒径数cmまでの、泥質堆積物からなるブロック土層からなる。また下半部には下位層準より連続する地震動により著しく変形している部分が確認される。この変形構造は、火焔状ないし流線状の構造を呈し、流線状の構造に沿って、下位層準の堆積物ブロックが引きずり上げられている状況が確認される。このような層相から、７層は人為的営力により形成された耕作土と推定される。

８層：上位より８ａ層～８ｄ層に細分される。８ａ層は暗灰色を呈する、炭化物・中粒砂まじりやや腐植質の細粒砂質泥、８ｂ層は灰～褐灰色を呈する、炭化物・細礫・小礫・中粒砂まじり細粒砂質泥、８ｃ層は暗褐色を呈する、炭化物・中粒砂まじりやや腐植質の細粒砂質泥、８ｄ層は灰色を呈する細礫混じり泥質砂からなる。いずれの層準も流線状ないし火焔状に変形し、下位層準の堆積物が引きずり上げられている状況や上位層準の堆積物が陥入している状況が確認される。そのため、各層の層理面は不明瞭となっている。変形が著しく、堆積環境を推定することは難しいが、氾濫堆積物や腐植泥が堆積する氾濫原の堆積環境であったものと思われ、上位層準に向けて粗粒化することから、基準面が上昇している可能性がある。

９層：灰色を呈する、淘汰不良の大礫から細礫、極粗～粗粒砂混じり泥質中粒～細粒砂から細粒砂なる。上半部は火焔状・流線状に変形している。層相から土石流のような重力性の堆積物とみられる。

10層：灰色を呈する、水平方向の葉理状の構造をなす泥～細粒砂質泥からなる。炭化物が葉理に沿って挟在する。流水の営力下で形成された堆積物とみられる。

２　試料

上記の層相および遺物の出土状況を踏まえ、放射性炭素年代測定は７ａ層上部の枝材、８ｃ層中の炭化材２点（試料14C-1・2)、植物珪酸体分析は９層から６層にかけて７層準（試料1-1,1-2,2-1,2-2,3,4,5）について実施した（第61図)。

３　分析方法

(1)放射性炭素年代測定

測定用試料に対して、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものの有無を確認し、付着している場合はピンセットや超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、塩酸により炭酸塩など酸可溶成分の除去、水酸化ナトリウムにより腐植酸などアルカリ可溶成分の除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩など酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理)。

処理後の試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分）850℃(２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて二酸化炭素を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した二酸化炭素と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC

Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

なお、暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σと2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とはσや2σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2)植物珪酸体分析

各試料について、乾燥重量を秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

結果は、堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量密度の一覧表と、その層位分布図として示す。含量密度は10の位で丸め（100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。100個/ｇ未満は「<100」で表示する。

4　結果

(1)放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表１に示す。同位体効果の補正を行った年代値は、14C-1が650±30BP、14C-2が2110±30BPを示す。また測定誤差を2σとして計算させた暦年較正結果のうち、確率１位の値は、14C-1がcal AD 1345～1393、14C-2がcal BC 200～50、を示す。

試料名	種類	測定年代(BP)	δ13C(‰)	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)				Code No.
					誤差	cal AD/BC	cal BP	相対比	
14C-1	枝材	750±20	-31.33±0.65	650±30 (646±26)	σ	cal AD 1,291 - cal AD 1,310	cal BP 659 - 640	0.407	IAAA-102276
						cal AD 1,360 - cal AD 1,386	cal BP 590 - 564	0.593	
					2σ	cal AD 1,283 - cal AD 1,324	cal BP 667 - 626	0.438	
						cal AD 1,345 - cal AD 1,393	cal 605 - 557	0.562	
14C-2	炭化材	2130±30	-26.20±0.65	2110±30 (2109±28)	σ	cal BC 177 - cal BC 92	cal BP 2,127 - 2,042	0.975	IAAA-102277
						cal BC 67 - cal BC 63	cal BP 2,017 - 2,013	0.025	
					2σ	cal BC 200 - cal BC 50	cal BP 2,150 - 2,000	1.000	

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
3)暦年較正計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。計算には表に示した丸める前の値を使用している。計算には補正年代の括弧内の丸める前の値を使用している。１桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。相対比はσと2σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表１　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

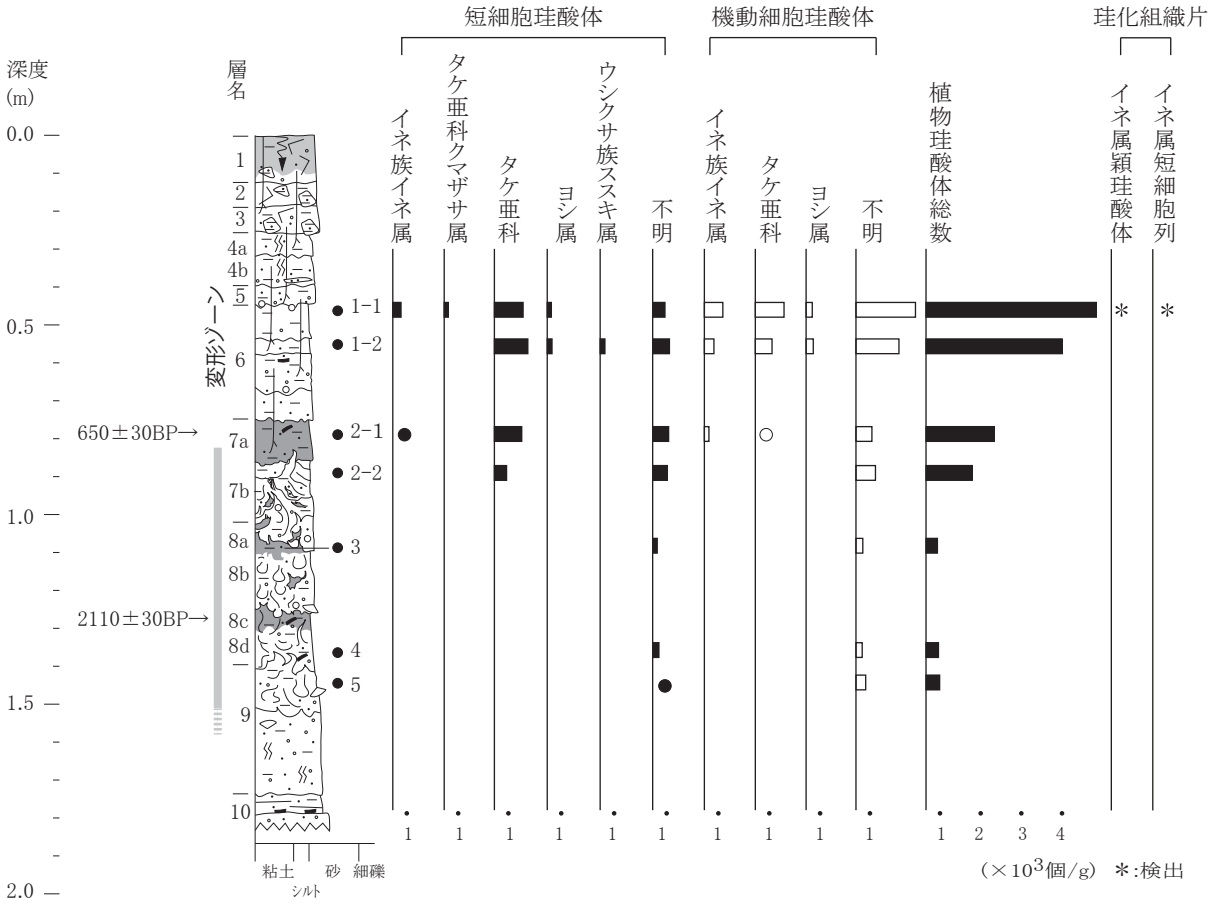
(2)植物珪酸体分析

結果を表２、第62図に示す。各調査層準からは植物珪酸体が産出するものの、含量密度は低い。産出する植物珪酸体は保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるものが多い。

９層上部（試料５）～７ｂ層上部（試料2-2）は、植物珪酸体含量密度が著しく低い。産出分類群の特定が困難である不明がわずかに認められるに過ぎない。また７ｂ層上部では、タケ亜科の短細胞珪酸体も見られる。

７ａ層（試料2-1）では不明やタケ亜科の他に、栽培植物であるイネ属もわずかに検出され、葉部の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が見られる。その含量密度は、短細胞珪酸体で100個/ｇ未満、機動細胞珪酸体で約100個/ｇである。

試料番号1-2と1-1（６層）では植物珪酸体含量が下位よりも増加する。イネ属も検出され、試料番号1-2では機動細胞珪酸体が約200個/ｇ、試料番号1-1では短細胞珪酸体が約200個/ｇ、機動細胞珪酸体が約500個/ｇである。試料番号1-1では、籾（穎）に形成される穎珪酸体や葉部の短細胞列も認められる。またタケ亜科、ヨシ属、ススキ属も見られる。



堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g 未満を示す。珪化組織片の産状を＊で示す。

第62図　植物珪酸体含量の層位的変化

種類（分類群）	試料番号						
	1-1	1-2	2-1	2-2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	200	-	<100	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	100	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	700	800	700	300	-	-	-
ヨシ属	100	100	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	-	100	-	-	-	-	-
不明	300	400	400	400	100	200	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	500	200	100	-	-	-	-
タケ亜科	700	400	<100	-	-	-	-
ヨシ属	200	200	-	-	-	-	-
不明	1,500	1,100	400	500	200	200	200
合　　計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,400	1,500	1,100	700	100	200	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	2,800	1,900	600	500	200	200	200
総　計	4,200	3,300	1,700	1,100	300	300	300
珪化組織片							
イネ属穎珪酸体	*	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	*	-	-	-	-	-	-

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めた値で示す。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。<100は100個/g未満を示す。'-は未検出、＊は検出を示す

表２　植物珪酸体含量

5　考察

(1)調査地点で確認された変形構造について

先述したように調査地点の堆積層は、９層上部から７ａ層下部にかけて、著しく流動変形していることが確認される。この流動変形により、各層は不連続となっており、上位に累重する堆積物中には下位堆積物が流線に沿って引きずり上げられており、一方、上位堆積物が下位層準に陥入している状況が確認される。このような変形構造は、Matsuda(2000)により定義されている、水底下の堆積物でみられる、地震動による変形構造に類似するものである。Matsuda(2000)・松田(1999)によると、１回の地震動によって変形した堆積物の垂直範囲を変形ゾーンと呼び、水底に堆積した泥質堆積物（上部ほど水分を多く含むとともに、厚密を受けていないため流動性に富む。より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質をもつ）に認められる１つの変形ゾーンは、上から順に(1)水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット（liquidized deformation unit)、(2)上部で、変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焔状（ただしフレーム構造とは別種）の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下部に下向きに凸な形に変形した葉理から構成されるロード構造をなす含水塑性変形ユニット（hydroplastic deformation unit)、(3)下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット（brittle deformation unit)、から構成されるとされる。また、これらの垂直的な変形ユニットの配列が重複した変形ゾーンの識別に役立ち、ユニット(1)の上位にユニット(3)あるいは(2)が認められれば、より新しい地震イベントが推定できるとされる。

今回の調査地点で確認された７ａ層下部～９層上部の変形構造は、含水塑性変形ユニットに相当し、１回の地震イベントにより形成されたものと判断される。地震イベントの年代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まるとされる（Matsuda,2000)。今回の変形ゾーンの上端は７ａ層上部の擾乱によって不明瞭となっているが、７層中部形成期に発生した地震イベントにより形成され

たものと考えられる。７ａ層に取り込まれていた木材（枝材）の放射性炭素年代（暦年）は、13世紀末～14世紀末（calAD1291～1386）の年代値を示していることから、それ以前に発生した地震イベントにより生じた変形構造と判断される。当時の調査地点の地下水位は表層より高く、滞水していたことが推定される。

(2)調査地点の古環境

ここでは、調査地点が位置する開析谷の堆積環境について、層相および植物珪酸体分析結果に基づいて検討する。９層は淘汰の悪い塊状をなす堆積物からなり、土石流のような重力性の堆積物と判断される。本層の形成により、調査地点の景観は一変し、裸地化したものと判断される。本層最上部の層準の植物珪酸体含量密度位は著しく低くかったが、これは堆積物の成因と関係しており、堆積時に取り込まれる植物珪酸体量が少なかったことに起因すると判断される。

８層は、地震動による変形が著しく、初生の構造が不明瞭となっているが、変形している堆積物の層相から、腐植泥が堆積する時期を挟在する氾濫原の堆積環境で形成された可能性が推定される。堆積物中には炭化材片が取り込まれており、８ｃ層中の炭化材の放射性炭素年代が暦年でcalBC177～63を示したことから、弥生時代中期以降に形成されたことが推定される。８層における植物珪酸体の産状をみると、９層と同様に含量密度が著しく低かった。原因としては、堆積速度が速く、取り込まれる植物珪酸体が少なかった可能性が考えられる。８ａ層のやや腐植質になる層準でも少なかったが、産出する植物珪酸体の保存状態が悪かったことから、堆積時・後に風化作用による分解消失の可能性もある。

７層も氾濫原の堆積環境で形成された堆積物と推定されるが、下部の７ｂ層は地震動により著しく変形しており、上部の７ａ層は人為的に擾乱されている。植物珪酸体の産状をみると、上部の７ａ層準にかけて含量密度が高くなり、栽培植物のイネ属植物珪酸体も産出するようになる。少なくとも７ａ層形成期には調査地点は比較的安定した場所となり、人間活動領域に変化していることが推定される。その年代は放射性炭素年代測定から、13世紀末～14世紀末頃の中世と推定される。

稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量密度が高くなる。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料１ｇ当り5,000個以上の密度で検出された場合、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている（杉山,2000)。ただし、これまでに考古遺跡で実施された分析事例からは、畦畔などが検出されている遺構検出面からほとんどイネ属珪酸体が検出されなかった事例が各地で報告されている（古環境研究所,1992;パリノ・サーヴェイ,2001・2002など)。さらに、植物珪酸体の含量については、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いに関連があることも確かめられている（外山,2002)。また、植物珪酸体は、pH値の高い場所や、乾湿を繰り返す場所で風化しやすいことが指摘されている（江口,1994,1996)。近藤・佐瀬（1986）では、種類によって溶解性に違いが認められることも確認されている。このように、植物珪酸体の風化についても考慮する必要があり、遺跡において稲作の解釈を行う際には慎重な判断を要すものと考えられる。

今回の７ａ層については、植物珪酸体の保存状態が悪く、風化作用の影響を受けている可能性があり、淘汰された群集になっている可能性がある。このことと、人為的に擾乱されている層相を呈していることを踏まえると、７ａ層形成期には調査地点において稲作が行われていた、あるいは何らかの目的で資材としてイネが利用されていた可能性などが推定される。

６層も氾濫原の堆積環境で形成された堆積物で、人為的に擾乱されている層相をなす。本層では植物珪酸体含量密度が高くなり、栽培種のイネ属の含量密度も高くなる。含量密度は500個/ｇ程度で、先述した稲作が行われた水田跡の土壌の指標となっている値より低い値となっている。現在の水田土壌中に含まれる植物珪酸体の相対的な産状調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は９％、稲藁を堆肥として与えている水田では16％に上がる事例が存在する（近藤,1988)。今回の６ａ層における機動細

胞珪酸体の相対比を算出すると約18%と、水田土壌の相対比と同等の産出率を示している。これらのことおよび、堆積環境および層相を踏まえると、調査地点では堆積物中に植物珪酸体が蓄積されにくい状態にあったものの、稲作が行われていた可能性が考えられる。また、当時の谷内や周辺にはタケ亜科、ヨシ属、ススキ属などのイネ科植物も生育していたことが推定される。

以上、調査地点の古環境について述べてきたが、周辺の植生や谷内の詳細な植生については、花粉分析や種実分析などにより情報が得られると思われる。また、谷内の堆積環境については、本開析谷が湖山池に開口しており、湖山池の湖水準変動などの影響を受けている可能性が高い。赤木ほか(1993)による湖山池の地史的変遷をみると、縄文時代後期（3000年前）には海退により池周辺には腐植に富んだ泥層や泥炭層が拡がり、弥生時代（約2000年前）には弥生海退と呼ばれる小海退がピークに達し、湖水準が-2m低下したことが推定されている。今回の８層の年代値が弥生時代の年代値に相当することを踏まえると、９層から８層の堆積は、湖水準低下に伴う土砂流出の増大を示している可能性もある。今後、調査地域の地形発達過程を踏まえた、複合的な評価が望まれる。

引用文献

赤木　三郎・豊島　吉則・星見　清晴・谷村美弥子,1993,湖山池の地質環境と地史的変遷.地質学論集,29,103-106.

江口　誠一,1994,沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして.植生誌研究,2,19-27.

江口　誠一,1996,沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値.ペトロジスト,40,81-84.

近藤　錬三,1988,十二遺跡土壌の植物珪酸体分析.鋳師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書－,御代田町教育委員会,377-383.

近藤　錬三,2010,プラント･オパール図譜.北海道大学出版会,387p.

近藤　錬三・佐瀬　隆,1986,植物珪酸体分析,その特性と応用.第四紀研究,25,31-64.

古環境研究所,1992,プラント・オパール分析調査報告.「二之宮千足遺跡　国道17号（上部道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（自然科学分析編）」,建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団,50-60.

Matsuda,J.-I,2000,Seismic　deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan.Sedimentary Geology,135,99-116.

松田　順一郎,1999,瓜生堂遺跡第45-2次発掘調査でみられた古地震痕跡,都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告,財団法人東大阪市文化財協会,233-242.

パリノ・サーヴェイ,2001,亀里平塚遺跡の自然科学分析.「亀里平塚遺跡 主要地方道前橋・長瀞線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団,343-353.

パリノ・サーヴェイ,2002,横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析.「横手南川端遺跡・横手湯田遺跡北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 第１分冊(本文編)」,(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団,133-155.

杉山　真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻　誠一郎(編著)考古学と自然科学3　考古学と植物学,同成社,189-213.

鳥取県,1975,千代川流域地域　土地分類基本調査　鳥取北部・鳥取南部５万分の１.40p.

外山　秀一,2002,池島・福万寺遺跡の立地と環境.「池島・福万寺遺跡2（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編」,(財)大阪府文化財センター,411-429.

第２節　鳥取市良田平田遺跡における自然科学分析

株式会社古環境研究所

Ⅰ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、鳥取市良田平田遺跡における堆積年代を検討する目的で、出土した炭化物を対象として加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

試料は、良田平田遺跡の試掘調査で掘削されたトレンチ２西壁において採取されたブロック試料のうち、第８層と第13層中より検出された炭化物２点（試料№１，試料№２）である（表３）。

測定は、調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて行った。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№１	トレンチ２西壁，第８層	炭化物	超音波煮沸洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
№２	トレンチ２西壁，第13層	炭化物	超音波煮沸洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

表３　測定試料及び処理

３．結果

表４に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第63図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正には0xCal3.10（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

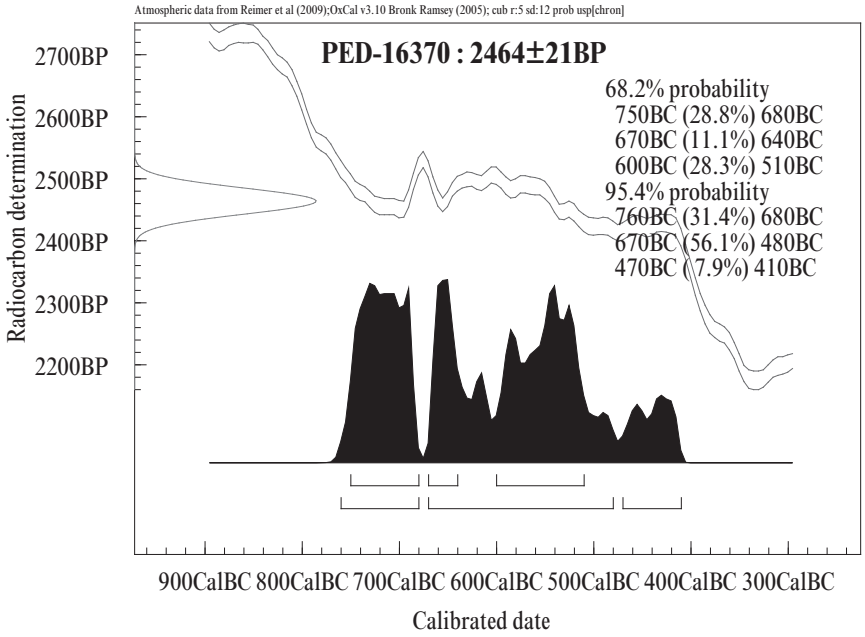
４．所見

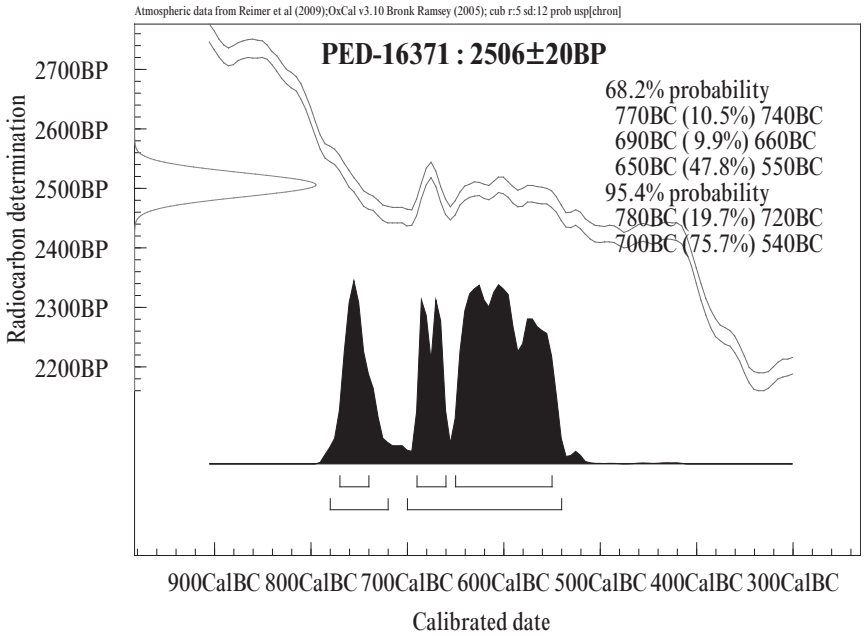
加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定の結果、炭化物№１（第８層）では2465±20年BP（２σの暦年代でBC760～680、BC670～480年、BC470～410年)、炭化物№２（第13層）では2505±20年BP（同BC780～720、BC700～540年）の年代値が得られた。

試料名	測定No.	$\delta^{13}C$	暦年較正用年代	^{14}C年代	暦年代（西暦）	
	(PED-)	(‰)	(年BP)	(年BP)	1σ（68.2%確率）	2σ（95.4%確率）
No.1	16370	-28.55±0.19	2464±21	2464±20	BC750-680（28.8%）	BC760-680（31.4%）
					BC670-640（11.1%）	BC670-480（56.1%）
					BC600-510（28.3%）	BC470-410（ 7.9%）
No.2	16371	-24.68±0.15	2506±20	2506±20	BC770-740（10.5%）	BC780-720（19.7%）
					BC690-660（ 9.9%）	BC700-540（75.7%）
					BC650-550（47.8%）	

BP：Before Physics（Present），BC：紀元前

表 4　測定結果





第63図　暦年較正結果

Ⅱ．プラント・オパール分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山,2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山,1984）。

ここでは、良田平田遺跡における稲作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を実施した。

2．試料

分析試料は、トレンチ２西壁において上位より５層、８層、11層、13層より採取された４試料である。各層の堆積状況を以下に記し、試料採取箇所を分析結果の模式図に示す。

1) ４層

締まりのある黄灰色シルトで、上部の３層直下に茶褐色細砂が認められる。植物片が混入する。撹乱は認められない。

2) ５層

黄灰色粘土で、下部に黄灰色砂が認められる。撹乱は認められない。

3) ６層

暗黄灰色腐植土（泥炭）で、未分解の植物片が大量に含まれる。撹乱は認められない。

4) ７層

黄灰色粘土で、植物片や炭化物が混入する。撹乱は認められない。

5) ８層

粘質の強い暗灰黄色粘土で、シルト分も含まれる。植物片が混入し、７層との境部には炭化物が集中する。撹乱は認められない。

6)11層

黒褐色腐植土（泥炭）で、未分解の植物片が大量に含まれ、炭化物が混入する。撹乱は認められない。

7)13層

粘質のある暗灰黄色シルトで、木片が多く含まれる。撹乱は認められない。

8)14層

粘質のある黄灰色砂質シルトで、粗砂が含まれる。植物片が認められる。撹乱は認められない。

9)15層

粘質の強い灰白色粘土で、炭化物が混入する。撹乱は認められない。撹乱は認められない。

3．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原,1976）をもとに、次の手順で行った。

1)試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2)試料約１ｇに直径約40㎛のガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1㎎の精度で秤量）

3)電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

4)超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5)沈底法による20㎛以下の微粒子除去

6)封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7)検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）を乗じて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75である（杉山,2000）。

４．結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、チマキザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表５、第64図に示した。

５．考察

良田平田遺跡のトレンチ２西壁の５層、８層、11層、13層についてプラント・オパール分析を実施した結果、いずれの層からもイネのプラント・オパールは検出されなかった。本地点で検出されたプラント・オパールは、ススキ属型、メダケ節型およびチマキザサ節型の３分類群であるが、いずれも総じて低い密度である。こうしたことから、これら４層準において稲作が行われた可能性は考えにくい。全体にプラント・オパール密度が低いことから、土層の堆積速度が速かったか、イネ科草本植物の生育には適さない環境であったと推定される。

文献

Bronk Ramsey C.（1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program,Radiocarbon, 37(2),425-430.

Bronk Ramsey C.(2001)Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A)，355-363.

Paula J Reimer et al.,（2004）IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46，1029-1058.

尾嵜大真(2005)INTCAL98からIntCal04へ.学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№３－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－,14-15.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代，3-20.

杉山真二(1987)タケ亜科植物の機動細胞珪酸体.富士竹類植物園報告,第31号,p.70-83.

杉山真二(2000)植物珪酸体（プラント・オパール）.考古学と植物学.同成社,p.189-213.

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－.考古学と自然科学,9,p.15-29.

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－.考古学と自然科学,17,p.73-85.

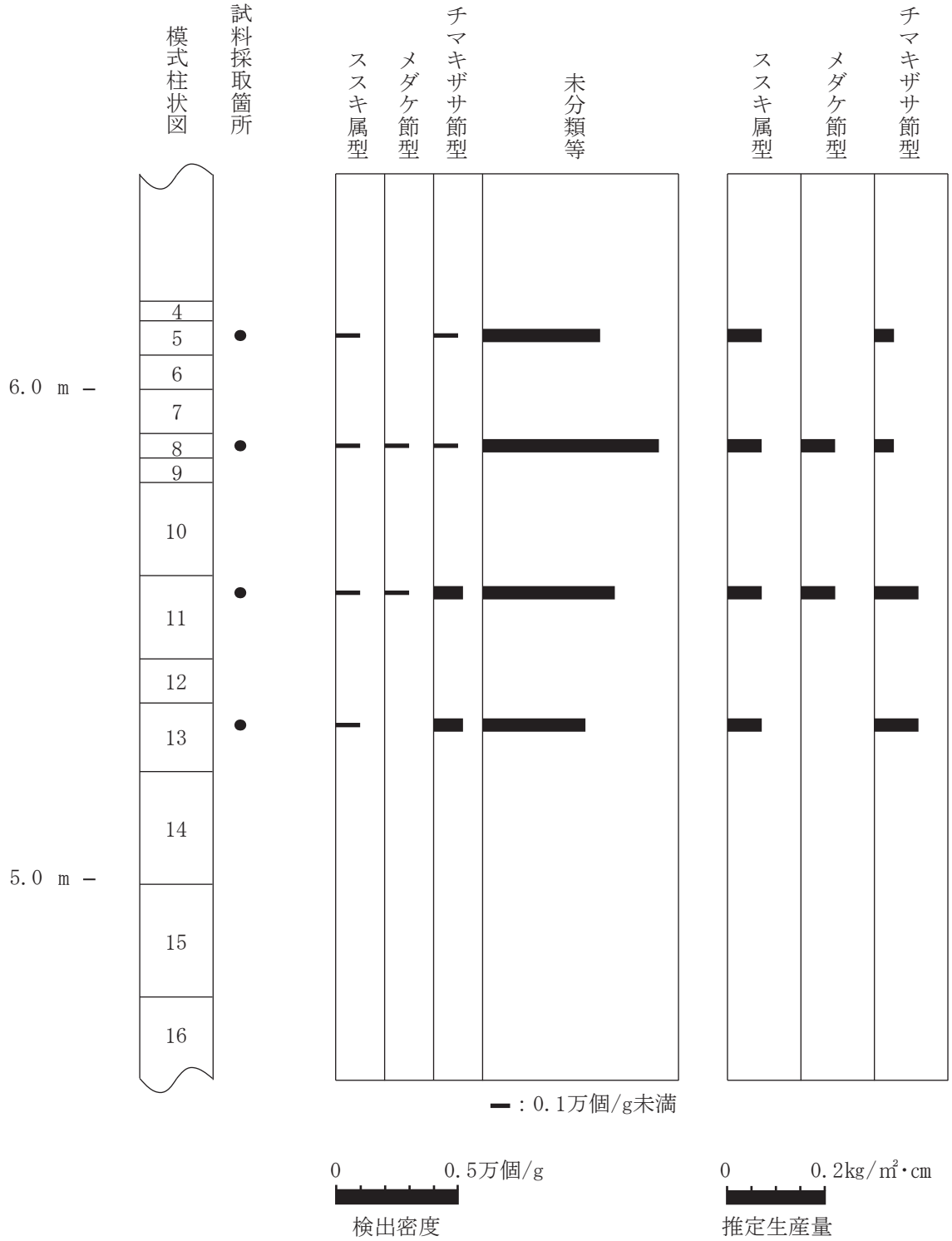
検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼層位		Tr-2 西壁 5	8	11	13
イネ科	Gramineae (Grasses)				
ススキ属型	*Miscanthus* type	*6*	*6*	*6*	*6*
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)				
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		*6*	*6*	
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	*6*	*6*	*12*	*12*
未分類等	Unknown	*48*	*72*	*54*	*42*
プラント・オパール総数	Total	*60*	*90*	*78*	*60*

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

ススキ属型	*Miscanthus type*	*0.07*	*0.07*	*0.07*	*0.07*
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		*0.07*	*0.07*	
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	*0.04*	*0.04*	*0.09*	*0.09*

表5　プラント・オパール分析結果



第64図　プラント・オパール分析結果

写 真 図 版

善田傍示ヶ崎遺跡 調査地遠景(北東から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 6 トレンチ掘下げ状況(北から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 6 トレンチ掘下げ状況(西から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 6 トレンチ南壁断面(北から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 6 トレンチ東壁断面(西から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 7 トレンチ掘下げ状況(東から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 7 トレンチ掘下げ状況(北から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 7 トレンチ西壁断面(東から)

図版 2

善田傍示ヶ崎遺跡 第 7 トレンチ南壁断面(北から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 8 トレンチ調査地(東から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 8 トレンチ掘下げ状況(西から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 8 トレンチ東壁断面(西から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 8 トレンチ南壁断面(北東から)

善田傍示ヶ崎遺跡 第 8 トレンチ遺物出土状況(南東から)

松原田中遺跡 調査地遠景(北西から)

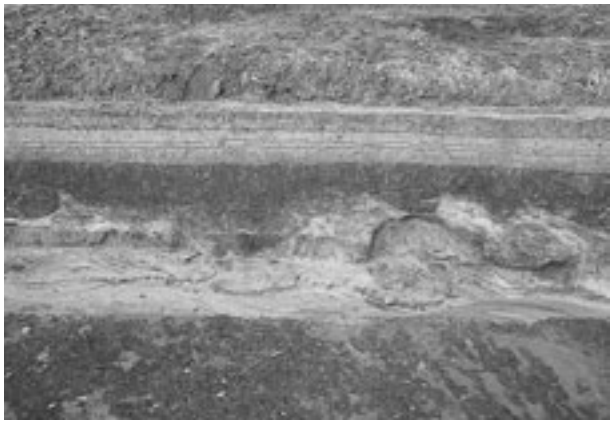
松原田中遺跡 第 1 トレンチ掘下げ状況(南西から)

松原田中遺跡 第1トレンチ南東壁断面(西から)

松原田中遺跡 第1トレンチ北東壁断面(南西から)

松原田中遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(南東から)

松原田中遺跡 第2トレンチ北東壁断面(南から)



松原田中遺跡 第2トレンチ北東壁断面(南西から)

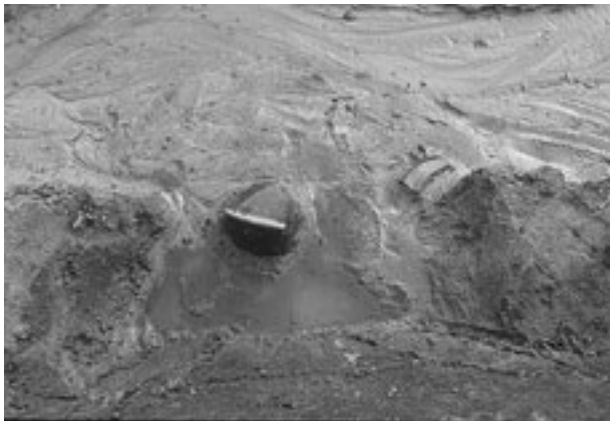
松原田中遺跡 第2トレンチ南東壁断面(北西から)

松原田中遺跡 第2トレンチ遺物出土状況(南東から)

松原田中遺跡 第2トレンチ遺物出土状況(北東から)

図版 4

松原田中遺跡 第 2 トレンチ遺物出土状況(南東から)



松原田中遺跡 第 2 トレンチSK02遺物出土状況(南西から)

松原田中遺跡 第 2 トレンチP01柱根出土状況(西から)

松原田中遺跡 第 3 トレンチ第 4 層遺構検出状況(南東から)

松原田中遺跡 第 3 トレンチ第 4 層ピット検出状況(北西から)

松原田中遺跡 第 3 トレンチ掘下げ状況(南東から)

松原田中遺跡 第 3 トレンチ北東壁断面(南から)

松原田中遺跡 第3トレンチ南西壁断面(東から)

松原田中遺跡 第3トレンチ南東壁断面(北西から)

松原田中遺跡 第3トレンチ北西壁断面(南東から)

松原田中遺跡 第3トレンチSK-02断面(北東から)

松原田中遺跡 第3トレンチSK-02遺物出土状況(北東から)

松原田中遺跡 第3トレンチSK-02遺物出土状況(南西から)

松原古墳群 調査地遠景(北から)

松原古墳群 第21トレンチ掘下げ状況(北東から)

松原古墳群 第22トレンチ掘下げ状況(南西から)

図版 6

良田山廻所在遺跡 調査地遠景(北から)

良田山廻所在遺跡 第 1 トレンチ掘下げ状況(西から)

良田山廻所在遺跡 第1トレンチ南壁断面(北西から)

良田山廻所在遺跡 第 1 トレンチ東壁断面(西から)

良田山廻所在遺跡 第 2 トレンチ掘下げ状況(東から)

良田山廻所在遺跡 第 2 トレンチ南壁断面(北東から)

良田山廻所在遺跡 第 2 トレンチ西壁断面(東から)

良田稲場所在遺跡 調査地遠景(北東から)

良田稲場所在遺跡 第 1 トレンチ掘下げ状況(西から)

良田稲場所在遺跡 第 1 トレンチ南壁断面(北西から)

良田稲場所在遺跡 第 1 トレンチ東壁断面(西から)

良田稲場所在遺跡 第 2 トレンチ掘下げ状況(東から)

良田稲場所在遺跡 第 2 トレンチ南壁断面(北東から)

良田稲場所在遺跡 第 2 トレンチ西壁断面(南東から)

良田稲場所在遺跡 第 3 トレンチ掘下げ状況(東から)

良田稲場所在遺跡 第 3 トレンチ南壁断面(北西から)

図版 8

良田稲場所在遺跡 第 3 トレンチ西壁断面(東から)

良田稲場所在遺跡 第 4 トレンチ掘下げ状況(西から)

良田稲場所在遺跡 第 4 トレンチ東壁断面(西から)

良田稲場所在遺跡 第 4 トレンチP01 断面(西から)

良田中道所在遺跡 調査地遠景(北東から)

良田中道所在遺跡 第 1 トレンチ掘下げ状況(南東から)

良田中道所在遺跡 第 1 トレンチ北東壁断面(西から)

良田中道所在遺跡 第 1 トレンチ北西壁断面(南東から)

良田中道所在遺跡 第1トレンチSK-01検出状況(南東から)

良田中道所在遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(南東から)

良田中道所在遺跡 第2トレンチ北東壁断面(西から)

良田中道所在遺跡 第2トレンチ南東壁断面(北西から)

良田中道所在遺跡 第3トレンチ掘下げ状況(南東から)

良田中道所在遺跡 第3トレンチ北東壁断面(西から)

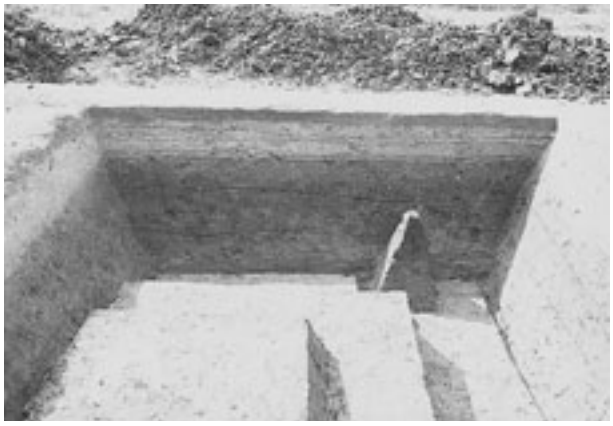
良田中道所在遺跡 第3トレンチ北西壁断面(南東から)

良田中道所在遺跡 第3トレンチSD-01検出状況(南西から)

図版10

良田中道所在遺跡 第3トレンチSD-02検出状況(南西から)

良田中道所在遺跡 第4トレンチ掘下げ状況(南東から)



良田中道所在遺跡 第4トレンチ北西壁断面(南東から)

良田山廻古墳群 調査地遠景(北西から)

良田山廻古墳群 第5トレンチ掘下げ状況(北西から)

良田山廻古墳群 第6トレンチ掘下げ状況(西から)

良田山廻古墳群 第6トレンチSK-01断面(南から)

良田山廻古墳群 第6トレンチSK-01検出状況(南から)

良田山廻古墳群 第７トレンチ掘下げ状況（北から）

良田所在古墳群 第１トレンチ掘下げ状況（南西から）

良田所在古墳群 第２トレンチ掘下げ状況（南から）

良田所在古墳群 第３トレンチ掘下げ状況（北東から）

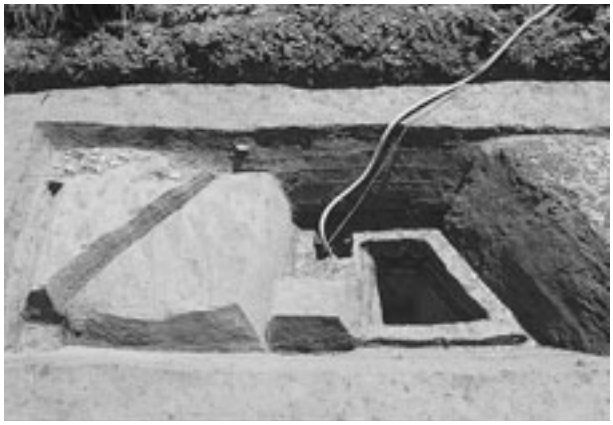
良田所在古墳群 第４トレンチ掘下げ状況（南から）

良田所在古墳群 第５トレンチ掘下げ状況（南東から）

大桙遺跡 第15トレンチ調査地（北東から）

大桙遺跡 第15トレンチ掘下げ状況（北東から）

図版12



大桙遺跡 第15トレンチ南東壁断面(北西から)

大桙遺跡 第15トレンチ南東壁断面(北西から)

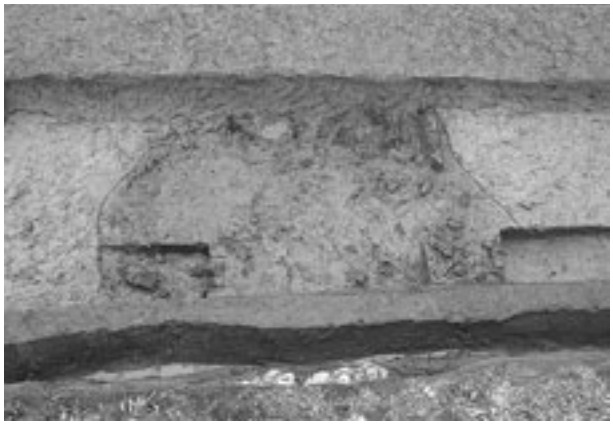
大桙遺跡 第16トレンチ調査地(南西から)

大桙遺跡 第16トレンチ掘下げ状況(南西から)

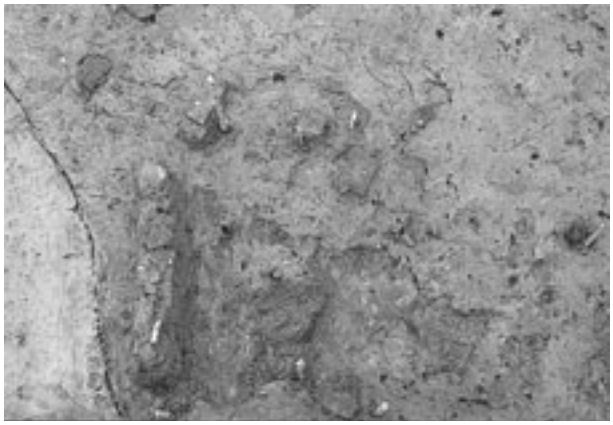
大桙遺跡 第16トレンチ南東壁断面(西から)

大桙遺跡 第16トレンチ北東壁断面(南西から)

大桙遺跡 第16トレンチ遺構検出状況(南西から)



大桙遺跡 第16トレンチSK-01検出状況(南東から)



大桙遺跡 第16トレンチSK-01遺物出土状況(北西から)

大桙遺跡 第16トレンチSK-02検出状況(東から)

天神山遺跡 調査地遠景(北西から)

天神山遺跡 第5トレンチ掘下げ状況(東から)

天神山遺跡 第5トレンチ東壁断面(西から)

天神山遺跡 第5トレンチ西壁断面(東から)

天神山遺跡 第6トレンチ掘下げ状況(東から)

天神山遺跡 第6トレンチ掘下げ状況(南から)

図版14

天神山遺跡 第6トレンチ東壁断面(西から)

天神山遺跡 第6トレンチ西壁断面(東から)

天神山遺跡 第7トレンチ掘下げ状況(東から)

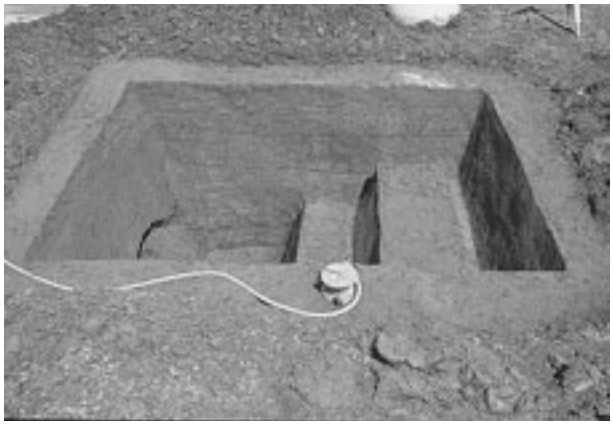
天神山遺跡 第7トレンチ掘下げ状況(南から)

天神山遺跡 第7トレンチ西壁断面(東から)

天神山遺跡 第7トレンチ東壁断面(西から)

天神山遺跡 第7トレンチ溝状遺構検出状況(東から)

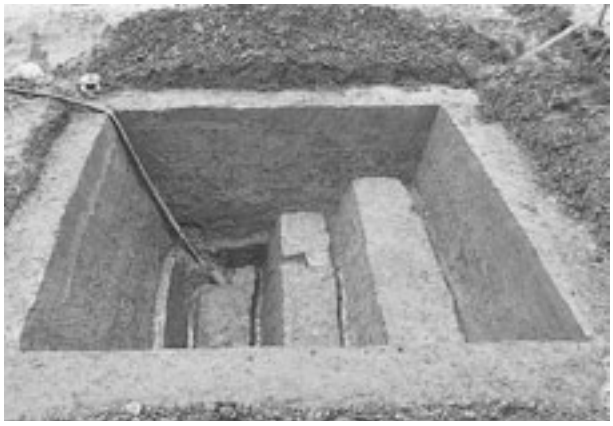
天神山遺跡 第7トレンチ溝状遺構検出状況(南から)



秋里遺跡 第１トレンチ掘下げ状況(西から)

秋里遺跡 第１トレンチ東壁断面(西から)

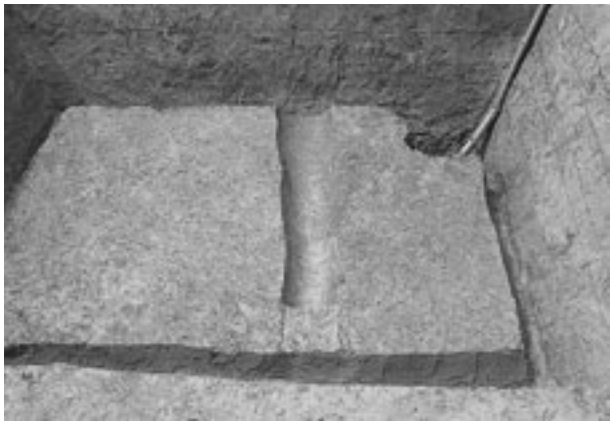
秋里遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(北から)



秋里遺跡 第２トレンチ掘下げ状況(東から)

秋里遺跡 第２トレンチ東壁断面(西から)

秋里遺跡 第２トレンチSD-01断面(南から)



秋里遺跡 第２トレンチSD-01検出状況(北から)

秋里遺跡 第３トレンチ掘下げ状況(東から)

図版16

秋里遺跡 第3トレンチ西壁断面(東から)

橋本所在遺跡 調査地遠景(西から)

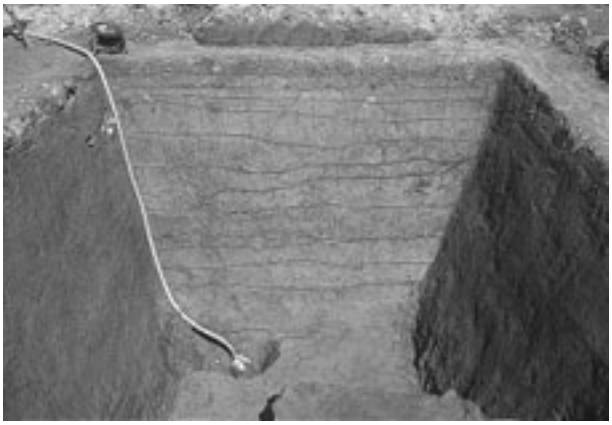
橋本所在遺跡 第1トレンチ掘下げ状況(東から)

橋本所在遺跡 第1トレンチ北壁断面(南西から)

橋本所在遺跡 第1トレンチ東壁断面(西から)

橋本所在遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(東から)

橋本所在遺跡 第2トレンチ北壁断面(南から)



橋本所在遺跡 第2トレンチ東壁断面(西から)

橋本所在遺跡 第3トレンチ掘下げ状況(東から)

橋本所在遺跡 第3トレンチ北壁断面(南東から)

橋本所在遺跡 第3トレンチ東壁断面(西から)

橋本所在遺跡 第4トレンチ掘下げ状況(西から)

橋本所在遺跡 第4トレンチ南壁断面(北から)

橋本所在遺跡 第5トレンチ掘下げ状況(東から)

橋本所在遺跡 第5トレンチ南壁断面(北から)

卯垣所在遺跡 第1トレンチ掘下げ状況(北西から)

図版18

卯垣所在遺跡 第１トレンチ南壁断面（北から）

卯垣所在遺跡 第１トレンチピット検出状況（北西から）

卯垣所在遺跡 第２トレンチ掘下げ状況（北東から）

卯垣所在遺跡 第２トレンチ北東壁断面（南西から）

卯垣所在遺跡 第２トレンチ北西壁断面（東から）

用瀬安蔵所在遺跡 調査地遠景（北西から）

用瀬安蔵所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況（西から）

用瀬安蔵所在遺跡 第１トレンチ南壁断面（北から）

鳥取城下町関連遺跡 第１トレンチ（東から）

鳥取城下町関連遺跡 第２トレンチ（南から）

鳥取城下町関連遺跡 第３トレンチ（西から）

鳥取城下町関連遺跡 第２・３トレンチ（南から）

鳥取城下町関連遺跡 第４トレンチ（西から）

太閤ヶ平 調査トレンチ（南西から）

鳥取城跡第24次調査 第１トレンチ（南西から）

鳥取城跡第24次調査 第１トレンチ天井石除去後（北西から）

図版20

鳥取城跡第24次調査 第１トレンチ溝(北東から)

鳥取城跡第24次調査 第２トレンチ(北東から)

鳥取城跡第24次調査 第２トレンチ溝(北東から)

別府所在遺跡 調査トレンチ(東から)

岩倉所在遺跡 調査地遠景

岩倉所在遺跡 第２トレンチ

岩倉所在遺跡 第１トレンチ

善田傍示ヶ崎遺跡 出土遺物

松原田中遺跡 出土遺物

図版22

14

15

16

17

18

松原田中遺跡 出土遺物

1

2・3

大桷遺跡 出土遺物

3

4

6

天神山遺跡 出土遺物

9

10

12

天神山遺跡 出土遺物

1

2

秋里遺跡 出土遺物

2

5

卯垣所在遺跡 出土遺物

2

岩倉所在遺跡 出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいせい22　ねんど　とっとり　しない　いせき　はっくつ　ちょうさ　がいよう　ほうこくしょ
書名	平成22(2010)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	谷岡陽一　加川崇　坂田邦彦　細田隆博　前田均　山田真宏　谷口恭子　神谷伊鈴
編集機関	鳥取市教育委員会
所在地	〒680-8571　鳥取市上魚町39番地
発行年月日	2011年3月24日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
善田傍示ヶ崎遺跡（よしだぼうじがさきいせき）	鳥取市青谷町善田（とっとりしあおやちょうよしだ）	3120	18-0438	35°30′40″	133°59′56″	20100303～20100319	85.2	河川改修 福祉関連施設建設
松原田中遺跡（まつばらたなかいせき）	鳥取市松原（とっとりしまつばら）	3120	1-0411	35°29′37″	134°07′48″	20100305～20100318	63.0	道路整備
松原古墳群（まつばらこふんぐん）	鳥取市松原（とっとりしまつばら）	3120		35°29′32″	134°08′18″	20100811～20100817	22.2	道路整備
良田山廻所在遺跡（よしだやまめぐりしょざいいせき）	鳥取市良田（とっとりしよしだ）	3120		35°29′31″	134°09′10″	20100426～20100507	42.0	道路整備
良田稲場所在遺跡（よしだいなばしょざいいせき）	鳥取市良田（とっとりしよしだ）	3120	1-0418	35°29′36″	134°09′06″	20100506～20100513	69.5	道路整備
良田中道所在遺跡（よしだなかみちしょざいいせき）	鳥取市良田（とっとりしよしだ）	3120	1-0417	35°29′33″	134°08′54″	20100518～20100602	103.2	道路整備
良田山廻古墳群（よしだやまめぐりこふんぐん）	鳥取市良田（とっとりしよしだ）	3120		35°29′31″	134°09′14″	20100514 20101018～20101019	29.1	道路整備
良田所在古墳群（よしだしょざいこふんぐん）	鳥取市良田（とっとりしよしだ）	3120		35°29′32″	134°08′58″	20100924～20100927 20101118	38.4	道路整備
大桷遺跡（だいかくいせき）	鳥取市大桷（とっとりしだいかく）	3120	1-0261	35°29′32″	134°11′17″	20100902～20100910	50.0	道路整備
天神山遺跡（てんじやまいせき）	鳥取市湖山町南（とっとりしこやまちょうみなみ）	3120	1-0327	35°30′26″	134°10′36″	20100222～20100301	14.5	下水道整備
秋里遺跡（あきさといせき）	鳥取市秋里（とっとりしあきさと）	3120	2-0008	35°31′28″	134°12′52″	20100514～20100520 20101216～20101221	42.4	道路整備
橋本所在遺跡（はしもとしょざいいせき）	鳥取市橋本（とっとりしはしもと）	3120		35°27′36″	134°13′40″	20100712～20100728 20101027～20101111	88.0	道路整備
卯垣所在遺跡（ぼうがきしょざいいせき）	鳥取市卯垣（とっとりしぼうがき）	3120		35°29′29″	134°15′35″	20100427～20100507	21.3	道路整備
用瀬安蔵所在遺跡（もちがせあぞうしょざいいせき）	鳥取市用瀬町安蔵（とっとりしもちがせちょうあぞう）	3120		35°18′45″	134°11′25″	20100319	10.5	道路整備
鳥取城下町関連遺跡（とっとりじょうかまちかんれんいせき）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	3120		35°30′14″	134°14′14″	20091207～20091214 20100909～20100917	19.9	駐車場整備
鳥取城跡第24次調査（とっとりじょうあとだいにじちょうさ）（鳥取城堀端（とっとりじょうほりばた））	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	3120		35°30′27″	134°14′7″	20100125～20100129	9.7	バス停整備
太閤ヶ平（たいこうがなる）	鳥取市小西谷（とっとりしこざい）	3120	2-0212	35°30′40″	134°15′24″	20091214～20091217	12.1	無線基地局整備
別府所在遺跡（べふしょざいいせき）	鳥取市用瀬町別府（とっとりしもちがせちょうべふ）	3120		35°20′20″	134°10′50″	20101001	8.6	道路整備
岩倉所在遺跡（いわくらしょざいいせき）	鳥取市岩倉（とっとりしいわくら）	3120		35°29′16″	134°15′35″	20101110～20101118	30.0	道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
善田傍示ヶ崎遺跡	散布地	古墳・奈良時代	木器溜り	田下駄、斎串	試掘調査として実施
松原田中遺跡	散布地	弥生時代	土坑、溝状遺構、ピット	弥生土器、土師器、玉未製品	試掘調査として実施
松原古墳群	古墳				試掘調査として実施
良田山廻所在遺跡	散布地	中世		瓦質土器	試掘調査として実施
良田稲場所在所遺跡	散布地		ピット		試掘調査として実施
良田中道所在遺跡	散布地		溝状遺構	土師器	試掘調査として実施
良田山廻古墳群	古墳				試掘調査として実施
良田所在古墳群	古墳				試掘調査として実施
大桷遺跡	散布地	縄文・弥生	溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器	試掘調査として実施
天神山遺跡	中世城館	中世	溝状遺構、土坑状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	試掘調査として実施
秋里遺跡	集落	弥生・古墳	土坑、溝状遺構、ピット	弥生土器、土師器	試掘調査として実施
橋本所在遺跡	散布地			土師器	試掘調査として実施
卯垣所在遺跡	散布地	古墳時代		土師器、須恵器	試掘調査として実施
用瀬安蔵所在遺跡	散布地				試掘調査として実施
鳥取城下町関連遺跡	散布地	近世		瓦	試掘調査として実施
鳥取城跡第24次調査（鳥取城堀端）	城跡	近世	溝	瓦	試掘調査として実施
太閤ヶ平	中世城館	中世			試掘調査として実施
別府所在遺跡	散布地				試掘調査として実施
岩倉所在遺跡	散布地			土師器	試掘調査として実施

平成22（2010）年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成23（2011）年３月発行

編集　鳥　取　市　教　育　委　員　会
発行　〒680-8571　鳥取県鳥取市上魚町39番地
TEL（0857）20-3367

印刷　株　式　会　社　鳥　取　平　版　社
〒680-0845　鳥取市富安一丁目79
TEL（0857）24-7311